
東方短編集 ~ The Different Story

影猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方短編集 ｝ The Different Story

【Nコード】

N2986L

【作者名】

影猫

【あらすじ】

ある少女は呟く。「こんな腐れきった運命なんて、信じないわ」

ある少女は言う。「これが運命なら、繋がってるのかもしれないわね。もしかしたら私と貴女には何か、あるのかもしれない」

幻想は消えない。あるのはただ一つの可能性。

何かが少しずつおかしくなっていく。巡る前とは違う可能性が。

これは東方短編集「The Another Story」の続編です。
こちらをお読みになる前に前作を読んで下さい。お願いします。

消えぬ虹に、消えぬ三日月 前編（前書き）

東方知ってる方推奨。

東方の二次創作です。

同人誌の影響受けすぎです。

二次設定入ったりします。

オリキャラはいません。

果てなき願いに何を思うか

消えぬ虹に、消えぬ三日月 前編

「……私は謝らなきゃいけない」

「どうして、ですか」

ベッドに横たわる紫の髪の女性が時折、咳き込みながら赤髪の少女に向かって話す。

「貴女を魔界から召喚したというのに……、貴女を、魔界に還せないなんて……」

赤髪の少女は思う。

この女はいつもそくだ、私は召喚された時点で魔法使いの”奴隷”のようなものなのに、彼女は私を同じ人間のように扱う。

だから、だろうか。彼女の死が近付いてる筈なのに、私の事を案じていたことに苛立ちを覚えた。

「なに、いつてるんですか」

「私は……」

呼吸が乱れながらも言葉を紡ぐ彼女を見て、私は拳をぎゅっと握った。

「私の心配よりも、自分の心配をして下さいッ。私は、私の事なんかどうだっていいから……！」

私は彼女の枕元に薬を置いた。

私が仕事をしてお金を貯めて買った薬。今のご時世、薬を買うなん

て行為はよほどの金持ちしかやらなかったため、私が金を差し出した時は薬屋が目を丸くしたのは今でも覚えている。

「私は……、貴女の元から去ります。それが一番の方法だから」

赤髪の少女は黒いコートを羽織り、毛糸のマフラーを持ってその家を出た。

彼女を、振り返らずに。出る間際、

「ありがとうございました、私は貴女を絶対に忘れません」

早口で喋った。

そつでもしないと、感情が溢れだしそつで、この決断が揺らぎそつだったから。

私に、悲しむ権利等無かつたのだから。

「例を言うのはこつちの方よ。……ありがとう、美鈴」

ボタン

扉が閉まる音を聞いて、赤髪の少女　美鈴はその扉にもたれ掛かつて、はあとため息をつく。

「あーあ、……これから行く宛も無いや」

季節は冬。

美鈴の眼前には白い雪が降り積もつていた。

妖怪の美鈴にとつて寒さはあまり感じない方だつたがさつきまでずつと暖炉にあたつていた。

そつして急激に温度が冷えて美鈴はぶるぶると震えるのであつた。

「……………」

私は、逃げた。

何年も一緒に過ごして、そして彼女に死期が迫ると知ったら、その死ぬ時を見たくないがために、私はこの家を出ていった。

薬も彼女の発作を和らげるものでしかないというのに。

妖怪風情が魔女に薬をあげる為に人間界で雑用をして金を稼ぐなんて、自分でも笑いたいくらいだ。

そう、なんて私は馬鹿なんだろうか。

時に彼女の研究を手伝い、たまに喧嘩して。

そんな平和な日常は、もうやっては来ないのだろう。

……けど仕方ない、

私がいたら、彼女は自分の体よりも私の身の振り方を考えるだろう。

彼女が死んだ後を。

必死に考えてもらっちゃ困る、彼女には少しでも長く生きてほしいから。

それでも、涙が溢れてくるのは、

ただ単に後悔しているのか、

自分の行為を正当化しているその不甲斐なさに悔しくて泣いているのか

そんな事、どっちでも良かった。

……ホントに、どっちでも良かった。

落ちてくる白い綿をぼーっと眺め、また、ため息をつく。

こんな所で立ち止まっても駄目だ、歩こう。

美鈴の履いている踝のような靴は、魔女に言わせれば東洋風なものだと言っていた。

薄手の皮で作られたそれは、温度はよく通すがとにかく丈夫なのであった。

美鈴はようやく歩き出して、足にひんやりとした感覚を感じる。

雪が積もっていた。

まるでさっきまで無かったかのように感じた。それほどまでに、美鈴はぼーっと虚空を見つめ、考えていた。

みし、みし、と歩く度に雪を踏みしめる音が鳴る。

それがなぜか可笑しくて、美鈴は何度も雪を踏みしめた。

みし、みし、みし、

みし、みし、みし

踏みしめてる間は目の前の現実から忘れられそうな気がしたから。だから、私は黙々と前へ進んだ。

ふと上を見上げたら、新月だった。

弧を描いたようなそれは、雪が降る夜空を幻想的な絵にした。

街は人気がなく、ほとんどの住民が眠っていた。

最近は切り裂き魔なんてものが出没しているせいか、子供はおろか大人さえも外に出歩こうとしない。

雪が降るなか、珍しい赤い髪をした少女というのは不思議な構図になるだろう。

美鈴はその切り裂き魔に会ってもなんとかやってのけるだろう程度にしか思っていなかった。

ある程度の武術は会得してるし、気を使つての戦い方もマスターしてる。

何よりも、相手は人間なのだ。

いやもしかしたら妖怪や魔法使いの可能性もあるが、

そこは妖怪の勘というものかただ単に美鈴が考えていなかったのかは分からないが、そんな余裕をもっていた。

「明日からは力仕事かな」

公園のベンチの雪を払い、腰掛ける。

雪はとうやら吹雪にはならず、しんしんと静かに落ちるのであった。

美鈴は回想する。

彼女と初めて出会った日の事を。

『はじめまして、悪魔さんいや、この場合は魔物？うーん、どうみてもヒトガタなんだけど……』

目の前の視界には紫の髪をした魔女が一人、本を片手にぶつぶつと呟いた。

『いや、見慣れない赤髪だし。もしかしてオリエントの人間？いやあそこは野蛮人しかいないし……』

周りを見渡すと蠟燭やら魔法陣等の召喚用の術式が揃っていた。ああそうか、と美鈴は理解した。

私はこの目の前の魔女に召喚されたのだ。

召喚出来るということは呼び出す術者は私より強いということ、術者が強い妖怪を呼べば妖怪は反発して召喚は失敗する。

私を呼び出し、疲れすら見せない彼女は一体何者なのだに興味を持ち、第一声を放つ。

『あなたは誰ですか』

と、敬語癖がついてるからだろうか、その丁寧な言葉遣いに魔女は吹き出した。

『……っ、あはははっ。……ごめんなさい、まさかそんな丁寧になくてもいいのに、

私はあなたを召し使いにするわけじゃないんだから』

『私は「よ、よろしくね。……えーと名前は?』

『美鈴です』

『めい、りん? 貴女の特徴的な緑のドレスといい、ホントに東の地から呼んでしまったりして』

なんだろうこの魔女。

と不思議に思いながら美鈴は彼女の話聞いていた。

彼女は姓をノーレッジと名乗った。

『知識』の意をもつその姓に美鈴は驚き、納得した。

ノーレッジは昔からその名に恥じない絶大な魔力を後世へと継いでいった。

その魔力は衰えるばかりか、強まっていると聞いた。

だがしかしそんな魔法の名門が、この少女というのはやはり驚かざるえない。

美鈴の中では年老いたイメージしか無く、それこそまさかこんな若い女が私より強いのだと嫌でも思い知らされ、

美鈴自身も気付かず自身の拳を握っていた。

『そうだ、召し使いにしないというのはどういうことですか?』

『そのまんまの意味よ、最近じゃ召喚した悪魔を戦争に使ったり自分の欲のために色々とやるようだけど、

私としてはそういうんじゃないなくて、ただ単に友達みたいな存在が欲しいなーとか思ってたね』

ということ召喚という魔界への干渉のリスクを負うような大きな魔法も、

彼女の前では火を起こす程度にしか考えていないのか、はたまた彼女の言う通り、友達が欲しいという願いに召喚を使ったのか。

勿論、召喚なんていう次元と次元を結び、別次元の生物を呼び起こすなんて魔法はちよつとやそつとじゃ発動出来ない。

複雑な魔法陣やら部屋には魔術的な要素を作りあげ、次元を結ぶゲートを作るための魔力を練り上げなければならない。

それに大抵の魔法使いは召喚に必要な魔力さえ足りずに失敗するのだ。

美鈴はもう一度、彼女をまじまじとみる。

紫の長髪に薄紫色の寝間着……じゃない、可愛いフリルがついたローブを羽織り、顔は色白。

その白さといったら一度も外に出たことが無いんじゃないかという程に。まるで西洋人形かのように顔立ちが整っていて、病的なまでに白い肌が目元の隈を見て美鈴はその目元の隈さえなければ一国のお姫様みたいだ、と思う。

だがしかしさっきの会話から察するに、意外と話好きなのかもしれない。

いや独り言が好きなのか、はたまた。けどまあ、美鈴は彼女が嫌いでは無かった。

『んじゃ友達ですね、よろしくお願いします』

『ええ、よろしくね』

魔女が辺りをとりまく結界を解くと、美鈴は魔法陣から出れるようになった。

そして、美鈴はようやく伸びをしてたまった息を吐き出すように深く深呼吸した。

『じゃあ、隣部屋の散らかった本を片付けてくれるかしら？』

『……へ？』

『ああ、まあ”一応”拒否権はあるのだけど。ほら、この家には貴女が喜びそうなものなんてなさそうだし、

私はずっと本を読んでも思うから。あ、この家からは出れないから。何かあつて問題が起きたら困るし。

……ということ、どうせ暇になるんだからそれくらいいいよね？うふふ』

『……貴女の素顔を垣間見た気がします。分かりました、確かに暇になるのは厄介ですし、

外に出て外界を楽しみたかったですが無理なようですし』
『よろしくね』

魔女は美鈴に笑みを作つて別の部屋に呼んだ。

廊下を歩き、その途中でこの家の事を魔女は話した。

ここは一軒家で、最近の魔法使いはあまり目立たないようにするため基本的には一般人と同じような生活をする事。

魔女の親は既に他界し、妹が一人いて、その子はどこかの名高い貴族の養子にいったということ。

ここにある本はノーレッジ家にあつた本を少しだけ持ってきたのだということ。

『少しだけ……？』

美鈴は首を傾げる。

目の前の部屋には本が沢山積まれており、本棚にも本がぎっちぎちに無造作に入れられていた。

『まあ図書館並じゃないから地下もあるのだけど』

横で魔女が物足りなさそうな声で言った。ホントにこの魔女は物足りなく感じているのだろう。

まったく、なんなんだこの魔女は。

訝しげに魔女を一瞥して、

『んじゃ、ここの本の整理終わったら地下に来て。大丈夫、ここの本は全部読んだから。……そうねえ、どうせ整理するならジャンル別にしてほしいわ』

そう言い残して魔女は床に手を起くと、地下に続く階段が出来上がる。

それをまじまじと見てる美鈴を魔女は一瞥して地下への階段を下っていった。

あ、と美鈴は思う。

よくよく考えると彼女の話術にまんまと引っ掛かった訳だ。

相手の本心を読んでそれを否定しルートを提示することで仕方ないとやらざる得ないように誘導する。

しかもあの部屋に置かれている本は数十。本を少しだけ見せることで、これなら簡単に出来そうだ、という心理を突いて、この数百の本を最後に見せた。

全く、彼女には勝てそうに無いですね。

まあ元より彼女に召喚された時点で勝ち目が無いのだけだ。

はあ、とため息をついて本を片付けようと一度に色々な本を手にとって空いている本棚に入れていく。

本が本だけに、どれも重すぎる。タイトルだけでも『爆発』やら『魔界の生物』とか開いただけで魔法が飛び出てきそうだ。

実際、美鈴は本をあまり読まないせいかな本に対して興味が無かった。

しかし、ここにあるノーレッジ家の本は世界に一冊しか無い本だったり、有名な本の原本だったりする。

けれども美鈴はその価値が分かっていなかった。

実の所、あの魔女も無造作に置くくらいだからこの本達の価値が分かっているのだろう。

いや、それ以上の価値の書物が地下にあるのかもしれないが

『終わった……』

体力に自信がある美鈴でも数百の書物を運ぶのはきついらしい。

それこそジャンル別に整理しないといけないせいか、整理のミスでまた本を移動させたりと、とにかく骨が折れる作業だった。

時刻はすっかり夜中。勿論、美鈴は夕飯を食べていないし、地下にいる魔女も食べていないのだろう。

丁度美鈴のお腹が鳴り、赤面する。

『……誰も見てないと分かっても恥ずかしいですね』

ああもつ、と毒づいて地下への階段を下る。

……不思議と、魔女に対して嫌悪感は抱かなかった。

「……朝かな」

どうやら美鈴は昔の思い出を回想していたら寝てしまったらしい。

あの寒空のなか、寝れるあたりやはり私は妖怪なのだと認識する。

……周りが人間ばかりだと、私が人間なんじゃないかすら思えてくるから困る。

わあ、と美鈴は目を輝かせて街を見渡す。

魔女と食料を買いに外を出歩いた事ぐらいしか無い美鈴にとって初めて街の大きさを実感したのであった。
今思えば仕方なかったのかもしれない。

彼女が言うには世間的に魔女や人外とかは疎まれていく傾向があるのだと。

一般人と変わらない服装で歩いたらいいじゃないですか、と聞くと『それでも何かあつたら嫌じゃない』と一蹴された。

後から聞いた話だが、教会とかいう組織には魔力を感知することが出来る奴がいるらしい、場合によっては処刑とか行われるらしく彼女が外にあまり出たがらない理由も分かった。……同時に彼女が部屋に籠って本ばかり読んでいる理由も分かった気がした。

「あー、眩しいなあ、私にもお日様の日があたるならあの人にもあつてもいいじゃない……」

天を見上げ、誰にも聞こえない声で呟く。そして美鈴は今後について考える。

結局、この世界で一生過ごす気などさらさら無かった。けれども帰る方法が無いのも事実。

「……………あれ？」

”家出”した時に忘れていた事。彼女はあの体で家事は出来るのか、
朝食すら食べられないのでは？

「ああもう、私の馬鹿！」

格好つけた癖に、戻ってくるなんて物凄く格好悪いじゃないか……。美鈴は走る。

冬の朝は、寒かった。

昨夜、雪の道をとことこと歩いてきた為か魔女の家には十分程度でついた。

「……………、こうなったら自棄です」

チャイムを鳴らし、家の扉を開ける。

扉が開いたということは、私が出た後あの魔女は鍵を閉める為にベッドから起き上がる事が出来なかったのだらう。

全く、自分は何も分かっていなかったのだ。

「おかえりなさい、お腹が減ったから何か作って頂戴」

「は、はい……………」

彼女は分かっていたのかもしれない。

美鈴が、帰ってくる事を。

その数日後、魔女狩りが始まった

「貴方の事だからあんな事言っても戻ってくるって分かってたわ」

「む……………、あまりそこは触れないで下さい。あ、お粥出来ましたよ……………」

ベッドで寝ている魔女に美鈴お手製のお粥を持っていく。

お粥の作り方も彼女に教えてもらい、ようやく出来た代物だった。

「あ、熱いのは勘弁ね。少し経ってから食べるわ」

「そうですね、んじゃこっちのテーブルに置いておきますね」

美鈴が近くにあったテーブルにお粥の入ったお椀をそっと置き、ふ

と置いてあつた新聞紙に目を落とす。

一面には、魔女狩り執行の文字。異端者や魔女を非難するような言葉がずつと続いていて心が締め付けられるような思いだった。

「魔女狩り、始めましたね」

「そうね。あ、その新聞見せて」

「気分が悪くなると思いますが……、はい。一面にこの記事ですよ、嫌になっちゃいますね」

「あら大きく書いてるわね、……教会は力が怖いが為に力で屈するか」

「はあ、とため息一つ。」

美鈴はそれを不安げに見つめる事しか出来なかった。

「怖い、ですか？」

彼女なら怖くないと思い、茶化すように美鈴は訊いた。

「……当たり前じゃない、怖いわ」

「えっ？」

まさか、と思う。

魔女の力がどれだけ強いのか、美鈴が一番分かつてるつもりだった。だからこそ、ましてや”たかが”人間相手に恐れをなすなんてことに驚いた。

魔女は、美鈴の気持ちを知ってか知らずか薄く笑って、

「よく考えてみなさい、現に魔女が殺されてるのよ？ 魔女より強いよ。」

どんなに強くたって組織相手に一人はどうしたって負ける。

よくある”ファンタジー”に悪いやつらを一人で倒すなんて話があるけどそんなの無理。

……第一に、私は魔法を戦いの道具にしたくないのよ。まあ、そういうことよ

「じゃあ……、じゃあこのまま家に留まるんですか？」
「……………」

魔女が窓越しの外の風景を眺める。

ベッドの横には日が当たるように窓が設けており、太陽の光が燦々と照らしていた。

魔女狩りが始まっているならカーテンを閉めればいいじゃないかという美鈴の問いに魔女は逆に不自然だ、という事でカーテンを開けていた。

「……………お粥が丁度いい温度になりましたよ」
「……………ありがとう」

魔女はまだ外の風景を見ていた。

数日後

……………。

魔女は見てしまった。

魔女達が手に釘を打たれ、磔にされて見せしめに使っていたことを。その意味が分かった。

教会の力を見せつけ、異教徒や人外、ましてや刃向かったものすら”このようにしてやる”という意味も込められているのだろう。死すら叶わぬ最悪の見せしめ。

外の世界をあまり知らず、本と魔法だらけの彼女にとってそれはま

さしく悪夢だった。

いずれ、私も彼処に磔にされるのではないかという恐怖に怯え、体が震えてくるのが自分でも分かった。

今美鈴は買い物に行っている。
やるなら今だ。

魔女は力を振り絞ってベッドから起き上がり、棚から星の形をした黄色の大きなブローチを取り出す。

派手なそれは、魔女の趣味でもなんにでもなかったが、美鈴が昔、欲しい欲しいと言われて渋々買ったものだった。

「そっか……、美鈴と出会ってもう一年過ぎたんだっけ」

そして私自身、もって数日だろう。

だからこそ私は美鈴に何もしてやる事が出来なくて、美鈴を魔界に還す事すら出来なくて、自分が嫌になった。

私がいなくなっても”あの子”がやっていけるように、星に、文字を彫る。

「龍」

その一字に全てを込めて、強く、優しく、全てを守れるように、と。東洋の字で魔法によって彫られたそれはまさしく龍であった。

曰く、龍は何人よりも強く

曰く、龍は何人よりも優しく

魔界という、妖怪が住まう世界があるならば、もしかしたら龍がいる世界もあるのかもしれない。

走り書きで書いた便箋を添えて星のブローチと共に棚に仕舞うとき

だった。

突如、鼓膜を突き破るかのような爆音が響いた。

手にもっていたものをすぐさま後ろに隠し、魔女は咄嗟に風の魔法を発動させる。

教会の騎士がすぐそこまで来てる……？

否、もう来てる。

爆音の正体は扉を突き破った音だと分かった。

風の魔法で前方から来る騎士を吹き飛ばし、すぐさま結界を張り巡らし、外部から分らないように外から見えない壁を作り出す。

ここまで数秒しか経っていなかった。

騎士達は驚いたことだろう、吹き飛ばされて気付いたら目の前は扉が元通りになって、突入した途端見えない壁にぶつかるのだから。

「あああ、と息を切らし、” 久々” の魔法の行使に頭が朦朧とする。

美鈴は、美鈴は……?!

「買い物か……」

汗を拭い、これからどうするかを思案する。……籠城するしか、策はないのかもしれない。

それとも魔界や別世界に行くか？……無理だ、そこまで私に魔力は残っていない。

魔力は謂わば生命エネルギーだ。もうすぐ死ぬような奴に魔力なんてほとんど無かった。

結界を張ってる時点で寿命を縮めてるようなものだ、
魔女に残された時間は少ししか無かった

ああもう！

と魔女は吐き出すかのように叫ぶ。

「最後まで平和に過ごさせてくれないのかしら！」

ぼやきながら、次の手を考える。

相手は教会の狗と言えど、その集団的戦法と圧倒的な武装に国で一番強い組織とすら呼ばれている。

……彼らに籠城は慣れてるだろう、特に魔女相手には。足が震えてきた。

それが、徐々に立ったせいなのか恐怖による震えなのか分からなかった。

最悪のケースを考え、そこからの最善策を導き出す。

……あれ？

「私にとっての最善策は、なに？」

私にとっての、最善策。

「なによ、美鈴はいないし籠城する意味すら無いじゃない……」

考えるとするなら、生への執着といったところか。

だけど、もって数日の寿命が数刻へと変わっただけ。

そう、ただそれだけ。

「大丈夫ですか!？」

その声を聞くまで。

魔女が振り返ると、そこには赤髪の妖怪が息を切らして買い物袋を

提げていた。

魔女は驚きで目が見開き、咄嗟に星のブローチをさっと隠す。

「美鈴、どこから侵入出来たの……？」

問題はそれだ、侵入できる穴があるなら今こうしてる時間もない。だが、美鈴から返ってきた答えは予想を斜めにいった。

「煙突ですよ、ほら私ってば魔法はあまり得意じゃないんですけど体術とか得意で。」

脚力を活かしてこの家の屋根までジャンプしたんですよ。……まあ途中で鎧を着けた物騒な連中に槍で突かれそうになったんですけど」

そういいながら美鈴はあははと力なく笑って、緑色の東洋のドレスをぱんぱんと叩いて煙突から侵入したときについたであろう煤を落としていく。

「美鈴、今何時かしら」

「あ、ここから外の景色分からないんですね。えーっと、確か夕刻あたりだったような気がします。もうすぐ夕飯の時間です」

「ありがとうございます、美鈴よく聞いて。……私は教会の騎士達に狙われたけど私には魔力が残っていないし、私に残された時間もない。だから美鈴、私は貴女に逃げて欲しい」

「なに、いつてるんですか……」

美鈴の肩が震える。魔女は美鈴の優しさを犇々と感じてしまった。

……どうか、その優しさだけは”変わらない”ように。

「貴女も逃げるんですよ！私と！それこそ、地の果てにでも、きつ

と私達二人を受け入れてくれる場所が！街が！だから、だからっ！
……そんなこと言わないで下さいよ」

泣きの懇願。私だって、貴女ともう少しだけ普通に暮らしたかった。でもね、それが無理という事は”魔女”である私が一番よく分かっている。

「ごめんね」

「だったら……！」

結局、私達はどこにいったとしても、何れにしろ私は死ぬ。

……美鈴を独りにさせたく無かった。

「よく聞いて、美鈴。この家の玄関を軸に二時の方向、その方向の先に、街外れの先にでっかい屋敷があるわ。そこには貴女みたいな妖怪も受け入れてくれる筈よ。……行きなさい美鈴。私には時間が無いの」

「そんな……」

「私が最初に最後に貴女に命令してあげる、私が言った屋敷に向かって幸せに暮らしなさい」

「……………っ、分かりました」

美鈴の涙を魔女が拭う。えっ、と溢す美鈴にくすつと笑う。

魔女の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「これ、貴女に」

「これってもしかして……」

龍、と彫られた大きな星のブローチを美鈴に手渡す。

「ええ、昔買ったやつ。お守り代わりにどうかしら」

「この彫られた字は……？」

「それは漢字よ、龍っていう強い生き物。貴女にいろんな願いを込めたわ」

「ありがとうございます……、貴女の事は絶対に、絶対に忘れません！」

「私も美鈴。この一年間、楽しかったわ。例を言うのは私の方かもしれないわ、ありがとうございます」

煙突へ続く暖炉の前で、魔女が美鈴を抱き締める。

あつという間のようで、二人には長い時間を感じられた。

「あ、くれぐれも騎士達を攻撃しちゃ駄目よ？貴女まで狙われる道義はないのだから、そうそう私の風魔法で一気に運んであげるから」

「あはは……、かたじけないですね」

美鈴が暖炉の中に入る。

端から見ればシユールな光景も、騎士達を取り囲んでいるとなるとシリアスとなる。

「最後に」

美鈴が口を開く。

「私は元の世界に戻れなくても後悔してませんよ、貴女に会えて良かった……！」

優しく、包み込むようなその言葉に魔女は涙が出そうになる。

こんな姿見せられないと、思い暖炉の背に立って話す。

「……また会えるといいですね」
「そうね、会えたら……。ふふっ、また会ったらそのお守りを頂戴」
「分かりました、大切にしますね」
「美鈴」
「なんでしよう」
「幸せに、なつてね」
「……っ、はい！」

刹那、風の魔法が美鈴を煙突の外へと舞い上がらせた。

これでいい、
これでいいのよ。

ふらふらの足でベッドにへと、向かう。

どうせなら、殺されたくない。
どうせなら、静かに死にたい。

そんな思いが頭を駆け巡る。

美鈴は無事あの包囲網から抜けられただろうか。

美鈴は、美鈴は。

死期が迫っているのだろう、

美鈴との思い出が走馬灯のように思い出す。

いや、もしかしたらこれが走馬灯なのだろう。

この一年が、どれだけ楽しかったか。涙が出てくるくらい、輝いた
一年間だった。

最初で最後の”友達” その友達に別れを告げて。

ベッドに眠るように、目を閉じる。

……目を閉じてても、涙が溢れてきた。

私が死ねば結界は消えるだろう、せめて、その時までには、あの頃を

懐かしみ、眠りたい。

ああ、またあの頃に帰りたいな。

私にも、いや来世では、お天道様の光を浴びて、美鈴と散歩してみたいな。

そんな願いを、乾いた笑みで吹き飛ばし、

「あり……が……とう」

さようなら、

絶対に、忘れないから

耳を貫くかのような風の轟音、重力を無視するような風の力によって、美鈴は魔女の屋根へと舞い降りた。

周りに騎士がいることを懸念して、身を屈めながら周りを見渡す。地平線の向こうは夕日が沈みかけようとしていた。

美鈴は彼女が言った方向を向いて、屋根から屋根へと飛び移れる場所を探す。

魔女の家から出てきたのだ、美鈴自身追われることは想定していたが、重たそうな重装備に足で勝負するくらいいけないと思っていた。

「……………ありがとうございました」

深緑色の帽子に彼女から貰った”お守り”をつける。

彼女が美鈴の心の中で生きている印に。

粗方、向かうべき方向のルートを考える。

屋根から屋根へと跳び移り、人が外出しない夜に道を走ることにした。

その時、教会の狗が家を蹴破る音がした。

騎士達の吠えるような雄叫びに、鉄の鈍い音が、一帯に響き渡った。

「……………ッ」

思わず拳を握ってしまう。

こんなに人間が憎いと思ったのは初めてだった。

今すぐにでも、この家を荒らす人間共を一人残らず血祭りにあげた

かった。

その少女に、穢れた手で触るな、と

今にも叫びたい衝動なんとか抑え、畜生……！と小さく涙を堪えるように絞り出す。

一体彼女が何をした？

平和に、日の当たる場所で暮らしたかったのに。

なんで、こんなにも、

この世界は不条理な出来事で埋め尽くされているのだろうか。

美鈴は走った。

あの後、あの家がどうなったのか分からない。

後ろを振り返ってしまったら、引き返してしまいそうだったから。誰かにぶつかりそうになったり、馬車にもぶつかりそうになった。だけど美鈴は立ち止まらなかった。

立ち止まったら、そのまま走れなくなりそうだから。

だから、美鈴は走る。

目の前の現実から、

この不条理な世界から。

街は美鈴の思っている以上に広く、大きかった。

……あれから三時間、美鈴は走り続けた。

都会のような喧騒は消え去り、辺りは眠るかのように静まり返っていた。

「……………はあ……………はあ……………」

美鈴の息づかいだけが、この静寂を切り裂いた。
走り続けたのがこの様だ。
足は笑えるくらい震えてるし、目元は涙で赤く腫れて涙を拭うことすらままならない。

けど、

「さようなら」

美鈴はようやく振り返る。

夜の外灯が美鈴を照らしていた。

そして、美鈴は街を出た。

それから屋敷への道のりは長くは無かった。

「……大きいですね」

遠目から見ても分かる大きな屋敷に美鈴は眼を見張る。

月光を受けたそれは、ある意味ホラーなのだが、そんな感じはしなかった。

けど、不思議な感じがした。

そもそもその屋敷から”明かり”が全然見えないのだ。

「それでも、私は進まない」と

そして、一步、一步を踏みしめる。

小高い丘に建てられた屋敷へと。

ざっ、ざっ、と屋敷へ向かうこと数十分。

美鈴はようやく屋敷の門へと辿り着いた。

「おかしいですね……」

美鈴は首を傾げる。

屋敷の門が無造作に開かれていたのだ。誰かが閉め忘れたか？と思っただがこのご時世にそんな間抜けはいないだろう。

「まあ、深く考えていたら埒があきませんしね」

美鈴は門の中に入った。

キィーツと耳障りのような音が響き渡る。

そして、美鈴は目にした。

「これって……」

屋敷の扉は無造作に開け放たれていた。

屋敷の中のシャンドリアも何もかもが美鈴の立ち位置からでも見え
た。

流石に、この訳の分からない”異常”に美鈴は身の危険を感じる。
玄関である扉が開けられていると言うことは、ここは空き家なのか。
いやそれとも誰も住んでいないのだろうか。……なら、あの魔女は
そんな場所を私に託さない筈

一陣の風が吹いた。

頬を撫でるような風に美鈴は顔をしかめる。

それは冬の冷たい風とか、そういう類いではなくて

「なんですかこの臭いは」

錆びた鉄のような、それでいて何か無機質な嫌な臭い……

まさか、
鼻をつまみながら、辺りを見渡し、
ふと美鈴の足元を眺め

「 ツ！？」

” それ” の状態に美鈴は咄嗟に後退る。

美鈴の足元には” 血の ” 水溜まりが出来ていた。

それすら土に染み込み、まるで粘土のような色になっていた。

何故気付かなかったのか、というよりも、何故血があるのかという疑問に美鈴の鼓動が早くなる。

確実に、この屋敷に何かが起きていた。

美鈴は決死の思いで、屋敷の中に入る。

入った途端、絨毯がびちゃびちゃと音を立てた。

「 嘘
」

指で絨毯にちよんとつけると、指は赤色に染まっていた。

絨毯に血が染み込んでいる……！乾いてないということは、この数時間の間に起きたということになる。

美鈴は屋敷の中を見渡す。

貴族が住むような豪華な屋敷だった。けれどもシャンデリアの明かりは消えて、

光という光は窓から溢れる月の光のみだった。

そして、” なにもなかった”

血が大量に流れていると言うことは、当然死体がある筈なのだ。

……それが、一つも見つかからない。まるでマジックのように。訳の分からない出来事に美鈴は困惑し、恐怖した。不思議な感じがした屋敷も、今では禍々しく見えてしまう。

ぴちゃりと足音が聞こえた。

「あなた、誰？」

後ろから、冷たい言葉が聞こえた。

美鈴は振り返った。

ぴちゃりぴちゃりと、血飛沫が音を立てた。

声の主を直視する。どうやら女性のようだった。

金の艶やかな髪の毛を伸ばし紫のドレスに身を包んでいて、手には日傘を携えていた。

端正な顔立ちだな、と美鈴は心のどこかでうつすらと思う。

「……貴女、妖怪ね」

「えっ、いやその……」

女性の凶星ともいえる指摘に、美鈴はたじろぐ。

少し前まで教会という組織が魔女を殺していたのだ、下手に答えてしまったら？

「……ま、いいわ。”彼の”約束じゃあ”この門を含めた一体の土地”だったし。」

それに、妖怪がこの世界にいるのは住みづらいでしょう……？」

「え……、あ」

決めかけていた。彼女が教会の人間なのか。

というか彼女の言っている意味が分からなかった。

けれど徹底的なのは、何故妖怪なのだと分かったのか、そして教会や魔女というキーワードが出てこない。

「貴女に聞くわ。あなたはこの世界に留まりたい？」

この不条理な世界に……？ 嫌だ、魔女がいない世界だなんて。生まれながらにして運命付けられる、本人が望んでも叶えられない、そんな世界に、私は。

「いや、です」

金髪の女性が、笑った。……そんな気がした。そして私の目の前が真っ暗になった。

フツ、と糸が切れたように。

消えぬ虹に、消えぬ三日月 後編

.....。

「.....んっ」

鳥の囀りが聞こえた。

次いで、日の光を感じた。

目蓋の裏が熱い。

意識が覚醒し、美鈴はよろりと立ち上がる。

.....いつの間にか気絶してしまったようだ。あれはなんだったんだ
と思い、辺りを見渡す。

どうやら、私が倒れていた所は血が溢れた絨毯から少し外れた場所
だった。

そして、溢れる日の光で美鈴は朝なのだと認識する。

「こんな気味の悪い所に長居しない方がいいですね」

そう呟いて美鈴は屋敷から出る。

太陽が昇ったせいかわ、この屋敷をまじまじとみると赤を基調にした
屋敷なのだと分かった。

辺りは草原が広がり、その向こうには大きな湖が広がっていた。

.....湖？

変な胸騒ぎがして美鈴は走った。

門をはね除け、”まっ平らな”草原を翔る。

……まっ平ら？

確かこの屋敷に来たときは丘の上にあった筈。
美鈴は走る。

湖に向かつて。

それが本当なのか確かめたくて。

「……嘘」

湖に駆け寄る美鈴。

ちやぷん、と湖に手を入れたら少し冷たかった。

……頬をつねったら、痛くて、これは夢じゃないのだと確認する。

湖の向こうを眺める。

森林の向こうには私が見たことのない、山々が聳えていた。

「そつだ、あの女性は」

咄嗟、周りを見渡しても女性の姿はおろか、人の影すらなかった。

はあ、とため息を漏らして、宛が無くなった美鈴は途方もなく歩き続けるのも嫌なせいか、

あの気味の悪い屋敷に戻るしかなかった。

なにがなんだか分からない、と呟いて。

屋敷に戻りながら、美鈴は周りを眺めながら考える。

ひんやりとした風が吹いているが、昨日や一昨日のような冬の寒さとは違った。と、すると。

あの女性が言っていたことは、

……ん、女性？

「あれ……？」

屋敷に現れた”人間”は誰だった？

……いや、そもそも私は誰かに会ったか
ズキリ、と頭が痛くなる。

あれ？あれれ？と美鈴はもう一度”屋敷で起こったこと”を回想する。

何かが、何かが自分の中で消えかけていた。

屋敷に入り、血で濡れた絨毯に驚いて、気絶した？

いや、多分、きっとそうだ。

でも、身体が凍てつくようなこの感覚は何？

美鈴は金髪の女性と出会った事を忘れていた。

出会って数十秒という僅かな時間、けれどもその原因たる数十秒の記憶が朝霧のようにぼやけて、消えていた。

屋敷についた。

いつのまにか、門と玄関の扉が閉じていた。

ということは誰かいるということ？

美鈴は深呼吸して、拳をぎゅっと握りしめる。

どのみち、この屋敷に頼らざる得ないのは美鈴が一番分かっていた。
門を開けて、屋敷の扉に手をかける。

ギイイイイ

と軋む音と共に扉が開け放たれる。

「あなた、誰」

美鈴は呆気に取られた。

目の前には自分より一回り小さな少女が一人。
薄紫色のローブに紫の長い髪をしていて、顔は色白、寝ていないの
が目元に隈が出来ていた。

そう、あの魔女に似ていた。

「あ、あつ……」

「もう一度聞くけど、あなたは誰？」

「と、通りすがりの旅人ですっ！」

「旅人ねえ……、んじゃこの世界に詳しいのかしら？」

「この世界？」

「屋敷が一夜にして門を含む一帯をどこか別の場所に移動したらしいの、貴女は私達の世界の人？」

「はい。旅の途中で迷っちゃって、あはは、まさかそんな”ファンタジー”みたいな事が起きるなんて」

嘘を、ついた。

もしかしたら、という結末が怖くて。

「あの、お名前は？」

「名前を聞くなら名乗ってからじゃない？」

「あつ、私は美鈴つていいいます」

「美鈴、ねえ。私はパチュリー、パチュリー・ノーレッジよ」

それが、美鈴とパチュリーの出会いだった。

ノーレッジ……。

やっぱり、と美鈴は思う。

魔女がこの屋敷を教えたということが、理解出来た。

……妹を、よろしく
という事だろうか

そんな事を考えたら、もうあの人がいないのだと現実を突きつけられたような気がして哀しくなった。

「あなた、行く宛はあるの？」

「いえ全然……」

「寝床と食事を提供するから、手伝って欲しいことがあるの」

「手伝って欲しいこととは……？」

「主に力仕事」

「あつ、私、力仕事は得意なんです。ぜひやらせてください！」

パチユリーは微かに安堵の顔を見せた。

美鈴には何があったのか分からないが、絨毯の血といい何かあった筈。それが気になって仕方がなかった。

「さ、扉の前にいないで中に入りなさい。……歓迎するわ、美鈴」

あれっ？

なんで呼び捨てなんだろうかと思いつつながら”館”の中へ足を踏み入れる。

「どうしたの？」

「血が……」

「あれ、消し忘れたかしら？風の魔法で頑張ったつもりなのだけど」「あはは……、”やっぱり”魔法使いさんだったんですね」

美鈴は一人納得した表情だった。

「わあ、広い館ですね」

「その割には人が全然いないんだけどね」

気が動転していたせいか、あれだけ不気味に見えた館も明かりが射し込み、

パチュリーの魔法で絨毯が綺麗になり、その考えを改める事になった。

とにかく貴族っぽい。その言葉に尽きる、と美鈴は思った。

「人が全然いない……、ってこれだけ大きな館をよく管理出来ましたね」

「ああ、いや今から管理するのよ。地下に本やら食糧やら蓄えてるのがあるからそれを貴女に手伝って欲しくて」

「地下もあるんですか！分かりました」

上手くはぐらかされたことに美鈴は気付かないまま、魔法使いは地下室が好きなのかと半ば真剣に考えながら、パチュリーに先導されていく。

パチュリーに先導されてやってきた地下は、どこか鉄の臭いがして美鈴は顔をしかめる。

パチュリーは鼻が慣れたせいか、そんな臭いもお構い無しに歩いていく。

地下には沢山の部屋があり、地下で何年も生活出来るようになっていた。

寝室にはベッドやらもきちんと揃えられており、がらんとした館には不釣りあいな数だった。

「ま、こんなにあるし1日で、とは言わないわ、二週間くらいで館

の部屋に全部戻せればいいわ」

「えーっと、この部屋は？」

「寝室は……、まあ運び出すときに案内するわ。場所覚えたら一人で頑張って」

ベッドや大きなものはどうやら魔法で動かすらしい。パチュリーが手をさつとあげてベッドを動かした時は驚いた。

私の仕事はどうやら、大きなものにはいつているものを運ぶ仕事のようなのだ。

クローゼットにあるものやベッドなシーツや枕を持っていけばいいらしい。

枕やシーツを出来るだけ手に抱える。抱えようとしたらシーツが絡まってパチュリーに笑われてしまった。

「ちょっと、笑わないで下さいよ！」

こんな私にも、

「だって可笑しくて。……っ、くくく……」

……日常への道が、視えた気がした。

はやくもシーツや枕を持っていく場所を覚えた美鈴はまさに水を得た魚だった。

たったったっ、と枕をいっぱい抱え込んで走る姿はまるで何かにかかされているようであったが、

そいうのを抜きにして彼女は早かった。

「この館の構造が分かってきたんじゃない？」

「はい、お陰様で」

そんな会話を交わしてそれぞれ運び出す部屋へと向かっていく。そういえば、と美鈴はふと思う。

あれから数時間が経ったが、未だこの館でパチュリー以外の人影を見ていなかった。

パチュリーの発言から少数ながらも人はいると思っていたが、がらんとしてその少数のレベルを越えていた。

うーん、と美鈴は思案するが何も答えが出ずにその疑問は宙をさまよう。

あれから部屋を六つほど片付けた。

”窓があまり無い”ないなあと思いつながら、美鈴は二階にあるとある部屋でベッドメイクしていた。

この部屋には幸い、窓が一つ設けられておりその向こうには闇つまりはもう既に夜を迎えていた。

「 貴女、誰? 」

ベッドメイクが終わり、終わったー!と心の中で叫ぶより先に、少女の音が後ろから聞こえた。

幼い声のようなのだが、どこか冷ややかな鋭さを持ったその声に美鈴はどきつとする。

ぎこちなく振り返れば、そこにはパチュリーと同じくらいの背丈の少女がいた。

ただ、彼女の背中には黒い双翼が広がっていた。

「 あっ、えつと 」

「 ああパチェが言ってた人かしら? 手伝ってもらってありがとね 」

「 は、はい。こちらこそ寢床を貸していただいて…… 」

「そういう取引だったのね、まあいいわ。……それより貴女の名前は？」

「美鈴です」

「美鈴、ねえ。姓は？」

「いや実は無くて」

途端、彼女の赤い目が鋭く光った気がした。

美鈴より一回りも小さな少女にはパチュリーとは違う何か、風格のようなものを備わっているような気がした。

「それじゃ駄目」

少女が美鈴に歩みよる。

音もたたないその歩き方はまるで幽霊のようだった。

「名前は運命を司るくらい大事なものの、それを蔑ろにしてはいけない。……美鈴、手を出して」

「は、はいっ」

そっ、と手を差し出す。

それを少女が美鈴の手を両手で包み込んだ。

……少女の透き通るような白い手は、少し冷たかった。

あれから一分ほど経った気がする。

少女は美鈴の手を握ったまま、目を閉じて静止していた。

微かに聞こえる呼吸の音がこの部屋を支配した。

「……そう、だったのね」

少女は一人納得したように呟いた。
そして美鈴の手をようやく離し、一步引いてクスリと笑った。

「私はレミリア・スカーレット。……この館の」

レミリアはハッと一瞬顔を崩した。

「この館の、主よ」

そう告げたレミリアはどこか寂しそうだった。

この少女が、この大きな洋館の主……？

訝しげに彼女を見て、どこか美鈴と違う何か大きな原因が分かった。
彼女にはまずもって気品と無駄が無い動作の一つ一つが彼女自身を
彩っていた。

この少女は食事とか歩くときも無駄が無くて綺麗なんだろうなあ、
と美鈴は考える。

「美鈴」

「はい」

「パチュリーに貴女の身の上話をしちゃ駄目よ」

「えっと……、どういう？」

「パチュリーはここで育ったの。ましてや家族と繋がりがあある貴女
がパチュリーにその事を伝えたらどう思うと思う？」

……きつと探すわ。姉を、家族を。でも”死んだ”なんて信じら
れないし、言えない。

結局は何も出来ないままパチュリーを深淵の闇に引きずりこんで
しまつかもしれないから」

「お嬢様は、友達想いなんですね」

郷に入つては郷に従え、と聞いたことがある。
やはり寢床を貰っている（予定）せい、その主人とあれば敬意を
表して言葉遣いも引き締まるのであった。

「パチユリーは……、ああ私はパチエって呼んでるけど。パチエは
ね、私の最初の友達なの。何年も、何十年も前からの、ね」

私もあの魔女と、レミリアとパチユリーのようにそんな固い絆で結
ばれていたのだろうか
過ごした月日はこの二人とは比にならないくらい短い。けれども、
けれども……。

「なんだか羨ましいです」

誰にも聞こえないような声で、美鈴は自嘲気味に笑ってそう呟いた。
月日だけが、その絆の強さを測れはしないと分かっている、釈然
としない気持ちがあった。
レミリアがくるりと背を向ける。

「見せてもらったわ、貴女の全てを」

淡々とした、それはまるで無機質に笑う天使のような冷たさがあっ
た。

けれどもそんな不思議な出来事よりも先に美鈴はレミリアに訊いた。

「どう、思いましたか？」

飾り気の無いその冷静な言葉に美鈴自身驚いた。
レミリアは背を向けたまま答える。

「……言葉なんかでその人生を描けると思う？」

全く、その通りだった。

私の全てを言葉に表すほど薄っぺらいものでは無い筈だ、魔女との出会いも死も言葉だけで表すのなら、

そこに何を見いだせるだろうか、厚みすら無いそれに私は何を望んでいた？

愚問。

そしてその望みからは何もなく、ただの嫉妬心から来るものだと気付いて美鈴は自分自身が嫌になった。

これほど卑しい者だったか、と。

「貴女のその気持ちは、分からないでもないわ」

美鈴の心情を知ってか知らずか、レミリアは声色を変えずにそう言った。

「この一夜にあまりにも嫌な出来事が起きた、貴女が自棄になるのは仕方ないわ」

けどね、と言ってレミリアは振り返る。

「死を受け入れられなきや前には進めない、引きずって引きずってそれでも擦り減らないそんなの嫌でしょう？」

貴女は表面上笑っていてもいつかその仮面は壊れる、その素顔に貴女は苦しむか解放されるか。

……そうだ美鈴、ついてきて」

すたすた、とレミリアは歩き始めた。

美鈴は誰もいない部屋で呟く。

「もうぼろぼろなんですよ、私の仮面は」

そして、少し遅れて美鈴はレミリアを追いかける。

レミリアの次の言葉を聞くために。

洋館の中は昨日のような不気味な暗さではなかった。

シャンデリアの灯が灯り、その柔らかい光は冬の寒さをやんわりと打ち消していた。

*

レミリアを追いかけて辿り着いたのは洋館の裏だった。

レミリアの近くには百合に鈴蘭に薔薇に……色とりどりの花が植えられていた。

「本当に、事が起こりすぎた」

レミリアはその小さな花畑に目を落として、声色を変えずに言った。

「……ごめんなさい、貴女と私は初めて会ったのに」

「いえ、大丈夫です」

だって、なんだか、この洋館に私は”来なくてはならない運命”なのだと”思えて”きたから。

もしかしたら、あの魔女の死を受け入れられるような気がして。

「昨日の夜、ここに教会の騎士がきたの」

レミリアは続ける。

「狙いはスカーレット伯爵。世間から見放された人達を拾い、食事を与え、仕事を与えて……」

本当に素晴らしい人だった、誰にも平等に接し、別け隔て無く心の底から平和を願っていたわ。

けど教会はそれをよしとしなかった、異端な人達を集めて決起を呼び掛けているという疑惑を擦り付けた。

……伯爵は決起なんてことはしないと書いていたわ。そして、教会は伯爵を殺した。

いやそれだけじゃなかったわ、私たち以外の113名の”家族”を葬りさった」

「そんな……、酷い。だってその伯爵さんは」

「本当にお人好しだった、最後は教会に私の首の代わりに皆に手を出さないでくれ、とまで言ったわ」

ああ、この少女と私は似ている。いやパチュリーも含め、

私達はどこか通う部分があるのだとレミリアの話聞きながら美鈴は思った。

「113本の花。……ここはね、私が即席で作った皆のお墓。」

パチュリーには墓なんて未練が残るから作らないなんて言ったけど、やっぱり作ってしまったわ」

美鈴は改めて小さな花畑を、一つ一つの花を見てレミリアがここに連れてきた意味を理解する。

「私達の世界は、なんでこんなにも理不尽な事でいっぱいなんですか？」

「少なくとも私達は、そんな理不尽な犠牲の上にいるということをお忘れちゃいけないんだと思うわ」

「そう、ですね」

月光が照らす花畑は、

幻想的で、哀しかった。

あの絨毯の血も、

不気味な程明かりが無かったあの日のことが、

レミリアの語る言葉によって、美鈴は理解した。

ならば、その渦中にいて生き残ったパチュリーはどうだろうか？

誰よりも体が弱いというのに、誰よりもこの洋館を再興しようとしている。

そこに、姉が死んだなどと言ったら。

「お嬢様は運命つてものを信じますか？」

レミリアは星空を見上げる。

雲一つない、綺麗な夜空だった。

満天の星空に、オリオン座や白鳥座が煌々と輝いていた。

手に届きそうな月はこの世界を見下ろしているようだった。

「こんな腐れきった運命なんて、信じないわ」

「私もです」

「だからね、私は自ら運命を切り開くわ。運命に従うんじゃない、運命を従わせるの。」

運命に従っていた私はもういない、私は私なりにこの洋館を守り、何れは……………」

「何れは？」

「伯爵”のように、在りたい」

「……………きっと、なれますよ」

*

「さ、帰るわよ。パチエが待ってる」

「その前に一ついいですか？」

「手短にしてくれるのなら」

「お嬢様と初めて会ったのに、こんなにも距離が近くなるなんて思いませんでした。」

もしかしたら、これこそ”運命”だったりしませんか？」

花畑を背景に美鈴は笑う。

その笑顔にレミリアは胸が締め付けられそうになった。

レミリアはそれを右手で制し、

「運命、なのかもね。いやそれよりも」

「それよりも？」

「いやなんでもないわ」

レミリアは美鈴に背を向けて少し歩いて、ふと立ち止まる。
一陣の風が、吹いた。

「私達は配られたカードで勝負するしか無いわ」でも結局私はジョーカーにもキングにもなり損ねただだの吸血鬼。……ねえ美鈴
「はい？」

「もしこの全てが誰かが”人為的に”引き起こしている、なんて考えられないかしら。」

この悲劇も、葬り去りたい現実も、なにもかもが仕組まれているとするのなら、美鈴はその存在を何と例える？」

そうですね……。と美鈴は思索しながら、やがてポツリと呟く。

「神、でしょうか」

「面白い事を言うじゃない。けどそれは正解であり、不正解ね」といって」

「私にはそれがなんなのかなんとなく分かるような気がするの。私達に”近くて遠いもの”それが運命の正体、そして例えるなら根源」「根源、原点、みなもと……」

「ま、考えたって埒があかないしきつと私達には届かない、それこそ”真理”なんてやつかもしれない。」

さっ帰るわよ。パチエが言うにはご馳走だつて言ってたから」「わあ、それは楽しみです！」

「ごめん嘘、地下にある食糧でなんとかするみたいだから、ここ数日は保存が効く辛いものが酢っぱいやつとか甘いものだと思うわ」「……なんか凄く現実的でシヨックです」

「保存食だから仕方ないわ、肉とか魚なんて少し前まで一日で食べきらなかったら食べれなくなるんだから」

レミリアはそう言って美鈴を手招きして洋館へと帰る。

レミリアはそれ以降喋らなかつた。

レミリアに連れてこられたのは大きな長方形のテーブルが置かれた部屋だつた。

そこにはパチュリーと……

「あれ、なんか増えてない？」

「こちらは妖精さん、どうやら迷い込んだんじゃないかとらしくてね。手伝つてくれたら食事と寢床をあげるなんて言つたら目を輝かせて手伝つてくれてね」

パチュリーの隣には妖精が一人、ちょこんと座っていた。

妖精の透き通るような透明に近い羽根を見て美鈴は元の世界の童話をふと思ひ出す。

「妖精なんているのね、全くこの世界はとんだ理想郷ね」

「今は人手が絶望的なんだからいいんじゃない？ほら愛嬌あるし」

「確かにいないよりはましね。……あれフランは？」

「途中まで手伝つてくれてただけだね、今は疲れて寝てるわ」

「あ、あの」

「ん、どうしたの？」

「ご飯冷めちゃうかな、なんて……」

「それもそうね、レミィ早く座つて食事にしましょう」

食事を済ませ、パチュリーに案内された寝室に入る。
ベッドが二つあり、片方は妖精のものらしい。ふかふかのベッドに
妖精ははしゃいでいた。

「そういえば妖精さん、貴女の名前は？」

美鈴が訊くと、妖精はきよとんとして首を傾げた。
そしてそれを見ていたパチュリーが説明する。

「妖精は自然の権化なのよ、まあ簡単に考えれば小さな赤ん坊みた
いなもの。意味を理解出来るけども言葉を伝えるのは得意じゃない、
……てのを本で読んだことあるわ」

「あつなるほど。なんだかお人形さんみたいで可愛いですね」

「中には言葉を話せるような妖精もいるみたいだね」

「なんだか童話の世界に入った感じですね」

「童話だけだったらいいんだけどね」

意味ありげにパチュリーは笑みを作って、それじゃまた明日なんて
言って部屋から出ていった。

おやすみなさい、とその後ろ姿を見送って、美鈴は妖精に向き直っ
て自己紹介をする。

「私は美鈴っていうの、よろしくね妖精さん」

こくりと頷く妖精に美鈴は顔を輝かせる。

言葉が伝わるというのはこんなにも感動的なんだなと思って、美鈴
は自分の身の上話を始めた。

薄手の白のワンピースを着ただけの茶髪の妖精は美鈴の話に熱心に
聞いていた。

まさか、この妖精が後の一代目メイド長になるうとは誰一人思いもしなかった。

*

「レミイ、裏庭で何してたの？」

美鈴と迷い子妖精を寢室に案内して戻ってきたパチュリーがレミリアに訊いた。

そんなレミリアはウィンググラスを右手にとって、窓に映るパチュリーを一瞥し、窓の向こうの景色を眺めていた。

「美鈴、だっけ。私は気に入ったわ。何より元気だし」
「レミイがそんな事であんなに話したりするかしら。……妖精はともかく、旅人という事以外何も知らないのよ？教会の奴らかもしれない可能性だってある、もしかしたら私達の財産を狙っているかもしれないのに」

そして咳をして、最後に。

「レミイ、彼女の何を”見たの”？」

「全部、て訳じゃないけど。見たよ美鈴の過去を」

パチュリーは知っていた。

レミアの力を、運命という誰からも縛られない間接的な抑止力を彼女はその力を用いて”過去”を視ることが出来ることを。

レミア自身はその力に気付いていないようだけど、その力がレミアに備わる運命を操る程度の能力の派生したものだとは、昔、伯爵がパチュリーにこっそりと教えていた。

何故伯爵が知っていたのか今となっては分からないけども、その不思議な力は説明出来ないような、魔法みたいな力だった。

だからこそ、パチュリーはその不思議を平然と問うことができた。

「境遇が同じだったわ。教会に大切な人を殺されたの」

「へえ……」

「そしていつの間にかここに流れ着いた、みたい」

「なるほど、で、これからどうするのよ？手伝いが終わったら美鈴はどこかにいくかもしれないわ」

「美鈴は……、ここに居ていいんじゃないかなって」

「……」

「ほら力仕事と雑用はテキパキこなせるみたいだし、召し使いとしてどうかしら」

「召し使い、ねえ……」

「やっぱり体が弱い貴女に全てを任せるわけにいかないよ」

「ありがとう、レミィ」

窓越しの魔女はくすりと笑った。

「最後に一ついいかしら」

……今日は最後に何かを問われる事が多いみたいで。

「何を隠してるか知らないけど、いつか話して頂戴」

「……いつか話すわ」

「そう……、それじゃおやすみなさい」

「おやすみなさい、パチエ」

ガタン、と扉が閉まる音がして、パチュリーが出ていった事を確認して、一人寂しげに呟く。

「あーあ、ばれてたのね……」

*

「……………ん」

朝日が眩しくて、美鈴はその気だるい体を奮い立たせる。

……といっても、伸びをして眠たそうな眼に濁をいれてカーテンを

勢いよく開ける。

光に目が慣れていない美鈴は、うっ、と呻きカーテンを閉める。まだ頭が覚醒していない美鈴はとりあえず辺りを見渡す。

赤の絨毯に羽毛のベッドが二つ、隅にはクローゼットが一つあるだけの部屋だった。

ちなみにベッドの一つには妖精がぐっすりと寝ていた。

時折寝返りをうっていてベッドから落ちるんじゃないかひやひやさせられる。

「そっか、ここにまだいられるんだった」

うわごとのように呟くと、美鈴は一人顔を洗いに湖へ向かうのだった。

冬のひんやりとした空気に美鈴は少したじろぎつつ、湖まで歩いた。太陽は既に真上にあることから、自分は長い間寝ていたのだと知る。

……まあ、昨日は一日中走り回っていたのだから仕方ない。

湖は日光に照らされて輝いて見えた。

美鈴は手をお椀にして、水をすくってバシャバシャと顔を洗う。湖の水は物凄く冷たくて、美鈴の頭は一気に覚醒した。

「はあ」

深呼吸して、その空気の美味しさに心が踊った。

湖の向こうには森や山しか無くて、人工物など何一つ無かった。

「今日も頑張りますか」

そんなことを自分に言い聞かせて、美鈴は館へと走っていった。

「ねえ美鈴、ここに住まない？」

家具の移動の手伝いが終わり、夕食時に（レミリアは朝食らしいが）レミリアが訊いてきた。

美鈴は一瞬ぼーっとしたような顔になって、

「……へっ？」

なんて間抜けな声だろうか、と美鈴自身思った。

「だ・か・ら、私の召し使いになりなさいってこと。あとついでにその妖精も」

今度は命令形だった。

「ただそれよりも、ここに”住んでいられる”という事に美鈴の将来が晴れ渡った気がした。」

「は、はいっ、ぜひ！」

妖精も首を縦に振って目を輝かせる。

ジェスチャーに関しては妖精が一番うまいんじゃないかとレミリアは心のどこかで考えていた。

「そうね、召し使いになったあかつきに特別にパチュリーからご褒美が」

「へっ！？なにそれ聞いてないわよ」

「えー、何も用意してなかったの？」

「う、うん……」

「ということでご褒美はまた今度！」

そんな会話が続き、食卓は良い雰囲気だ。そんな話が続く、食卓は良い雰囲気が漂っていた。ちなみにレミリアの妹のフランはもう少し夜が深まってから起きて、朝日が昇る時間帯に眠ったりするそうだ。流石は吸血鬼、夜型の生活だった。

「いやー、こんなふかふかベッドで毎日寝られるなんて本望です！」
「うん！」

「うふふ、妖精さんもそう思いますか。って、ええええ!？」

夕食を済ませ、部屋に戻ってくつろいでいた美鈴と妖精はさっきの出来事を（美鈴が一方的に）話していた。

「えーっと、もしかして喋れるようになったとか？」

ふるふる、と首を横に振る妖精。
そして、あっ！と美鈴を指差して、

「め……いりん？」

「おおおおおおおっ!!！」

「めいりん!!！」

妖精が名前を言って感動する美鈴。

あまりに感動したせいか妖精を抱き締めてしまった。うう、と唸っているけど気にしない。

「わあ……、めちゃくちゃ嬉しいです」

結局、その後も眠くなるまで（美鈴が一方的に）話をしたが、どうやら「うん」と「美鈴」の二つの単語しかまだ言えないようだった。

それでも、美鈴はなんとか妖精に言葉を教えようとしたが焼け石に水だった。
言葉の意味を理解しているあたり、この妖精が一人前に喋られるようになるのも早いんじゃないかと美鈴は眠る間際に思った。

*

次の日、パチュリー曰く

「毎日やってるから疲れてるでしょうし、今日は一日中休んでいいわ」

と言って今日は休みとなった。

実際、妖精や美鈴がテキパキとやっているせいか、当初思ってた二週間で終わる手伝いも、三日経った今、あと二日程度で終わる算段となっていた。

「で、なんの用かしら？」

暇をもらった美鈴は地下の部屋でも一回りも二回りも大きい図書館へと赴いた。

図書館とは名ばかりで、まるで地震の被害にあったかのような本の乱雑さに美鈴は驚いた。

そんななかパチュリーは一人、魔法を使わずに一つ一つ本棚に本を入れていた。

「本は地上に出せば日光で傷むかもしれないからここに置いてく

よ
「なるほど」

パチュリーは手短かに美鈴に説明すると作業に戻った。

「任せてください、不器用な私ですが、本の整理は得意なんです」

「貴女が？本を？」

「ええ」

「いい？本を棚に入れれば良いってわけじゃなくて」

「ジャンル別に、ですよね」

「……………」

パチュリーは美鈴の申し出に訝り、その真意を読もうとした。

けれども、善意から来る美鈴の申し出にパチュリーはその意図がなんなのか分からずに、渋々本の整理を任せた。

本は繊細で、この本の山には世界に一つしかないオリジナル

原本が数多く埋もれていることを知っていたパチュリーは不安げに美鈴の様子を本を読むふりをしながら眺めていた。

なるほど、と思った。

まず手慣れていたので、本のジャンルを調べる為に本の内容を読む愚者がいるが、整理の為ならば目次か最後の題目の”つまり””要するに”等の接続語を探せばそのジャンルが分かる。

手際よく整理できたせいか、パチュリーが本を一冊読み終わる頃には収納された本が綺麗に並べられていた。

「本を整理するのは、得意なんですよ」

どこか陰りのある言葉に、

パチュリーは違和感を覚えた。

けれども、ニコニコして笑っている美鈴をみてそれは杞憂なんじゃないか、疲れてるのでは、とその考えを打ち消した。ただ、その台詞を言ったときの美鈴の顔が忘れられなかった。そういえばと、パチュリーは読んでいた本を閉じてふと思案する。

ほとんど読み尽くした筈の図書館の本なのに、賢者の石の本を見つけ、以来、”パチュリーの知らない本が図書館に現れた”のだ。

それは珍しい本だったり、原本だったりとても貴重なものばかりだった。

だがどれも煤が被っていたりと微妙に傷んでいるという共通点を見つけた。

だから、何

となるが、その”不思議”に何かしらの共通点を見つけると言うことはその不思議を説明する一歩なんじゃないかと思う。

「けれど、分からない。人為的なのかそれとも……」

結果、パチュリーは多くの魔法を知ることが出来たし、その豊富な知識を磨くことも出来た。

本を読んでいるときにふと考えてしまふ、不思議に、パチュリーはただ受け入れるばかりであった。

不思議、といえば赤髪の少女だ。

最初に会った時は見境なく助けを求めようとしてたまたま彼女に手伝って貰ったけれども、彼女が旅人なのか些か微妙な点がある。

あんな軽装に何の準備無しに旅人、だなんてね

他にも、その旅人というものを覆す理由は幾らでもあるが結局のところそこから出される答えというものは、

”美鈴が嘘をついていた”という一点に限る。そういえば、

彼女は”あの”レミリアと仲が良くなった。

私に何かを隠してる。

しかも、それはレミリアと美鈴が繋がっているかもしれない秘密を。私に”いずれまたその時に”とさき伸ばしされる、それは、どうやらその時が来たら明かされるらしい。

「考えたらずがあかないわね」

「何を考えてたのかしら」

「あらレミイじゃない、散歩はどうだった？」

「面白いくらいに人間は見なかったわ、代わりに妖怪やら妖精やらがわんさか。元の世界だったら教会は恐怖するだろうね」

レミリアが鼻で笑う。

その鼻で笑った相手が、私達の身内を何人滅ぼしたのか。そんな嫌な考えが浮かんでしまう。

「レミイ、その教会は私達」

「分かってる、分かっているわ」

「召し使いも、魔女も、優しくなった皆が、その鼻で笑った奴に殺された！！私達は……何も出来ずに、見ることに出来なかった」

「ぱ……、パチエ？」

「伯爵も、何もかもが！あの夜に全て奪った！その代償は何？あなたの妹？違う！私達は」

「やめてください！」

パチュリーとレミリアの成り行きを遠くから眺めていた美鈴が吼え、静かに二人の下へと歩いてきた。

滅多に叫ばないからこそ、パチュリーの激昂を止められた。

「美鈴」

レミリアが呆気にとられていた。
それはパチュリーも同じだった。
無表情なそれは、まるで仮面を被ったように何を考えているのかわからず、無機質の恐怖を醸し出していた。

「失礼します」

パン

乾いた音が、部屋に響いた。

美鈴はパチュリーの頬をはたいた。パチュリーは自分の頬に手をあて、美鈴を睨んでいた。

「そんなこと、言わないで下さい。確かにお嬢様の言葉と態度が気に障るのも分かります。けど」

美鈴は哀しげに、最後の言葉を付け足す。

「どう足掻いたって戻ってこないんです、人を、生き返らせる事なんてできっこないんです。」

「だから、だから！恨んでも、帰ってこない。」不条理な世界”から私達は出られたんですよ。」

「だったら……、だったら、せめて、犠牲になった人の分も背負って私達は幸せにならないといけない……！」

美鈴の静かな、けれど力のある言葉にパチュリーは胸が締め付けられる。

私は、私は

ただ、美鈴の言葉に頷く事しか出来なかった。

「パチエ、……ごめん」

「いや私こそ悪かったわ、ごめんなさい」

しみりとした空気のなか、

美鈴はその光景を微笑ましく眺めていた。

結局のところ、パチユリーもあの悲惨な出来事を乗り越えていなか
ったのだ。

この館の再興に人一倍頑張るからこそ、複雑な胸の内を隠していた。
いや抑え込んでいたというべきか。

「美鈴もありがとね、なんかすっきりしたわ」

「いえ、こちらこそ殴ってしまつて」

「いいのよ、お陰で目が覚めたわ」

「この際だし、パチエ。貴女に言うことがある。いや言わなきゃい
けない」

「それって、いつか話す、っていう……?」

「ええ、でも私なんかより美鈴から話した方がいいかもね」

「え、私ですか?」

「他に誰がいるのよ」

こほん、と美鈴が咳を一つしてパチユリーに向き直る。

あまりの真剣な表情にパチユリーは一瞬たじろぐ。隣に座っている
レミリアはその真剣さに、くくくつと笑っていた。

やがて、美鈴の口が開く。

「私は、」

その口から明かされる、
一つの真実。

「私は、ある人に召喚されたんです」

その時が、きた。

「その人って……？」

パチュリーが訊くとレミアがしーっと人差し指を起てて制した。

「ま、最後まで聞きなさい」

「その人は魔女でした。とても強くて、とても優しくて。とにかく
凄い人で私にとって尊敬する人でした」

二人は美鈴の話に聞き入っていた。

まるでお母さんが絵本を読んでいるような、静かで優しげな
声に。

「そして私は魔女とずっと暮らしました、時には喧嘩したりありま
したがそれでも彼女は召喚した私を決して召し使いにせず、一人の
友達として対等に接してくれました。

……彼女は有名な魔女の家系に産まれました。けど今のご時世、
魔女が疎まれるこの時代です。彼女には姉妹がいたんです、けれど
も生まれながらにして貴族に引き取られた妹とその有名な家系の遺
産を引き継ぎ、荊の道を歩んだ姉が。……魔女は荊の道を進みまし
た。

人と交わろうとせず、ただ本を読み漁り、魔法の研究をして、そ

んな単調な日々が続いていました。

次第に彼女は病魔に蝕まれていきました。呼吸器系……肺の病気でした。次第に彼女はあまり動かなくなりまして

そんな彼女を見るのが嫌で、私はある日逃げ出しました

汗水流して働いた金で薬を買って、ベッドに置いて私は逃げた。

……あははっ、けど逃げ出して気付いたんです。私がいなきや彼女は何もできない、ご飯すら作れないんです。そんなことを気付いた時には彼女の家に向かって走って走ってました。哀しいですよ、カッコつけた癖に結局はカッコ悪くて……、でも彼女はそんな私を咎めませんでした。

いつも通りに、接してくれました」

話していくうちに、美鈴はあの頃に戻ったような気がした。この日常を話していたら、本当に戻れるんじゃないか、って。

けれども、美鈴は後戻り出来ないことも頭の隅で知っていた。足掻いても足掻いても、その先には過去なんじゃなくて、未来なんだと。

「ある日、教会は魔女狩りを執行しました。……勿論私たちの家にもやってきました。

それを知らずに私は悠々とお使いに行っていました。」

騎士に囲まれた惨状を思い出す。

結界が何重にも家を守り、家自体に幻術の魔法で入り口が分からないようになっていたあの時。

「私がやって来たときには、彼女はボロボロでした。彼女の体は魔法をいくつも唱えられることができなくて。そして私にこれをくれました。」

美鈴は深緑色の帽子についている金の大きなブローチを指差す。

「強くなって、守りたい者を守れるように、そういう願いを込めて
そして彼女は私をこの洋館へ行けと言いました。何故なのか分か
らなかつたけれど、

しかし彼女は最後の力を振り絞り、風の魔法で私を外へ導きまし
た」

美鈴は顔を伏せる。次の言葉をい口にするのが怖くて。

「屋根に着いた私は、騎士達の怒号を聞きました。同時に何重もの
結界が消え去り、それが、あの魔女が死んだという報せでした
そして私は此処へ辿り着きました。……そんな私でも一つ気付い
た事があるんです」

美鈴はパチュリーを見据える。

「えっ………?」

「この世の中は運命なんていう不思議な力があるんだな、って」

「美鈴、まさかその魔女って」

はっ、とパチュリーは美鈴に問いかける。

その問いかけに美鈴は優しく答えるのであった。

「きつと………、いや絶対」

「……………」

「あなたのお姉さん、でしょう」

パチュリーの表情が固まる。

「そんな、そんなことって」

初めて知らされる姉の存在、そして死んでしまったという現実。困惑と絶望が入り交じり、パチュリーの手は心なしか震えていた。そして眼前に聳える彼女は、”姉”が残した”形見”であり”親友”だった。

「……………っ」

堪えきれない。

全てがぼやけて見えた。

レミイも美鈴も、本も、なんにもかも全てが。

私は知らなかった。

レミアアに出会うまではずっと本を読み続けている”孤独な少女”だった。

家族を知らないまま、百年の時を過ごした。

「だから、私は」

美鈴の声が聞こえた。さつきとは違う、はつきりとした強い、力がかもった声だった。

その声にパチュリーは見上げる。ああ彼女はこんなにも大きかったか、と。

「だから私は、貴女を守り続けます。それが私に課せられた使命であり罪だから」

その声に、涙が溢れた。

美鈴は右手を差し出す。

その手をパチュリーは握る。

暖かくて、優しい、手だった。

「私は貴女の虹になりました。見上げれば貴女をきつと笑顔にしてあげられるように。」

そんな、役者っぽい台詞にパチュリーは顔を綻ばセクスリと笑う。

なんだか可笑しくて、

なんだか、暖かくて。

本当に、この少女は虹みたいな存在なんだな、って。

消えない虹。

本当に、貴女は消えないような気がして。

よろしくね。

そんなことを心の中で呟いた。

f i n . . .

消えぬ虹に、消えぬ三日月 後編（後書き）

おはようからおやすみまでサポートするレクです。さて、Different Storyの最初の話です。

不完全な満月といい影猫は紅魔館メンバーが好きなようです。ちなみに、時系列的に整理すると。

ツエペシユの儂き幻想 消えぬ虹に、消えぬ三日月 不完全な満月 紅き月と壊れた懐中時計。といった具合でしょうか。

けれど、ある意味この消えぬ虹に、消えぬ三日月は他の3つの話と全く別物……というわけではありませんが、少し違うものと考えていただければ嬉しいです。

読んで気付いた方もいると思いますが、ツエペシユに引き続き、伏線が拾われていたり、同じ伏線を引き継いでいたりします。

そして、この小説全体を揺るがす部分も、また然り。Anotherで完結していると思ったら大間違いです（Anotherは上巻、Differentは下巻といった具合でしようか。

紫「それよりこの小説の解説しなさいよ。いつもやってるじゃない」

魔女

最初はいつパチュリー？

みたいに思わせる描写にしました。

私の中の魔女はパチュリーより身長が高くて大人びてるイメージがあったりします。

ともあれ、結界を何重にも張り巡らすことからその実力は紫クラスぐらいはあったのではないでしょうが。

まあ身体的な面からもその膨大な魔力を一気に使うという事は無かったと思われませぬ。

ともあれ、彼女が何故スカレットの元へパチュリーが引き渡されたのか、何故屋敷（本当は洋館）場所を知っていたのかと考えると彼女の素顔が垣間見えるんじゃないかなと。

魔女が疎まれた時代に、身内を探しつつけるというのは困難を要した筈です。

彼女はもしかしたら、魔女らしい魔女でありながら、人間の一面を持っていたのかもしれないね。

その後の話。

美鈴はレミリアから紅の姓を貰ったりなんたり。そこら辺の物語は書けたらいいな」と。

紫「そうだ一つ聞きたいことがあるわん、なんででしょうか？」

紫「前々から気になってたんだけど、後書きをあとがきって平仮名で書くのはなんでかしら？」

あー、それはですね。RAVEっていう漫画の単行本の後書きスペースが”あとがき”って平仮名で書かれてるんですよ。

きつとその影響です。いやー、ジークかつこいいよね。あの伏線は鳥肌が。

紫「あともう一つ、前々から気になってたんだけど。このあとがき自体、いらぬような気がするわ」

……………。

風見幽香のお花畑 前編

「なんてこと」

ただならぬ様子で四季のフラワーマスター風見幽香がわなわなと震える。

目の前には綺麗に剥ぎ取られたような異様な光景。幽香を知る者なら恐怖するだろう、

ここは風見幽香の敷地。

向日葵の花畑での”花を傷つける行為”はつまり、風見幽香を敵に回す事。それは死刑を意味していた。

ああ、なんてことなんてこと。

幽香はその向日葵の茎から寸断されている辺りをいとおしそうに見つめ、誰がやったのかと思考する。

妖精かしら？ううん違うわね。彼女らは自然の権化とすら呼ばれる存在。花を傷つけるような行為なんてしない筈。

なら、そこらへんの妖怪？いや有り得ない。だって私を怖がってこの向日葵の花畑に近寄らないのだから。

だとするならば、

頭の中に一人の妖怪の姿が思い浮かぶ。

その妖怪がクスリと笑う様を安易に想像出来るからこそ、幽香の思考をそいつが犯人なのだと決定づけた。

「隙間妖怪の仕業ね……」

幽香は静かな怒りを内に閉じ込めながら、花の世話を始めた。

「あら暑い夏の日には花の世話かしら？」

はた、と後ろから艶やかな声が聞こえた。

人を小馬鹿にするようなそれに幽香はやっぱりこいつが犯人だと再確認した。

とつかこいつ以外に考えられない。

その犯人を背に、敵意ある声を剥き出しにして確認をする。

「一つ訊いていい？」

「ん、何かしら」

「ここのお花をめちやくちやにしたのは貴女？」

「ああごめんなさい、隙間を使った時に花がある空間ごと切り取っちゃったのね」

ああ、要するに事故であって自分は悪くない、と。

後ろの声、”八雲 紫”の言葉を解釈する。

「そういえば貴女、最強の妖怪なのね」

「ええ最強よ」

「最強の座は私のモノなの。……そうだ八雲紫、貴女と戦いたくなつたわ」

その言葉に風見幽香と八雲紫の取り巻く空気が変わり、ぴりぴりとした緊張が辺りを包み込んだ。

聞こえるのは、蝉の鳴き声と妖精達の無邪気な笑い声。

けどそれも段々とぼやけていき、二人の声だけが鮮明に聞こえてきた。

「えー、面倒」

「あらあら私の畑を荒らしといてそれかしら。貴女に拒否権はあつて？」

「……あー、はいはい。分かった分かったわ、やりましょう」

はあ、とため息をついて八雲紫は隙間を展開する。

きつと幽香は暇潰しがしたい、と。だったらここで断ったらメリツトなんて無い。

まあしいて言えばデメリットは戦うことかしら、メリツトとしては……いや特に無い。

あー、貸し一つ作られるのか。「貴女、前私の誘い断ったわよね？ だったら」「なんて、

それは嫌だなあ、と紫は思案する。その表情は夏の暑さのせいかなそれとも厄介ごとに巻き込まれたのか、どうも顔に出ってしまったようだ。

「なにその顔」

「いや、暑いでしょう？ 表情に出たりするのは仕方ないじゃない」「……」

じゃあ、はじめましょう。と幽香が言う。

その言葉を皮切りに紫が隙間を展開して二人をこの向日葵畑から隙間の向こうへと誘う。

「あまり戦いは好きじゃないのだけど」

やれやれと、紫は肩をすくめた。

びちやり

隙間の先の世界は驚くほど幻想的だった。

地面は鏡のように自分の顔が映り、1cmほどの水が地面を覆っていた。

その水面も、幽香が一步進む度に波紋が広がっていた。

空は透明感のあるライトブルー、その空を大きな大きな満月で占めていた。

地平線の向こうまで見渡す限り何も無く、時折小さな風が吹くだけだった。

……まさに幻想的な世界だった。

色という色はその存在を誇示すること無く、同調し、鮮やかな色模様を作っていて、

少し赤みかがった入道雲は満月と重なりあって綺麗だった。

まさにここが別世界なのだと実感せずにはいらなかった、それほど幻想的な世界で、幽香が見たことも無い景色がそこにはあった。

ふとおもむろに、幽香はお気に入りの日傘をさす。この傘はある程度の弾幕を防ぐ事が出来る優れ物、

そんな盾にもなりうる傘をくるくると回し、辺りを見渡す。

「隙間妖怪がない」

この世界に幽香は独りだった。

いやこれこそ紫の思惑なんじゃないか、

独りと思わせじわじわと精神的にも体力的にも削っていくそのやり方は、隙間妖怪だからこそ出来る姑息な手段。

「生憎、独りは慣れてるわ」

ぴちゃりぴちゃり、

幽香は歩き出す。日傘をくるくると回しながら。

口元を少し吊り上げながら、今か今かと待ち望むその姿に
八雲 紫は困ったようにそれを眺める。

ここは幽香クラスのとんでもないやつと戦うには丁度いい世界だっ
た、この世界には誰もいない。無だけが存在する世界。
だからこそ、好きなだけ暴れられるし何より被害が出ない。

「こりゃ本気でかかろうとしてるわね」

隙間の向こうから幽香の見えない”死角”から紫はため息まじりに
呟く。

紫の思っていた 面倒 の範疇を超えていたせいか、それは落胆と
いうよりも諦めに近かった。

「まあ……。たまにはいいかもしれないわ」

半ば吹っ切れたかのように呟くと、紫は隙間に飲み込まれるかのよ
うに消えていく。

久方ぶりの決闘に、紫は笑みを溢してしまふ。

スペルカードルールすら無視された戦場に、思いを馳せながら。

ぴちゃり、ぴちゃり

水面が微かに揺れ、波紋は無限の彼方にへと広がっていく。

もし、その彼方が有限ならば、その有限は一体どういった要因なの
か。その果てには崖がある？それとも。

そんな戯けた事を考えるのは、ここがそんな世界だからだろうか。

「それにしても暇　　ッ!?!」

その刹那、

幽香の周りに音も無くおびただしい数の隙間が展開されていく。

四方八方に埋め尽くされるそれは、幻想の世界を不気味な世界へと変貌させた。

幽香は依然として傘をくるくる回しながら事の成り行きを眺めている。

それは何を示すのか。何が、起こるのか。

隙間が展開され、幽香との距離はおよそ5メートル。

そこから紫が飛び出すには少しばかり遠すぎる。ならばそこから意味するのは

シュッ

後方の隙間から一本の剣が水平に幽香に向けて放たれる。

幽香はそれをひらりと避け、その剣が宙を切った。

避けられたその剣はそのまま隙間へと飲み込まれていき、闇へと溶け込む。

「成る程ね、ぎりぎりまで避けさせた後が本命かしら」

……そして幽香の手には一本の短剣。

それは始めの剣が投射されたすぐ後に音もなく投射されたものだった。

どれも幽香の死角を狙っていたもので、その刃先には毒が塗られていた。

触ると皮膚が爛れる系統の毒？いや酸といった方が適切か、幽香はその一瞬の出来事を解析しながら目の前の虚空の間へと話しかける。

「ちまちまとするのが貴女のやり方かしら？」

目の前の数多の隙間に挑発する。

この周りにある隙間は全てどこかとリンクしているのだろう、前方の隙間にナイフを投げれば後方の隙間からナイフが出てくるみたい。

ということ幽香が目の前の隙間に弾幕を放ったとしてもそれが必ずしも紫の下に届くわけではないし、逆にその弾幕がどこかの隙間とリンクして幽香自身に跳ね返ってくるのかもしれない。

「迂闊に隙間の向こうに攻撃出来ないって訳ね」

ならば、これを切り抜けるしか術はない。

幽香は前方に傘を広げ、後方、右方、左方の隙間に意識を向ける。

この四方八方の攻撃は背を向ける恐怖、油断から単純な攻撃でもひっかかる。

つまりは背さえ守ればこの四方八方に陥られない。

その幽香の動きを分かっていたかのように、それに合わせて隙間の向こうから大量の剣やナイフが幽香目掛けて勢いよく投射される。

その5メートルの間合いも意味を成さないような速さ。しかし幽香は平然とそれらを避ける。

ほぼ180度からの剣の攻めに、弾幕慣れした動きで確実に剣の軌道を読み、

その”穴”へ舞うが如くそれらを避け続ける様はまるで舞踏のよう。

幽香は知らないが、隙間から放たれる剣はどれも突きの方が強い西洋風のもので、

そのなかでも突きに強いレイピアが多く、しかし突き故に軌道は一直線で、まるで針みたいだった。

そんな事が起因してか知らずか、異変を起こした時に手合わせした巫女との戦いを思い出した。

最も、あの鋭い針は180度からくるようなものではなかったが。幽香はくすりと笑って、幾万もの武器と対峙する。

からん

最後のナイフが幽香に突き飛ばされ、ガラスの地面に落ちる。

幽香の周りには何千、何万の武器。その全てが錆びておらず、新品のように刃は綺麗だった。

まあ、あの妖怪なら新品同様の武器など安易に用意出来るだろう。そんなことよりも。

「体が鈍ってたから丁度いいわね。……まあこんなので私に傷をつけられるなら弾幕遊びなんてやらないわ」

どこかにいる彼女に向かって挑発する。

幽香の言葉には「準備体操にもならない」という皮肉すら込められていた。

そして四方八方に巡らされた隙間が消えていく。

次いで、幽香の周りに散乱していた武器が隙間によって一瞬で回収された。

「見事な芸当ね。ただ私は攻める方が好きなの、早く出てらっしゃい」

それに答えるかのように、幽香の前方から隙間が一つ展開される。やがて出てきたのは紫のドレスに身を包み、艶やかな金の長い髪をした八雲紫の姿。

手には日傘、お気に入りの帽子を被って、全ての秩序を押し伏せる大妖怪がそこにいた。

「避けるのは素早いよね。阿求の求聞史紀読んだら貴女、花畑から出ないとか書いてあったからてつきり鈍足かと」

「あら貴女もそんな事が言えた口かしら？この年増妖怪」

「年増妖怪？チエツクのチヨツキを着た年増妖怪ならそこに」

お互いがお互いを嘲笑し合う。その罵声はもはや自身を昂ぶらせる魔法の言葉。

二人を知っているものならば即座に逃げるだろう、それほどまでに二人のオーラは殺気に満ちていた。

この幻想的な世界に不釣り合いな程に。

紫がすっ、と右手を挙げる。

「準備はいい？」

「ええいつでもいらっしやい」

紫の右手が降り下ろされた瞬間、二人の戦いが始まった。

幽香は一瞬にして紫との間合いを0にさせる。そのあっという間の出来事に紫は呆気にとられた。

そして傘を紫の喉元にあて、低い鋭い声で言い放つ。

「楽しくない」

「あら楽しくないのは私もよ」

ふっ、と紫が消えた。

隙間なんかではなく、まるでそれが幻だったかのように。

「楽しくない、楽しくない」

幽香の肩に紫は傘をトンと叩き、幽香の体がまるで泥のように崩れ落ちる。

「もらった」

頭上からの声に紫は咄嗟に隙間を開き弾幕を放つ。

クナイが一瞬にして幽香目掛けて吐き出される。

それを傘で薙ぎ払い、そのもう片方の手でマスタースパークを放つ。魔理沙でさえ強力なマスタースパークをいとも簡単に出した。

光の粒子が厚みを増し、極太のレーザーが紫目掛けて照射される。

普通ならそれ相応の負担がかかるのだが、幽香はものともせずに使えた。

まさに、紫に並ぶ妖怪。

「直撃すると思った？」

「そんなわけないじゃない」

幽香が最強の矛を持つのなら、

紫は最強の盾を持っていた。

マスタースパークによって水が蒸発し、霧になったなか、

あの数秒の出来事から一瞬の判断で四重結界を張り巡らし、無傷の八雲紫がそこにいた。

霧が晴れる、その前に

「あら油断禁物よ？」

「ちっ」

後ろからの声に幽香は自分の迂濶さを呪った。

相手に見られない、ということは隙間妖怪にとっては反撃する好機。霧のなかから幽香目掛けて真っ直ぐ来るわけでは無いのだ。それこそ距離すら無視した攻撃を死角からの確に狙ってくる。

紫から放たれるクナイ型の大量の弾幕が放たれ、視界が青と紫の閃光に妨げられる。

流れは幽香から紫に確実に渡った。

背後からの弾幕に、咄嗟に傘をさして防ぐ。

そして弾幕の向こうに佇む紫の姿を見届け、距離を計算する。……これくらいの弾幕、簡単に避けられる。

「甘い、甘いわ」

傘を仕舞い、弾幕の海へと飛び込む。

拡散する弾幕と幽香を狙う弾幕、それらの軌道を読み取り弾幕の穴から穴へと素早く移動する。

「幻想『第一種永久機関』」

スペルカードを使わずに発動するこの戦いが、”弾幕ごっこ”では無いことを幽香は再確認した。

だが、それがいい。拘束するモノなど何もないのだから。

紫の周り一帯が密度の濃い繭のようになると弾幕が回っていた。弾幕が発生するスピードは速いとは言えないが、その正確さ、弾幕

と弾幕の間を縫うように軌道するそれはまるで結界を思わせた。幽香は笑う、この勝負弾幕だけでは勝利なんて出来はしないと。ましてや四重結界並の強さじゃなきゃ渡り合えない、それを知ってるのは紫自身の筈だが。さらりと避けて密度の濃い弾幕へ向かい右手を繭へと向ける。

「そんなもの、消し去ればいい」

煌々と輝く右の掌。

二度目のマスターパークが照射される。

轟、と鳴り響くは雷鳴の息吹。

弾幕を消し去るには充分すぎる威力だった。

「幻光虫ネスト」

くすりと笑われた気がした

「この隙……」

背後からの光の弾幕が幽香を弾き飛ばす。ほぼ零距离から放たれたそれは人間ならば即死なのだが、

「いたたた、あの繭はフェイクだったのね」

「あのくらいでフェイク云々言われても困るわ」

不敵に笑う二人がそこにいた。

「……今ので頭が冴えてきたわ」

「あら、それはそれは」

ふう、と紫は隙間の上に足を組みながら座り幽香を見下ろしていた。幻光虫ネストじゃ幽香に傷を付けてもかすり傷程度にしかならなかった。迂濶、これじゃ決定打が限られてくる。

パワーよりテクニク。

紫はそう自己分析した。霧雨魔理沙のようなパワーのある術はあまりないが、変わりに相手を追い詰める術はいくらでもあった。

……相性が悪い、か。

最強と云われる妖怪、風見幽香、その最強は私とは違う”最強”だ。分が悪い、出方次第では負けるか？

いや痛いのはいやだわ、なんて思っている辺り、自分はまだ余裕なのだど気付く。

「随分と余裕なのね」

その声が聞こえた途端、幽香が眼前にいた。

直撃したはずの幽香の体には案の定かすり傷しか無かった。

全く、やりにくいっいたらありゃしない。

さっ、と紫は隙間を開き鉄塔を前方にいる幽香目掛けて放つ。

幽香は見たことがなかった。

こんな大きな鉄の塊を。だからこそ、前方にあるものが何なのか、素手で壊せるものなのか、それとも弾幕で消し去る事が出来るのか、その一瞬の判断の躊躇いに紫は次の手を打つ。

幽香が鉄塔を薙ぎ払う。

鉄の塊が幽香の手によってへの字に折れ曲がった。

金属が凹むような重低音が響き、鉄塔の向こうの紫へ突撃する。

紫は格闘戦が弱い。

幽香はそうみていた。

紫の懐に飛び込み、鳩尾狙いのストレートを打ち込む。

……その筈だった。

右から、クスリと笑う紫が見えた。

「ち
」

体を捻り、次こそ紫を狙い蹴りを入れようとする。

「遅いわ
」

また、避けられた。

力も速さも私の方が上の筈なのに。

心の中で悪態をつきながら幽香は思案する。

……なにがいけない？

「あら、私は体術が苦手と思ってるのかしら？」

「……………」

紫がまたくすりと笑う。

「それなら正解、私は体術が苦手よ」

「は？」

弱点を話すだなんて、

裏があるとしたか見えない。訝しげに紫を見る。

紫は続ける。

「でも効かないわ、貴女の攻撃を読むくらい容易いもの。二手先、
二手先を読むものよ。だからこそ早い行動が出来る、貴女の上をい

くスピードを掴む事が出来る」

少々喋りすぎたわね、と思いながら

紫は傘に手をかける。

次は結界を使うか、隙間か？

「ありがとう、紫」

幽香が衣服の汚れをとんと叩いて落としながら、落ち着いた声で話す。

「服の汚れは落としておいた方がいいかもしれないわ」
「どういう」

その刹那、幽香がまた紫の懐へ潜り込む。
距離という概念すら忘れ去るほどのスピード、そして一瞬でブレーキをかける反動を利用しての、

「……！！」

幽香の右手が紫を捉えた。

その動きに合わせて紫は右半身を後ろに背け、拳を受け流した。

ピタッ

「！？……フエイント……！！」

「遅いわ」

だん、と踏み込み、紫に膝蹴りが入る。

鈍い音がした気がした。

「ぐっ……」

これだけじゃ終わらない、終わらせない。
体を捻り、怯んだ隙に強力な右ストレートが

「続けざまに食らうと思った？」

「あら、見掛けよりタフなのね」

右手が紫の手によって止められた。

みしみし、と幽香の拳を砕かんとする力に、幽香は笑わざる得ない。
だって、楽しくなってきたから。

「マスタースパーク」

「四重結界」

右手が使えないのなら左手を使えばいい。

……そんな考えもお見通しなのか、紫は左手で四重結界を展開し、
ほぼ零距离の破壊光線を防ぎきる。

”だってそれくらい私でも予測出来たから”

「「詰めが甘いよ、紫」」

紫の背後にもう一人の幽香がにたりと笑って紫を見下ろす。

燦々と輝く両手は、まさしく先程のマスタースパーク。

「……なっ」

稲妻の轟くような爆音が辺りを支配した。

直撃した、その事実だけで充分。

最強と云われる妖怪もあれを食らえばひとたまりもない筈だ、それ

に四重結界の介入すら無い筈。
確かな手応えが、あった。

煙が晴れる。

「いない、か。まあでも薄々分かっていたわ、精々反撃のチャンス
を伺っているか、それとも……」

二体の幽香が一人に戻っていく。

力すら同等の分身術、幽香には容易いことだった。

とん、と地上に降り立ち、

声高らかに、叫ぶ。

「逃げたか、妖怪の賢者。……これぐらいの攻撃で怯むような妖怪
なんて最強と呼ばれる事を恥じなさい」

風見幽香のお花畑 後編

「 …… 詰めが甘いわ」

先程、幽香が放った言葉が聞こえてきた。
言葉は続ける。

「ただまあちよつと驚いたわ。忘れてた、貴女の力を。 …… ああもう、ドレスが破れたじゃない」

それは大妖怪八雲紫の言葉。

その声色には微かに憤怒が入り交じり、この世界を震え上がらせる。

「まあ幸い、隠すべきところは隠せたけど」
「無様ね、大人しく負けましたって言えば」

幽香の目の前に隙間が展開されていく。

大きな黒い大穴。その先は虚空。

”それが何であるかに” 気付いた時には遅かった。

「 …… まさか隙間で飲み込んだ!？」

轟、と爆音が響き、雷撃の槍が幽香を直撃した。

燃え盛るような痛みが幽香の思考を邪魔していく。ああもう、私の力を利用する機転だけは正解。
だってこれは私の魔力だから。

”ただ判断が遅れたから直撃した” だけ、消し去ることなんて容易

い。

爆音が消え去り、燃えような痛みが引いていく。

「無様ね」

幽香の後ろには紫がいた。

振り返らなくても分かる。今まさに切り刻んでやろうか、という声色だ。

「それで勝ったつも「八雲卍傘」　ちいつ!?!」

近距離からの卍傘に幽香は咄嗟に紫との距離を離す。

あんなもの下手な弾幕より、物質化しているから擦り傷じゃ済まないだろう。厄介、弾幕なら打ち消せるのに。

「無駄よ」

幽香との距離すら無視して隙間から卍傘と紫が現れる。

「二次元と三次元の境界」

地面から数多の斬撃を放ち幽香を襲う。その間も卍傘はスピードをあげながらこちらへ向かってくる。

あの斬撃自体にあまり力は無さそうだが、付加効果に気を付けなければいけない。それこそ二重の意味での足止め。

斬撃が当たるぎりぎりのタイミングで幽香は上空へ舞い上がる。

……逃げてばかりじゃ駄目だ、此方からも仕掛けなきゃ。

「卍傘は一つだけだと思った?」

周囲に数多の卍傘が隙間から放たれる。

あれに飲み込まれたら肉塊にされてしまいそうだ、いやあれぐらいなら大丈夫か？

いつぞやの夏のばか騒ぎに紫が使っていた卍傘とは威力が全然違う。正直、四方八方からくるこの攻撃、上か下に避ければいいだけの話。

……問題は避けた時に何を仕掛けてくるか？紫の言う通りだ、次の手を考えなければ形勢は変わらない。

下は紫の放った斬撃が広がっている。

なら上？いや紫はそこまで読んでいる筈だ、ならば

(下に避ければいい)

(下が駄目だから上に、と見せかけて下といったところかしら)

(……と紫が考えるのが定石か)

四方八方から襲いかかる卍傘をすんでのところで上空へ舞い上がる。幽香がいたところに卍傘と卍傘とがぶつかり合い、不快な音が響き渡った。

「あら意外、読まれるなんてね」

ああそうだった、迂濶。

紫には隙間という”目”があるのだから、どちらにせよ仕掛けてくる事には変わりはない。

もしかしたら、

紫を過小評価し過ぎたのかもしれない。対峙したことが無いからこそ、相手がどうであるか分からない。

……紫なら尚更だ。

「そろそろ終わりにしましょう？」

「それはこっちの台詞よ」

紫と幽香が同時に弾幕を放つ。

それぞれの弾幕が相殺しあうなか、二人同時に動き出す。

「魍魎「二重黒死蝶」」

「幻想「花鳥風月、嘯風弄月」」

威力は互角、

この幻想的な世界を彩るかのように、両者の弾幕は美しく、綺麗だった。

両者は至って元気だが、服がぼろぼろに見えるせいか身体も傷だらけになってるんじゃないかとすら思えてしまう。

紫は考える。

幽香は確実に私との戦い方を身につけている。ましてや攻撃に特化した彼女が戦う術を覚えてしまったのだ、”終わらす”と言っても面倒な事になりそうだ。

「永夜四重結界」

広範囲に渡る結界を展開する。

威力こそ他の結界に劣るが、周りの敵を一掃するには丁度良い。

「デュアルマスタースパーク」

分身した二人の幽香が同時にマスタースパークを放つ。

一つは永夜四重結界を、もう片方は八雲紫へ。

しかしそれすらも隙間に飲み込まれてしまう。

残されたのは大きな黒い亜空。あの爆音すら飲み込み、辺りは静寂に戻る。

そして両者の攻撃が轟く。

「次で終わりにしましょう?」「
と、その前に」

幽香が顎に手をあて、紫をぎろりと見詰める。
爬虫類のような鋭い赤い目、その目が紫を捉えた。

「なんで私は植物を操らなかつたのか」勘づいてると思っただけ
どね、その様子じゃ分かつて無さそうね」

まさか、と紫が気付く。

いやそれでも幽香の言葉が何を意味しているのか分からなかつた。
……まさかハッター? ううん、そんな筈はない。

「紫奥義『弹幕結界』」

濃密の弹幕が一斉に発生する。

端から見れば綺麗なそれは、対峙する敵としては凶悪な弹幕。真っ
直ぐ向かうならば、弹幕の海に飲み込まれてしまっただろう。

「私に弹幕は無駄よ」
「あら、そうかしら」

紫へ、確実に避けながら進む幽香。
まるで穴が見えてるかのよう、弹幕と弹幕を抜けていく。

「これで終わりよ、紫」

紫にマスタースパークを放つ構えをとる幽香。
ここで一撃、一撃を決めれば

「結界『魅力的な四重結界』」

幽香の眼前に四重結界が張られていく。

吸い寄せられる力をもったそれは、成す術もなく、幽香を結界へ誘う。ばちばち、と身体が結界に触れた時。

幽香はくすりと笑った。

「花符『幻想郷の開花』」

八雲紫は思い出す。

あの幽香の台詞を。

しかし、既に遅かった。

幽香と格闘したときに仕掛けられた”衣服についた極小の種”が幽香の力によつて急速に成長した。

神経の麻痺、食虫植物、

全てが八雲紫を包み込み、めきめきと締め上げる。

「これなら貴女の隙間も使えないわ！隙間を使つたつて綺麗に貴女だけを切り抜けるなら別だけど。

けど貴女は動けない、そして食虫植物の餌食になればいいわ。…

…尤も、そんなもので死ぬわけがないけど」

勝った、

幽香はため息を漏らすように呟く。

「ありがとう紫」

そして、”腕が焼け焦げた” 風見幽香の意識は暗転した。

*

幽香が目覚めた時には辺りは戦っていた世界ではなく、ひまわりが
燦々と輝くお花畑にいた。

「一本とられたわ、あなたに」

頭上から声がした。

まさしく紫の声だった。

私は仰向けのまま、ひまわりの天井から微かに見える青空を眺めながら、先程の戦闘のような荒々しい声とは程遠い落ち着いた声で紫の言葉を返す。

「いや、引き分けだわ。まさかあの時四重結界の他に貴女の卍傘が仕掛けられていたなんてね。引き分けよ、麻痺しても締め付けられても諦めないなんてね」

感慨深く、呟く。

あの時”紫を倒した”という油断、それが命取りだった。

「あら珍しい、貴女が引き分けにするなんて」

「そうかしら。そうだとしても勝った、という気にはならないわ」

「ふーん、あ、横いいかしら？」

「どうぞ」

幽香が仰向けになつてる横に紫が腰かける。

地面はほんのり暖かくて、まるで包み込んでくれるかのようだった。

「貴女有能力なら私を瞬殺出来たんじゃない？隙間を使って、私の心臓を握ることくらい貴女にとって容易いことじゃない？」

「まあそんなことも出来るけど、けどそれは戦いじゃなくて一方的な虐殺よ。それに死んでほしくないわ」

「死んでほしくない？甘いよ、八雲紫」

「甘くて結構、私はこの甘さを捨てないつもりだわ」

ジリジリと夏の太陽が照りつける。
時々くる涼しい風が気持ち良い。もっとも日陰のお陰であまり暑くは感じないが。

「ここ、なんて素晴らしいのかしら」

「だって私のお花畑だし」

「全てのお花が燦々と輝いてる。貴女のため、幻想郷の為に懸命に咲こうとしているわ」

紫がそう言つと幽香は感心したように頷く。

「花を一つ、頂けないかしら？」

「……まあいいわ、戦いに挑んだのは私だし。ここは一つ貴女と一戦交えた証として。帰る時に選んであげる、貴女に似合う花を」

「それは楽しみだわ」

くすりと笑う様は、戦闘時のくすりと少し違うような気がする。
なんとなく、優しいようななにかを感じた。

「そういえば昔、紫が幻想入りについて教えてくれたわよね」

「あれっ、教えたかしら？」

「”忘れないでよ”紫」

幽香が立ち上がり、日傘をさして一面の花畑を見つめながら、呟く。

「この世界にこんなにも花があるのなら、外の世界の花は可哀想だわ。こんなに綺麗なのに、忘れられるなんて」

「……………そうね」

「ねえ紫」

幽香が紫に向かう。

太陽を背にした姿は逆光でよく見えない。

「時間よ。貴女にこの花をあげる」

手から色んな花が差し出される。

「デルフィニウム、ニゲラ、ローダンセ。貴女には聞き慣れない花なのだろうけど。枯らさないようにしてくれれば嬉しいわ」

「ひまわり以外にもあるのね、ありがとう幽香。大切に育ててあげる。……式が世話すると思うけど」

それってどうなのよ、と幽香。

帰る間際、紫が隙間の向こう、マヨヒガに帰ろうとしたときだった。

「花言葉は……。うっん、今言うべきじゃないわね。

荒らさないならまた来てもいいわよ」

「今度はゆっくりティータイトムとかしたいわね」

そして紫は隙間へと消えてゆく。

隙間が閉じても、幽香はずっと見つめていた。

「語尾が変わる」なんてね……。あの高圧的な台詞を聞くのはも

うない、か。なんだか寂しいわ、貴女が貴女なだけに」

太陽の花に囲まれながら、

幽香は誰にも聞こえない声で微かに呟いた。

風見幽香のお花畑 後編（後書き）

どうもこんにちは。秋が大好きな影猫です。

さて、幽香初登場です！

旧作や西方ネタも取り入れたかったのですが、入れる部分が（ズボンだったり羽根がはえてたり、寝巻きだったり。そういったネタとかさり気に入れたかったなあ。

話はとある夏の話。

紫が隙間で移動したさいにうっかり隙間で花を切り取ってしまったのが発端です。

とまあそこから戦いが繰り広げられる訳ですが。

まあ戦いについては省いても大丈夫かな？

出来る限り、作品に片寄らないスペカを使うようにしましたが、やはり萃と緋がイメージしやすい。ううむ。

幽香にいたってはもう少し力強さを表現できたら良かった。いやでもあれでも大丈夫そう？

とまあ戦闘に関しては特筆するべき所って無いんですよねw
問題なのは最後の話。

the Another Storyでも？と思っただ方もいるかもしれませんが。

今はまだ答えられないけども、あの二人の会話。

そして花言葉。

アイリス・アポロも良かったなー、2つあったけど。

と、今回のあとがきには紫さんが出ないのですた！

あなたを想う 前編（前書き）

みんな、覚えてるよ。

それが”みんな”なのか、

それとも”みんな”なのか、

貴女は知らないけれども。

それはとある昔の、昔のお話。

あなたを想う 前編

「どうやら九尾の狐が隣の村を壊滅させたらしい、明日は我が身、か」

「恐ろしや恐ろしや、この村の法師さんは私らを守って下さるのかね……」

巷では「九尾の狐」という妖怪の噂が飛び交っていた。

なんでも、九尾の狐はという妖怪は村を破壊し一人残らず血肉を貪るといふ事で、この地域の村人を恐怖で震わせた。

九つの尾を持ち、鋭利な爪で切り裂き、強靱な脚力で捻り伏せる。それが九尾。

その桁外れの力に、絶望していた。抗うことも、なにも出来ないまま。その時を待つように。

そして、各村では寺の法師が九尾の狐を討伐しようと躍起になっていた。

そして狐に挑み返り討ちにされたと聞くと、討伐しようと挑む者は格段に減ってしまった。

……畏れを為したのだ。妖怪に。

「 九尾の狐、か」

村は活気が無くなり、冷たい風だけが通り過ぎ、
家から出る者は、畑を耕す者くらいで、

村は確実に寂れていったのだった。
九尾の狐によって。

凄く、苛立たしい。

九尾の狐は地面を拳で殴り、爪で地を抉った。
何故だ、何故だ、と自身を問い詰めても、その苛立たしい原因が分からない。

そのなにものか分からない”怒り”に身を任せ、人間や村を破壊していく。
けれど、それでも満たされない思いがどことなく不自然で嫌らしく、まるで自分の作った蛹から出られない蝶のように苦しめる。

狐には記憶が無かった。

ある日、気付いた時には”そこにいた”
思い出そうとしても、何も思い出せず、微かに残る何者かの温もりだけが残されていた。

誰の、温もり？思い出せない。

言葉も、知識も、ある筈なのに、なぜか大きく空いた空白。
その虚無感が嫌で、自分がなんであるのかすら分からない衝動に陥ってしまう。

そのとき、耳を劈くような叫びを聞いた。

「九尾の狐！！お前のせいで家族は死んだんだ！！仇を……仇を討つてくれる……ッ！！！！」

「五月蠅い」

まただ、また耳障りな奴が現れた。

黒の法衣に、手には御札。……見たところ、先日壊滅させた村の生き残りだろうか、

怒りを露にする限り妖怪と対峙したことがないのか、はたまた私と同じように怒りに身を任せているのか、

どちらにせよ、その殺気が私以外の妖怪を呼び寄せる原因になる。

この法師は気付いていない。

私を殺したい者は人間以外にもいるということ。

そしてそれは、毎分毎秒隙あらばその首をかつ切り、頂点に立とうと静かに私を狙っている。

つまり、先客がいるのに横入りする”雑魚”は私と戦う前に先客に殺されてしまっただろう。

「人間、そこを動くな」

「な、何を」

それを合図に、

静かな殺気が、一瞬にして魑魅魍魎の怒りの殺気が放たれる。

それだけ、強靱な妖怪が九尾を殺そうと今か今かと狙っていたのだ。

笑わせてくれる。

九尾の住まうこの森が静まる。ざわざわ、と木々の揺らめく音しか、響かなかった。

それは九尾を恐れたのか、それともこれから起こる戦いを考えて”森自体”が妖怪を恐れたのか。

冷たい風が九尾と法師の間を翔る。

法師も漸くしてこの場の異様なオーラを感じたのか、辺りをキョロキョロし始める。

とにかく、九尾にとっては”いつも通り”だった。

私を狙いにきた妖怪が、我先にと狙ううちに自滅したり、人間や妖怪と戦う隙を狙い、普段仲間など作らない孤高の妖怪がグループを作って襲いかかるなど、日常茶飯事だ。

それこそ、そんな暇があるのなら自力で手柄を得ればいいのに、と思う。

短絡的で、人間以下の屑。自分が良ければ何やっても構わない。そんな妖怪が周りには大勢という。強いて言えば私を狙う妖怪は全て自己中心的な性格の持ち主だった、そもそもそんな輩ぐらいしか私の目の前には現れない。

そんな妖怪の頂点に、私はいるのだから。

もしかしたら、屑以下の外道なのかもしれない。

「来い、妖怪共。腸を食い千切り、壮絶な痛みと死を貴様等屑共にお見舞いしよう」

その挑発に反応する輩は二通りいる。

己を力量を理解し、まだ死にたくない気付く愚者。ある意味では賢い奴等だ。

だがそれとは裏腹に、そんな挑発にすら乗っかってくる馬鹿がいる、どこまでも短絡的で理解することを知らない屑が。

……丁度目の前の魑魅魍魎共もそうだ。まとめて襲いかかるのが、結局は殺され、学習しない生き物。哀れで仕方ない。

”一匹”の妖怪が動きだし、それに合わせて我先にへと醜い雄叫びを轟かせながら突撃してくる。
実に、滑稽。

傍らでうずくまる法師を一瞥し、そして眼前の妖怪を睨み付ける。

九尾は微かに笑う。

殺してる時だけは何も考えずに済むのだから。

そう考えたら、この妖怪共も無駄死にせずに済む。私の為に。

そういう意味では、奴等には感謝をすべきなのかも知れないが、

それが感謝の対象になるとはどう考えても、出来ない。

雄叫びで震え上がらせ、

金色の毛並みを輝かせ、

四股で地響きを引き起こし、

その九つの尾で全てを破壊してやろう。

私の存在意義は、
それしか無いのだから。

「……………えっ？」

身を屈めて恐怖していた法師が、戸惑い、啞然とする。
そして意識が覚醒し、ふと辺りを見渡した。

どこにもいなかった。

あの忌まわしき妖怪共の影すら、
その異様に静かな妖気すら感じられなかった。いや感じるとするならば、背後にいる九……

「ひっ……」

法師が九尾に気付き、腰を抜かして尻餅をつく。
家族の仇、村を破壊した張本人、こいつさえいなければ平和なのに。

……様々な思いが交錯し、困惑していく。今、私は助けられたのか？と。

もしかしたら九尾は良い妖怪なのかもしれない。法師はそう思った。それはただ法師の良心から引き起こしたものの、極限の状態での判断は時としてその意識すらねじ曲げる。

「きゅ、九尾の狐よ……。お前は」

「五月蠅い。死にたいのか？」

一蹴。

その一言は法師の頭の中を恐怖で埋め尽くす。

もはや支離滅裂な頭の考えに、体はついてこない。

なんとかかして、震える足で立ち上がり、何度も何度も転びながらも、九尾の元から離れていく。

結局、家族の仇よりも自身の恐怖に負けて逃げてしまう。

それが、悔しくて悔しくて。

けれどそれに抗う事が出来なくて。

「……畜生ッ、畜生……!!」

ただ、それしか言えなかった。

恐怖で前が見えなくなるうと、走った。足がはち切れそうになっても走った。

人間は思っている以上に、強くはないのだから。

あの妖怪が、追いかけてくるその前に、

逃げなくてはいけない。

それが至極一般的な答えの筈なのに、筈なのに。

何故かそれが間違っているような気がして、ならなかった。

九尾は何度も、何度も転けながら逃げていく若者を見ていた。

法師の姿が酷く苛立たしく、けどそれなのに、地平線から消え去るまで見届けていけないような気がしたからだ。

彼の姿を、どこかで見たことがあったような。いや違う。彼自身ではない、

あの必死さを、私はどこかで知った。そのどこかは分からないけども。

気づけば、夜、だった。

空気が、止まっていた夜だった。

「あなたが噂に名高い九尾の狐かしら？」

不意に背後から、声がした。

九尾には背後をとられたという感覚はなく、ましてや妖気すら感じられなかった。

艶やかなその声は明らかに女性のものではあった。

腐れきった妖怪共の声とは対照的なそれは、九尾が久々に耳にした人間のような声でもあり、

逆にそれが、九尾にとって警戒する理由となった。

「ああ、私が九尾だ」

振り返り、静かに応える。

その目の前には一人の女性。

九尾の毛並みのような金色の長い髪に、紫のドレス。

不思議、としか形容出来ない女性だった。

「人間風情が、私になんのようだ？」

「人間？……………。そうね、あなたから見れば人間かもしれないわね」

まるで馬鹿にしたような口調で九尾を煽る。

なんなんだこいつは、と訝しげに女性を見つめ、考える。

その台詞から察するに、彼女は人間では無いことが分かる。けども人間の姿をした妖怪なぞ見たことがない。

人間を格下に見てる彼等を何度も見ていたのだ、好き好んでそんな姿になるとは思えない。

人間の皮を被った妖怪？それが妥当か。いやだとしたら何の為に。

「今日は挨拶だけ、また会いましょう。九尾」

くすり、と笑う女性。

女性の手が弧を描いたかと思うと、一本の線が目の前に現れた。

そしてそれはやがて展開していき、真っ黒な闇が九尾と女性の間に出現する。

その闇は、どこか痛々しくそして見てるだけで何故か気分が悪くなつた。

「さようなら」

女性の声が出た後、目の前にあつた黒い闇が一瞬にして、女性もろとも消えた。

その異様な光景に、九尾はただただ見ていることしか出来なかった。妖怪というものからしても目の前の出来事はあまりにも唐突で、闇のなかに消えるというイレギュラーな力に、九尾は女性がいなくなつた後も、消えた虚空を見ていた。

噂は、常に変容する。

それは話し手と聞き手のイメージはイコールではないから。

聞き手の、聞いたときの印象、気分、そしてそれを聞いて何を感じたか。

それらの要素が混じりあい、噂は広まるほどその真実性は失われていく。

現に九尾の狐は数個程しか村を破壊していないし、弱い人間をわざわざ殺すことなんてしていなかった。

その事に気付いた妖怪が九尾という名を借りて、村を無くした人間を襲っている事を知ったのはつい先日的事だった。

今では、誰もが恐れ、誰もが殺したいと願う存在になっていた。いや、なってしまうたと言うべきか。

けれども、一人だけ違う奴がいた。

金色の長い髪に、紫色のドレスを着た女性。

彼女は一体、何者なのか？

そんな疑問が、九尾の頭を悩ませる。

彼女はあの時、挨拶しに来たと言った。

ならば、また来るかもしれない。また会えるかもしれない。

待て、私は会ってどうするつもりだ？

ああそうだ、もしかしたら私はあの女性と関係があるのかもしれないと、

もしかしたら私の記憶を呼び覚ます鍵になるかもしれないから。

そんな淡い希望を、持ってしまったのかもしれない。

私らしくない。

野暮な考えを消して、

今日も妖怪共を殺していく。

それでも毎日、私を殺そうと襲いにかかる妖怪や人間が後を絶たない。
金色の毛並みも、返り血に染まり黒色に変容していた。……休む暇が無い。
休む暇があれば、逆に苛立ちで休むなど出来ないだろう。
休む事なんていらぬぐらいの、体力は持ち合わせていたし気が緩めば殺されてしまうだろう。油断ならないことは分かっていた。

蒼天を見上げ、高々と咆哮する。

木に止まっていた鳥が羽ばたき、葉は散りながら彼方へ消え去っていく。

私は一体なんなんだろう、いつしか自分の存在意義を考えていた、それはあまりにも空が綺麗だったから。

……なんて言い訳をして、感傷に浸る。 ああ、一体私は何をして
いるんだろうか、と。

そしてその日は意外にも早く訪れた。
雨の日だった。

黒く染まった血は雨によって流されたし、適度な雨の強さは気持ち良いとさえ思えた。

そんな雨のなか、彼女は唐突に現れた。

薄紫色の傘をさして、前に会ったときと同じ衣装で、女性はやってきた。

前と同じようなカラクリを使って、気配すら感じないまま九尾の目の前に現れて、彼女はにいと笑った。

それが純粹な笑みなのかそれとも邪悪な笑みなのか、九尾には分からなかった。

「久しぶりね、九尾の狐。あなたの名前はなんて言うのかしら」

「現れて早々質問か。私に名前なんてものは無いさ、九尾でもなんとも呼ぶがいい」

「じゃあ九尾と呼ばせて貰うわ」

会話が始まった。

不思議で、奇っ怪で、

人間とは少しだけ違う風貌をした、女性との対話。

「名前なんかより、聞きたいことは無いのか」

「あら、名前つてのは大切よ。名前は人生を変える魔法の言葉、それくらい重要なのに存外に扱っちゃ駄目よ」

コホンと、女性が咳払い一つ。

「まあ”そんなことはいいわ”九尾、あなたに聞きたいことがあるの。」

あなた、私と手合わせしてくれるなら本気でかかってくれるかしら？」

予想外の言葉だった。

そして彼女もまた、私の首を狩ろうとする輩だったのかと思い、拳に力が入る。

いや、期待していた自分が悪かったのかもしれない。

……残念だ。

多少他の妖怪と違うだけで、本質はどんな妖怪とも変わらない。頂点を目指す、ただそれだけ。

「いいだろう」

ただ一言、

その言葉を皮切りに、九尾が動く。

一言で例えるなら、嵐。

雨さえも吹き飛ばす瞬発力で、女性目掛けて襲いかかる。間合いを一気に詰めて、相手の懐へと潜り込み、そして

「……………!?!」

その速さに、女性は驚いた顔をしていた。

だが、その女性の手は確実に九尾を狙っていた。

タイミングを合わせられていた。

懐へ飛び込み攻撃するのはいい、だが、

懐から攻撃を避けるのは難しい……………!!

「早いわね」

「お前こそ」

そんな言葉が交わり、

避けるより、攻撃した方が良いと判断した九尾が拳を振るう。

常識外れな速さと力。

そしてその場に応じた判断力。

それが九尾の強さであり、頂点云われる所以だ。

単純かつストレート。なんの小細工も要らない、最強だった。

……それなのに。

「結界だと!？」

懐へ飛び込んで拳を振るうまで、たったの数秒だった筈なのに。

結界が拳を捉え、がっちり動けなくさせる。

迂濶、

まさにその一言だった。

「噂によらず、強いわね」

戦いは一瞬で終わった。

いや、もしかしたら戦いすら起きてなかったのかもしれない。
そんな呆気ない”一瞬”で全てが崩れ去ってしまった。

意識が暗転せしめようかとするとき、

微かに、彼女が嬉しそうな顔していたのは、気のせい、か。

ただ、あの黒い闇が自分の体を包み込んだとこまでは、微かに記憶していた。

「やっと会えた」

そして目の前が暗転した。

臆気に覚えていた微かな手掛かりだけが、
あなたと世界を結ぶ、鍵だから。
いつまでも、いつまでも、
変わらないのだと、
そう、思っていた。

けど、この螺旋階段は、
どうやら壊れてしまみたい。

……残念だけど、仕方がないよね。

気付いた時には、雨はあがっていて、
柔らかな日射しが、二人を照らしていた。
何故か、気分が良かった。

すると、後ろから女性の声がした。

「手合わせ、ありがとう」
「初めてだ。負けたのは」

悔しい筈なのに。

「だが、清々しい気分だ」

いつも沸き起こっていた、

あの苛立ちが、嘘みたいに。

「私、強い従者を探してるの。あなた、私の従者になってみない？」

それは、大きな転機。

九尾にとって、それは、

単調な日々から抜け出せる、救いの手。

だから、そんな誘いにすがってみるのも悪くない気がした。

ああそうだ、こんな謎に満ちた胡散臭そうな女についていこうだなんて普通は思わないだろう。

……何故かは分からないけれど、この女性に付いていけないといけない気がしたから、

今を逃したら、もう二度と会えない気がしたから。

それもこれも、普段は抱かない気持ち。なんだかおかしい気分だ。

「あんたの従者になってやる」

「あなた様の従者にお仕えさせてください、でしょう？」

「……………あなた様の従者にお仕えしてやる」

「さ、せ、て、く、だ、さ、い」

「……………お仕えさせてください」

「よろしい」

そんな、少し引つ掛かる言葉に戸惑いを感じながらも、九尾はこの

女性の下につくことにしたのだった。

こんなにもあっさりと、まるで運命付けられていたように。今までのがまるで幻想だったかのようには。

「これからは私の事は敬語で呼ぶこと。私がやれといったらやること。あとそのでかい図体をどうにかすること」

淡々と、九尾に対して注文していく。

調子乗ってるなと思う九尾だが、如何せん自分より強いのだ。歯向かう余地がない。

「でかい図体は仕方ないだろう」

「……………」

ぎろり、と睨まれた。

「この姿は仕方ないじゃないですか」

「分かった、その姿に関しては私にいい考えがあるわ」

「ならわざわざ言わなくてもいいじゃないですか」

はあ、と呟く女性。

こんな小さな人間みたいなやつが、私より強いだなんて今でも信じられない。

「なあ、あந்தの……。ああ、あなた様の名前はなんていうんだ？」

しどろもどろの言葉遣いを、華麗に無視しながら女性はあっさりと自身の名前を告げる。

「八雲 紫よ」

それは、聞き覚えのある名前だった。

けどその名前を聞いた時、何故か哀しく感じたのは何でだろうか。
今の九尾は、分からない。

八雲紫。

その名前を心の中で反芻する。

八雲紫、八雲紫、八雲紫……。それでも、何も思い出せなかった。

「んでその姿を何とかする方法なのだけど、あなた私の式にならない？」

紫が続ける。意気揚々と。

「私の力も少し貰えるし、”私の式”ということならヒトガタになれるし、一石二鳥だと思うのだけど……！」

「本音はどうなんですか？」

「家事を全てやってほしい」

「……………」

まあでも、悪い話ではなさそうだ。

家事がなんのことか分からないけども、八雲紫の力が少しでも貰えるなら越したことはない。

いつかきつとあんたを越えるために。

「で、どうするの？」

「紫様の式になる」

「うん、それでよろしい。んじゃ少し目を瞑りなさい」

紫の言われるがままになる。

目を瞑っている時間が、長く感じた。

そして意識はまた途切れた。

あなたを想う 後編

……ここはどこだ。

周りを見渡す。

周りを見渡しても、白、白、白。真っ白な世界だった。

声を出しても響かない。壁がないのだろうか。

全てが同一色のせいか、平衡感覚が掴めず、足元がふらつく。重力があるのに無重力の気分、といったらいいだろうか。形容しがたい状態のなか、自身の手を見てみた。

無い。

それどころか、体が無かった。

まるで存在だけが其処にあるような感覚。

何が起こったんだ。

まさか、八雲紫に騙された？

いやそれよりもここは何処だ？

様々な疑問が交差していた。

『安心するんだ、ここはお前の意識の中だ』

頭に直接呼び掛けられた。

何が何だか、分からない。

『戸惑うのは仕方ない。次が次なだけに、今回ばかりは特別よ』

”自分の声”が語りかけてくる。
おい、次ってなんだ。
特別って、なんだ……？

分からない。

分からない。

意味不明。

その瞬間、

九尾の頭に膨大な量の、映像が入ってきた。

寂れた神社の光景、

桜の花びらが散る長い階段の光景、

見たことがない、へんてこな服装をした人間と妖怪の光景、

そして、

『 ”次の私と幸せに暮らす方がいいに決まってる。” 』

『 ありがとう、そして、ごめんね 』

……そして、八雲紫の映像も。

なにもかも全てが直接入り込んでくる。

頭が割れるような痛みが九尾を襲つ。

あああああああああ！？
なんだ、いまのは……！！

絶叫。意識だけの世界なのに、その筈なのに、
壮絶な痛みが襲いかかった。
止めてくれ！！

……痛い、助けて、……くれ。

ああああああ……。

九尾の記憶が甦っていく。
全ての記憶を。私が、私であった頃から。
最初の八雲紫と会った時から。
ああ、そうだ。
何一つ変わっちゃいなかった。

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

思い出した。

私の事も、八雲紫の事も。
有耶無耶だったものが、はっきりした。

『思い出した？』

思い出したよ。

『貴女は全部知った。けれど貴女は言うてはならない、皆のために、何より彼女のために』

分かった。

けど少し聞いていい？

『いいよ』

今の紫様は、

私が最後に会った紫様？

それとも……。

『それは自分がよく知っているんじゃないのかい？』

……………。

『貴女は最後まで見ていないから、分からないの』

最後？

『ええ、けどそれは最初でもある』

聞いたことがある。

紫様が言っていた。

けど、紫様は最後しか無いって。

『さあ、お別れね』

えっ。

待って、私は何をすればいい？

『君は何もなくていい。いつも通りに。ただ出来ることなら、彼女を理解してあげて欲しい』

……分かった。

『それじゃ、さようなら』

さようなら。

ふう、と深呼吸をして。

私は眼前を見据える。

白の世界はやがて消えるだろう。

今の不可解な現象がなんなのか説明出来ないけど、それでも、私の中のかなにかが満たしてくれたのは、私を取り戻したから、だろう。

さあ、戻ってきて。

こんなにも清々しい気分なんだから。

「これで晴れて私の式ね。どう？人間の姿も悪くないでしょ」

徐々に、頭が覚醒していく。

目蓋を開けると、自分の手が見えた。白くて透き通るような肌、五本指の手。

その手で自身の顔をぺたぺたと触り始める。

そして見上げる。

何年も、何十年も、

それこそ気が遠くなるような歳月を共にしてきた主人が、そこにいた。

それが、嬉しくて嬉しくて。

「ちよつ、え、あつ?!」

紫に飛びかかって、抱き締める。

いつまでも、温もりを感じていたかった。

不意に、嬉しくて涙が溢れてきた。手と顎が震えて、ただ抱き締める事しか出来なくて、

「ゆ……かり……さまあ……っ」

「ど、どうしたのよ」

「あり……がとう、じぎい……ますっ……」

溢れかえる感情で、嗚咽が止まらない。

もし貴女が私を知らなくても、

私は貴女を知っている。

誰よりも幻想郷を愛し、

決して表舞台に立たなかつた少女。

その心の内に秘めた想いは決して明かさず、全てを抱え込んだ博愛者。

私は貴女を尊敬していて、

私は貴女が好きだから。

また再会出来たことが嬉しくて。

またやり直せるんだと思って。

ただいま。

帰ってきました。

「な、何泣いてんのよ！そんなに嬉しかったの？」

「……………はいっ……！」

何度も、縦に頷いた。

「まあその……、家に帰るからついてきなさい。私の手となり足となるんだから覚悟するのよ」

「はい、紫様！」

「うーん、従順過ぎてなんだか怖いわ。式になるとこんなに性格が変わるもんなのかしら……」

紫が隙間を開けて、誘導する。

この黒い闇が怖かったのは、きっとあの最後の日の所為だろう。

私を追い詰めた無数の隙間、何が何なのか分からないまま隙間へ飲み込まれ、意識を失い、式を解かれていた私は元の九尾の妖獣へと戻った。

今までの記憶を消されて。

あれ？

それじゃあまるで……。

まるで、

輪廻の輪みたいじゃないか。

それが、何度も何度も繰り返されているのなら、

今回、私が記憶を取り戻す事は”特別”であって、今までの私は記憶が消されたまま上書きされていた……？

考えれば、考える度に、

何か知ってはいけないような事を、知ってしまいそうです。

それでも、考えてしまう。

この世界の秘密を、

そして、あの最後の日に紫様は何をしたのかを。

けれどあの時何をしたのか、知る術は無い。それはまだ起こっていないのだから。

今聞いたとしてもきつと紫には分からない。

全ては謎と共に、終わってしまったのだから。

「ここが私の家」

紫の隙間をくぐった先は、

あの懐かしいマヨヒガの家だった。

赤い鳥居を通りすぎ、その家を目に焼き付ける。そして同時に、本当に戻って来たんだと実感した。

これは、夢なんかじゃないと。

「んじゃ家周りの掃き掃除よろしく」

「はい、紫様」

紫が隙間を使つて箒を取りだし、それを私に渡す。

「終わったら入ってきなさい」

紫がそう言つとすたすと家に入つていった。
残されたのは一本の筭。

「まだ、会つたばかりですもんね」

よくよく考えればそうなのだ、紫と私を結んでいた絆は消えている。
そしてそれは、今新しく結ばれようとしているのだから。……記憶
があるというのは良いことだけでは無いみたいだ。
早く、早くその溝を埋めたくて、焦ってしまう。

「……………」

分かつてはいた。

時間が解決してくれるのも分かつてる。

それでも、それよりも早く。

「私は、何をやってるんでしょうね……………」

何年も、何十年も待つていたのに。

彼女を目の前にしたら、待つことが出来なくて。

解決法なんて無いのに。

首を横に何度も振つて、考えていたことを忘れようとする。

幸せじゃないか、また彼女に会えたんだから。

そういえば、

彼女は強い従者を探しているようだった。そして身の回りの家事を
させようとしていた。

彼女が欲したのはその両方か、それとも……………？

前はとうだった？

記憶が戻ったとしても、
気が遠くなるような歲月なのだ。……毎日の事を全て”覚えて”は
いない。

塵を掃きながら、くすりと笑う。

「結局は、待つことしか出来ないんですよね」

狐と猫によろしく。

その言葉が頭の片隅に残っていて、
忘れたと思ったら、思い出してしまう。それが本当に片隅にあるせ
いか、紫自身気にも止めていなかった。

「……………」

大妖怪。

この座につくまで、何度妖怪と対峙したのか分からない。

それくらい戦っていたつもりだし、経験もあった。

九尾だってそうだ、強い妖怪と聞いてやってきたのだから。なのに。

……戦ってみたら、一瞬でカタがついた。

それなりの強い妖怪なら一日で戦いが終わるなんてざらにあるのに。
力、速さ、判断力、全て私にひけをとらないレベルだった。だけど、
だけど。

「……手加減、されていた？」

いやそんな風には見えなかった。手加減とは違うような……、何か
が働いたような気がする。

それを説明出来ないのは、ただ単に九尾が強くなかったということ
を信じたくないだけだから？

違う、違うけども……。

「……っ、分からない」

分からない、分からない。

何が？

上手く、言葉に出来ない。

分からない、という事にしたんじゃないのか？
違う。

「……手加減、九尾、感情、不明、分からない、繋がっている、箒、
扇子、秋は空が晴れている、金の髪……」

思い付いたワードを並べ立てる。

頭が勝手に排除しているかもしれない、もしかしたら分かっ
ていても分からない無意識の削除があるかもしれない、
だからこそ、ワードを並べ立て再確認する。

「答を出して、意味がある問だったかしら」

自己解決。

そう自分に言い聞かせる。

諦める。

そうとも言っただろう。

分からない。

あの九尾と私が、何か関係があるような気がして、けれどこの世界にそれを示す証拠が無いのだから。

だから彼女、八雲紫は繰り返す。

秋の夕暮れは綺麗だった。

雲一つ無い秋空は朱に染まり、八雲紫の家は黄金色に輝く。九尾は目を細めて夕日をみやる。

ずっと見ていたら溶けてしまいそうな、そんな夕日だった。

掃除が終わり、紫の家にあがらせてもらう事にする。

「紫様、掃除が終わりました」

「ありがと。さ、上がって」

玄関から隙間を使って、ぬっと現れる紫。

その顔はさつきみたよりも幾分気の抜けたようだった。簡単に言えば友達を家に招く時のような、そんな表情。

「ああ、靴はちゃんと脱ぐのよ」

紫の後ろを着いていく。

長い廊下を歩き、居間へとたどり着いた。

その間、二人は別段話しはしなかった。九尾としては何も喋らない紫が少し怖かった。

何を考えているのか分からない。

お互いがお互いに、分からない。

それぞれの疑念とは少し違う、何かを感じながら。

「ねえ九尾」

「はい」

「もう一度聞いわ、私の式になる？」

「式になったんじゃ」

「違う、未来永劫私の式になれるか聞いているの。あなたにはその覚悟がある？」

真剣な眼差し。

私でさえその瞳に恐れを為してしまう。

でも、だからといって、

私の気持ちは揺るがない。

「ええ、あります」

だってその問いに何度も応えたから。

貴女に、仕えたかったから、

私はこれまで以上に貴女を慕っているのだから。

「嘘、嘘よ……。そんなの。あり得ない。あなた、本当にどうしたの……？」

「私は貴女に会って変わりだったので。私は、私は貴女に仕えたい……！」

紫には全部伝わらなくても、その断片さえ伝えればいい……。こんなところで、こんなところで。物語は終わってはいけないのだから。

「九尾、貴女は何でそんなに私のこと」

私だって分からないですよ、けど貴女に仕えなきゃいけないような気がして。そんな台詞が、繰り返し返されていたのかもしれない。でも、漸く理解出来た。

「私は……、きっとそういう役なんでしょうね」
「役？」

「紫様が主人公の物語です。私は貴女の従者っていう”設定”なのかもしれない」

そう、だから、

「……そういう運命なのかもしれないね」
「運命、ねえ」

紫が笑う。

その動作に九尾がたじろぐ。そして紫は九尾に背を向けて縁側へと歩き出す。

縁側からの庭の眺めは素晴らしいの一言だった。

深紅の紅葉が舞い、夕暮れ時の美しさを更に演出していた。

「これが運命なら、繋がってるのかもしれないわね。もしかしたら私と貴女には何か、あるのかもしれない」

紫の背中が、寂しそうで、小さくて、
まだ、主人も未熟なのだと思った。この背中を見て、私は生きていく。

「あつたら、素敵ですね」

私も未熟だから、迷う。
そして、揺らぐ。

「ねえ九尾」

「はい」

「よろしくね」

「……はい！」

紫が振り向いて九尾の目を見る。

心の底まで見透かすような眼差しにたじろぎ、戸惑う。

「あなたが女性のひとがたになっただってことは元が女狐でことかしら？なるほどなるほど」

「は、はあ……」

ああ観察されてたのかと思い、安堵して胸を撫で下ろす。
全くもってこの人の考えてることが分からない。
けどそれでもいい、それでもいいのだ。

「まさか男だと？」

「いやまあ、なんとなくそう思ったから」

「なんとなくでもつらいです」

「そもそも狐の性別の見分けなんて分からないわ」

「……う」

だって貴女はこの世に一人しかいないのだから。

「そうだ、私があたなの名前を命名してあげる」

ああ、やっと呼んでくれる。

私の名前を。

これから何年も何十年も、それこそ未来永劫、紫様に呼ばれるその名を。

「そうねえ、私の名前が紫だし……」

名前はね、凄く大切なの。

自分の人生を決めるくらい大切なのだから。

「うん、決めたわ」

紫がコホンとわざとらしく咳払いして、九尾に向かって笑みを浮かべる。

柔らかな、笑みだった。

「心の準備はいい？」

「それはどういう……」

九尾の声を無視して紫が続ける。

「あなたの名前は……」

「藍。八雲 藍よ、宜しくね」

藍、藍、藍……。

自身の名前を心の中で復唱した。

紫から呼ばれた事が嬉しくて、

熱い何かが胸の奥から湧いてくるような感じがして、

「……はいっ！」

はにかんだ笑顔で主人に応える。

これから先、何があるかと崩れはしない思いを胸に。

貴女と共に、道を歩んでいく。

あなたを想う 後編（後書き）

お久しぶりです。

今回の話は藍と紫の話でした。

それほど長くはなく、文字通り短編話です。それでも書くべき事が書けてきました。

ある意味重要なファクターだったのではないかと。

解説らしきもの。

とまあ今回は特筆するべき点は無かったりします。

三人称で書くようにはしてませんが、後半部分は藍の視点から描いています。

藍の紫への想いが分かる場面ですね。

知る者と知らない者、手が届きそうで届かないもどかしさ、葛藤、等を心の隅で考えてたりします。

東方短編集はシリーズ（？）通して二次設定がかなり前面に出ています。

今までにご指摘が無かったのも不思議なくらい。

今後

なんだかんだで、シリアス二本、バトルもの一本で休む暇もないので、

次らへんにまったり話が書けたらいいなーなんて思っています。

それでは今回のあとがきに紫さん出すの忘れてましたが、次回のあとがきまでさようならということ。

それでは。

09 / 10 / 17 記

地下鉄の中で。

暇を持て余した天人の遊び

そう、遊びのつもりだった。

いやちゃんとした理由もあったのだが、自身が楽しんでいた以上、遊びと形容されても仕方がない。

そして彼女、比那名居天子は大規模な異変を起こし幻想郷の住人から返り討ちにあつた。

返り討ち、というよりは集団リンチに近い攻撃を受けた気がする。

「……おかしいな」

彼女は心の隅では納得していながら、その理不尽さに、憤る。

「それはともかく、暇だわ……」

比那名居 天子。

彼女は紛れもない天人であり、そして同時に、不良娘であつた。

天子は雲上の世界、天界から地上を眺めていた。

傍らには小鬼である伊吹萃香がちょこんと鎮座していた。

ここに来たばかりなのだろうか、彼女はまだ酒を飲んでおらず酔ってはいなかった。

天子はそれを一瞥すると、また地上を眺め始めた。

萃香が毎日来るようになったせいか、今こうして天界に来ても気にも誰も萃香を咎めなくなった。

それは追いつても居座る萃香に原因があるのだが、本人は気付いていない。

「……ああ、そうだ」

ふと、萃香は思い出したかのように天子に訊く。

「暇なら地上に遊びにいったらいいじゃないか」

そう、そうなのだ。

楽しい事が溢れる地上に行けばこの退屈も紛れるだろう。

けど天子は地上に行きづらかった。行きたいのだけど、行きたくない、そんな矛盾した葛藤が地上へ降りることを躊躇わせる。

「だってほら……、私皆に迷惑かけちゃったし。その、き、嫌われちゃったかなーなんて、さ」

天子は恥ずかしそうに、小声で己の胸中を吐露する。

いくら我が儘でおてんばなこの天人も、それ以前に少女であった。

大異変を起こし、そのせいで幻想郷の住人に迷惑をかけたことを少なからず理解しており、

またそれを分かっているからこそ、嫌われてしまったのかもしいな
いと思うようになっていた。

「あ、酒が切れた。新しいの持ってきて」

「ああもう、勝手に持っていきなさいよ！」

……。

「って、酒が湧いてくる瓢箪はどうしたのよ」

「たまには天界の酒もいいかなーなんて」

既に出来上がってる萃香を見てため息を一つ。

これで弾幕勝負も平然と行うのだから凄い。

天子と戦った時でさえ、すくなくならず酔っていたような気がする。そんな小鬼から目を反らして、もう一つため息をついた。

「気楽なものね」

羨ましい。

その感情で埋め尽くされた。

そのやり場のない気持ちに憤りを感じながら背伸びをして帽子を被り直す。

「あーあ……」

「どうしたのさ、あんたらしくない」

「宴会の時は楽しかったけど、そんなことで仲直り出来たなんて思えないし……。表面上付き合ってるだけだったりして、なんて思ったりさ」

「あー……」

萃香が頭を掻いて、ため息をつく。

「あんたはさ、皆と仲良くなりたいのかい？」

「……ええ」

「うーん、困ったもんだねえ」

この天人は勘違いをしている。
それも酷く悪い方向に。

実際、彼女が起こした異変は局所的に凄惨なものだったし、神社を壊された霊夢が怒るのも仕方なかった。

けれど後日に修理と宴会の形で仲直りした筈だ。だがこれをこの天人は表向きの仲直り、と認識してしまった。

この場合、彼女に何言ってもその考えを曲げるなんてこと……、そもそもプラス思考には傾かないだろう。

……厄介ね、これは。

「分かった分かった、とりあえず地上に赴いてみたら？」

「だから私は」

「いいからいいから、ただし謝らないこと。あとお礼するときはやんと言っただよ」

「……………」

「総領娘様、準備は出来ました」

「い、衣玖？いつからそこに」

「いや元からいたんですが」

「んじゃ二人でいつてきなよ」

「さ、行きましようか」

「うー……………」

天子と衣玖がふわふわと漂いながら地上へ降りていく。

秋の妖怪の山は綺麗の一言だった。

紅葉した木々が茜色に染まり、いつもの妖怪の山とは違う綺麗さがそこにはあった。

「それにしても衣玖ったら空気読めないわ、衣玖がいなけりゃ行かなくて済んだのにー」

「空気を読む、のを履き違えているような気がします。……それに、総領娘様は少し勘違いしているみたいですし」

「とういか空気よね、衣玖って」

「話を聞いてください」

はあ、とため息。

衣玖は何でこの子のお世話をしてるんだろうか、と隣人のお姉さんのように頭を悩ませる。

まあ実際天子はご近所の娘さんみたいなものなのだが。

「聞いてるわ、何を勘違いしてるって？」

それでも、退屈しなかったのは事実。

「はあ……。それを私の口から言ってしまったら意味がないじゃないですか。総領娘様ご自身で気付かなきゃ」

「えー、衣玖のけち」

「けちじゃありません。それこそ空気を読んでですね」

「あ、守矢神社の巫女だ」

「……………」

「わ、分かった、分かったわ。話はちゃんと聞いてるから睨まないで！」

ふわふわと秋の山の上を飛行しながら、はたと衣玖が天子に訊く。

「総領娘様、何処にいくおつもりで？」

「決めてない」

「……………」

だろうと思った、

とまあ、そう思った衣玖でさえ何も考えていなかったのだが。

秋風にさらわれながらふわふわと漂っていたら、なんと気持ち良い
ことか、

しかし季節は秋、幻想郷の住人は冬を乗りきる為に備蓄を始めてい
る。

それは妖怪にも当てはまることで、つまり、こんな所でのんびりと
漂っていたら妖怪達の弾幕に当たったりしかねない。特に妖精とか
無駄にテンションが高い神様とか。

「ねえ衣玖」

「なんでしようか」

「あそこ行ってみようよ。ほら、珍しいものがある店にさ」

「おや、珍しい。天界の人がくるなんて」

香霖堂の店主、森近霖之助が天子達が入ってくるなりそう言った。

「人里にある店とは違う品揃えだからね、見たこと無いものばかり
だと思うよ」

天子と衣玖は香霖堂の中を見渡す。

なるほど確かにそうだ、人里では見たことが無いものばかりだ。
…少なくとも、何に使うのか分からない用途不明のアイテムが。

けどまあ、見慣れないそれらを見るのも悪くない。

「総領嬢様、これはなんででしょうか？」

衣玖が指差す方を見る。

その先には四枚の羽根が円形状に規則的に並べていて、柱にかけられていた。

衣玖より少し高い位置にあるそれに、天子は何であるか考える。

「羽根があるから……、妖精？」

「柱に妖精をくくりつけてるのなら早くここから退散すべきです」

「ああそれは扇風機と言っんだ」

「せんぷうき？」

「ああ。この扇風機ってやつは羽根を動かして冷たい風を送ってくれるのさ」

「風を送ったら寒いじゃない」

「夏なら重宝すると思っけどね」

「あ、なるほど」

天子と衣玖は森近の話を聞いて、まじまじと小さな扇風機を眺める。

「でも、動かなくなっちゃってね。八雲紫が言うには電池とやらが必要みたいで、生憎電池は無くてね」

「……電気なら出せますが」

「いやそっいう電気とは少し違うのさ、気持ちだけ受け取っておくよ」

森近がにこやかに笑みを作った。

少し経って天子は他にめぼしいものがないのか、衣玖に「さ、出るわよ」と陽気な声で話しかける。

「まあ、気が向いたらまた来たらいいさ」

「それじゃその時は」

衣玖が丁寧にお辞儀して天子の後を追う。

「次はどこにいきましようか？」

「うーん、お腹減ったし食事をもてなしてくれる家とか」

「……」

「な、何よその目は！」

「いえ何でもありません」

ああそういえば、

あの魔法使いと人形師はこの森の何処かに住んでいるんだっけか。

「魔理沙……だっけ？その人の家に行ってみようよ」

天子の脳裏には、魔理沙が放つ大きな光線　　マスタースパークが
思い出される。

あれを何度まともに受けただろうか。負けては挑み、負けては挑み
と執拗に挑んできたのもあって、手の内を出しきった天子は負けて
しまっていたのだ。

全く、コンティニューのし過ぎだ。

まあそれは兎も角、

今は香霖堂から少し離れた魔法の森の上空にいる。

普通の人間ならば、立ち入る事が出来ない魔法の森。じめじめとした陰湿な空気が、上空にいる二人さえ顔をしかめてしまう。

「本当に、この森のなかに魔理沙さんはいるのでしょっか」

「いや……、まあ本人が言ってたし」

「人間が住めるような環境ではありませんが」

「そ、そんなことはどうだっていいのよ！探しましょ」

「はあ」

二人が森の中へと降り立つ。

案の定、森の中はじめじめとした空気が漂い、うっすらと霧がかかっていて視界も悪い。

重苦しい空気が、この森には適応出来ないと体が反応してしまっ。

「衣玖、貴女の袖に茸が生えてるわ」

「は、はいいいっ!?!」

慌てて袖を確認する衣玖。

「嘘よ」

「ッ!?!」

涙目になりながらも、無言の訴えをする衣玖。

それをさらりとスルーし、奥へ進んでいく天子。

「あっ」

「どうしたの？」

「肩に茸が生えてますよ」

「そんなわけ……、えええええっ!?!」

「と、取ってー!」

「さあ行きましようか」

「無視すなー!」

やれやれ、と衣玖が呆れる。

「私が空気を読めば、統領娘様に私が笑顔で雷を呼び出して貰うこと丸焦げにしてしまうでしょうね」

「いや、それはやめて……っ!」

「ミディアムがいいでしょうか、それともレア?」

「わー!衣玖が壊れたー!」

「……何してんのよ貴女達」

そんなやりとりをしていたら突如背後から声がした。

その声は驚きと諦めのニュアンスがあった。驚きは勿論、「何でこんなところに?」という懐疑だ。

「あ、アリスさん」

アリスと呼ばれた少女が衣玖の言葉に反応し、一瞥した。

金髪にヘアバンドをし、透き通った瞳、白い肌をした綺麗な人形師がそこにはいた。

「魔理沙さんに用がありません」

「ん、どんな用なの?」

「昼食を頂く、と総領娘様が」

「……………」

アリスが可哀想にと天子を見つめる。

「だから茸を生やそうとしたのね……………」

「いやあああ違つづつづつ!!」

「家に帰るついでに魔理沙の所に案内してあげるわ」

すたすた、とアリスが二人の前を歩いていく。

「あとその天人、よく見なさいよ。ただの落ち葉よ」

「……………へっ?」

天子が困惑しながらも己の肩を見やる。

茸だと思っていたものは、アリスの言う通り確かに落ち葉だった。

「ッ!」

「総領娘様もやったんですから五分五分です。まさかアリスさんがのってくれるとは思いませんでしたが。」

「なーに言ってるのよ、これくらい貴女が私達にしたことと比べたら小さい事じゃない」

はっ、と天子が我に返る。

「……………」

私達にしたこと。

「さ、ついてきなさい」

アリスが手招きする。

「行きましょう、総領娘様」

「さ、着いたわ」

数分後、アリスの案内で二人は魔理沙の家に来てきた。外観はそれこそ普通で、博麗霊夢や人里にいる人々が住むような家とは作りが違う西洋的な家作りに、二人は珍しげに魔理沙の家を見る。

「さ、入りましょう」

「そうね、お昼をご馳走になるんだから」

意気揚々と二人は家の扉を開ける。

ノックしなさいよ、と言ったアリスであったが、その言葉は彼女達に届かない。

……まあ確かに、ノックして開けるような相手でも無いような気もするけど。

「おつ、天子と衣玖と……。それにアリスじゃないか」

「いや私は案内しただけよ、用がある訳じゃないし失礼するわ」

「やれやれ、とアリスは自分の家へと帰っていく。

三人はさようならの挨拶をして見送る。

「……で」

魔理沙が、笑顔の天子と衣玖を交互に見ながら訊く。

「あなたたちは何しに来たんだ？」

「お昼ご飯を馳走してもらったために！」

「帰れ」

「……けち」

「分かった分かった、私もこれからお昼なんだ」

「おつ、と天子の目が輝く。

魔理沙は胸を張りながら、二人に向かって揚々と喋る。

「季節は秋！食欲の秋とも言っしな、妖怪の山の山菜や茸も美味しい頃合いだ！……と、いうことで」

「と、いうことで……？」

「アリスの家に行ってお昼を集りにいこうじゃないか！」

「……」

「……」

「なんだよ、喜べよ。魔法の研究してたから、うちにはろくな食べ物がないのさ。」

だから私はあんたらにご馳走が出来ない。けどアリスはご馳走してくれる……筈！ さあ行こうぜ、道案内は任せな」

魔理沙の演説に二人は訝しげに顔を見合わせ、仕方ないかと自分に納得させた。

「お腹減った……」

「総領娘様、もう少しの辛抱です」

そんな天子を見て、いたたまれなくなっただのか魔理沙は懐から茸を差し出した。

「茸食べるか？」

「いやあああああああ」

「わっ、悪かった悪かったからっ、暴れるな！」

悪いことは何もしていないのに、と衣玖は魔理沙に同情してしまう。ため息をついて、二人のやりとりを見る。

まあでもこの二人は仲が良いなあなんて、思ったりして。

結局、天子の極端な考えはこの世界にとってはとても、とても異端なもので、

彼女には、その事に早く気付いて欲しい。

「あ、この茸美味しい」

「焼いて香りを楽しんでから食べるんだよ！ あーあ……。」

彼女自身も、

どこかで気付いてはいるのだろう。

けれど、彼女の経験こそがそれを認めさせようと思わない。

「さ、行きますよ。もう昼過ぎなんですから」

「……で、貴女達は何しに来たの？」

魔理沙の案内でやってきた天子一行はアリス邸を見てまたもやその邸の作りにおー！と感嘆を漏らした。

そんな二人を見て、得意気にする魔理沙であったが、それもたまたま外にいたアリスの一声で掻き消されるのであった。

「お昼ご飯を集りに！」

腹を空かせた天子の声が響いた。

「……もう、仕方がないわね。入りなさい」

半ば呆れて、手招きして三人を案内する。

「ああ、それと衣玖は器用そうだし手伝って」

「分かりました」

「あとのその二人、じっとしてなさい。トラブルメーカーなんだから」

アリスの一声に魔理沙と天子はえーっ、と口を尖らせながらも大人しくリビングのソファに腰かける。

とにかくアリスの邸は凄かった。

家具はシックなもので揃え、整理整頓された本棚やアリスの手作りであるう人形は、まるで兵隊のように規則的に並べられていた。

ふと、気付くと僅かに紅茶の香りが鼻孔をかすめた。心身が落ち着くような、そんな香りだった。

……少なくとも、天界にある桃よりは至極一般的なのだけれど、その香りは天子にとっては新鮮だったし、何よりも一種の憧れを抱くものだった。

「魔理沙」

「ん、なんだ」

「いや、何でもない」

ふと、思うことがあって、

けど言い出せなくて、

折角、紡いだ言葉が露と消えてしまった。

魔理沙は、私の事をどう思ってるのか。

嫌い、なのではないか。

それは魔理沙だけではなく、あの異変に関わったアリスも含まれるのだが、今この場にはアリスはいない。

したがって魔理沙にしか聞けない訳なのだけれども。

そんな魔理沙は相変わらずアリスの本棚から勝手に抜き取った本を暢気に読んでいた。

そんな考えも、

この平和そうな魔法使いを見る限り、杞憂なのかもしれない。なんて事も思ってしまう。

いや、思ってしまう。ではない。

そう、思いたいのだ。

天界に住む天人達は私に対して腫れ物を触るかのように接してきた。丁寧な言葉遣いで話しかける天人もまた、時が進むにつれ天子の陰口をこそこそと言うようになった。

「……………」

それから、天子は表面上接してくる天人達から離れ、独りになった。だからこそ、それが分かるからこそ、下界の人達に迷惑をかけた私に、仲良くなってくれる人なんていないと思っていた。

全てが表面上仲良く見せてるだけで、もしかしたら天人達と同じなのかもしれない。

そう……、思ってしまう。

「魔理沙」

「ん」

「魔理沙は嫌いな人っている？」

嫌いな質問かもしれない。

けど、そんな質問に魔理沙はいつもの陽気な口調で答える。

「んにゃ、いる訳ないさ。だってほら、お前だって弾幕勝負するだろ？あの弾幕の隙間の意味を、考えた事があるかい」

この白黒の魔法使いは妙なことを言い始めた。

ここでまさか弾幕の話になるなんて。

「弹幕の……隙間？」

「ああそうだ、弹幕と弹幕の間の、小さな安全地帯」

「なんのことよ、今の質問と関係」

「ある。……まあ、考えてみるんだな」

……考えてもみなかった。

弹幕と弹幕の間の意味を。

けど、それはただの遊びなんじゃないか。意味なんて無いと思うけど……。

「分からないわ」

「早いよ」

「仕方ないじゃない、分からないんだもん」

まあ確かに、と魔理沙は笑う。

「私しか分からないことだしな、質問した私が悪かった」

「えー！？ それかあ答えられないじゃない。弹幕と弹幕の間の意味って何よ」

「いや教えない。多分、誰もが後々気付くだろうから」

「うー……」

なによそれ。

余計に気になるじゃない。

「二人とも、お昼が出来たわよ」

丁度よくアリスの声が聞こえ、魔理沙に聞く機会は無くなってしま

った。

アリスが持っているトレイにあるものを見て、魔理沙が洩らす。

「おに……ぎり？」

「贅沢言わないの、私はもう昼食を済ませてたんだから」

トン、と天子と魔理沙の前におにぎりが乗っているトレイを置いて、アリスは悩ましげに喋る。

「昼食はおにぎりだけで良かった、って思うから。絶対」

「今日は何かあったけ？」

「さあね、鴉天狗にでも聞いてみなさい」

そんなやり取りを聞きながら、天子はおもむろに目の前に差し出されたおにぎりを一つ手に取る。

「あ、それは私がつったんです」

後ろで衣玖の声が出た。

おにぎりをまじまじ見ると、確かに衣玖がつったように見える。

なんととっても形が綺麗なのだ、アリスがつったであろうおにぎりも十分上手いのだが、このおにぎりは衣玖らしい几帳面さが出ている。

それを、一口頬張る。

「お味はどうですか？」

「……美味しい」

天子の顔に笑顔が灯る。

「それじゃ私は鴉天狗に用事があるからまたな」

一つおにぎりを食べて、暫くして魔理沙はアリス邸から飛んでいった。

なんともまあ、自由というか。我が道を行くような人だと思いつながら、天子は二つ目のおにぎりに手をつける。

「食べれるって……幸せっ！」

「総領嬢様……！ついに食べ物有り難みがお分かりに……っ！」

「そついうのいらぬから」

そんな二人のやりとりにつっこみを入れながら、アリスは苦笑しながら紅茶を口につける。

その傍らでは上海人形が天子と衣玖の二人分の紅茶をティーカップに注いでいた。

「そついえばそれって」

ふと気付いたように天子は上海人形を指差しながらアリスに問いかける。

「自律してるのかしら？」

その問いは、“人形師”のアリスにとっては誉め言葉だった。だからこそ彼女は笑って答える。

「違つわ、私が操ってるのよ。あなたにはひとりで動いているように見えたかしら？」

「ええ、自律した人形だと思ったわ。私も一つ欲しいなあなんて」

上海人形が紅茶を注ぎ終わると、天子に向かって一礼してとことごと台所の方に向かっていった。

「操ってるっても魔法の糸だし、この家の中くらいなら自由自在に動かせるわ」

「家事とか楽勝じゃない」

「操る術者が家事が出来なかつたら人形達を操っても出来はしないわ」

台所から砂糖を持ってきた上海人形が、アリスの紅茶にこさじ一杯の砂糖を入れる。

「器用なのはいいけど、それくらい自分でやりなさいよ」

「パフォーマンスよ、パフォーマンス。一人の時くらいは自分でやるわ」

天子と衣玖が上海人形をまじまじと見つめる。

「これ、アリスの手作りなのよね？一つ私のために作ってくれないかしら」

「人形を大切にするなら、……まあ、考えておくわ」

談笑しながら、ふと思立ったようにアリスは天子に、

「霊夢の所にはいったの？」

と、天子の心を見透かしたように問い掛ける。

天子は少し影を落としたような声色で、行つてないわと応える。

「魔理沙との会話を聴いてたけど何かあったの？嫌なら話さなくてもいいけど」

「話してたけど、けど……」

……天子は漸く気付いた。

この幻想郷の住人達は”少しおかしい”

けどその事実を認めたくなかった。

いや違う、その事実を信じられなかったのだ。

「ううん、大丈夫」

「総領嬢様」

衣玖がそわそわしていた。

この様子を見る限り、アリスと衣玖は事情を察したのかもしれない。

そして、それを心配してこの二人は。

「大丈夫だから」

もう、大丈夫。

だって気付いたのだから。

「……一緒に行かなくてよかったの？」

天子は二人を残して博麗神社に行くと言い出した。衣玖もついていこうとしたが、天子に制止され一人でいったのだ。た。

「彼女がそう言うのなら私の出る幕ではありません」

そう、と呟き紅茶に口をつける。

傍らでは上海人形がちょこんと座っていた。

「これは私の問題じゃありませんし、ね。アドバイスは出来ても彼女自身が実行出来なければ意味がありません」

くすりと笑い、衣玖は帽子を被って立ち上がる。

「あら、もう少し長居してもいいのに」

「ほら今日は”あれ”があるでしょう？ 私もお手伝いで行くことになってるんです」

「あー……、なるほど」

アリスは気付いた。

わざわざ今日という日を選んで天子と行動していた事を。

そしてそれは偶然と偶然が重ならないと起こるはずのない出来事。

「衣玖……、貴女もしかして」

部屋の中の空気がキーンと冷えたような気がした。いや或いは止まったという表現が正しいか。

帽子を深く被った衣玖の素顔がアリスには見えず、一瞬の沈黙がこの部屋を支配した。

「もしかして？」

人形は動かない。

衣玖もまた、動かない。

「いえ、……なんでもないわ
「そうですか」

衣玖がそう言うときにこやかに笑みを作ってアリスに背を向けて帰ろうとする。

彼女の背中はいつにもまして大きく見えたような気がした。

「それでは今夜またお会いできたら」

「いや私は遠慮しておくわ」

「それは残念」

そして帰る間際に衣玖が呟く。

「今回も」いらっしやらないのですね 「

天子が博麗神社に着いたときには既に日が沈みかけていた。夕暮れ時の博麗神社は夕日に染まり、黄金色に輝いていた。それがとても綺麗で、紅葉した山々を背後に聳え立つ神社は荘厳とした雰囲気を出していた。

天子は神社の裏、縁側に回り込み霊夢が居るであろう居間に向かっていく。

秋の虫達が鳴いていた。

静かでそれでいて壮大なオーケストラに耳を傾けながらこの神社の主を呼ぶ。

不思議と緊張はしなかった。

……当たり前だ。緊張する理由などもう無いのだから。それは、杞憂だったのだから。

「霊夢」

この神社の主の名を呼んだ。すると、返事は意外と早く返ってきた。

「あら、桃の人」

ガラガラッと障子を開けた霊夢が天子を一瞥するなり、居間に手招きする。

「あんた寒いでしょ、コタツあるわよ」

「え、あ……、うん」

あの巫女の事だから外で話をする事になりそうだと思っていた天子だった。

けど、まあ、なんとというか。

「お茶でも入れる？」

「……うん」

なんか、妙に優しい。

「紫から貰ったポット……？って言うんだっけ。まあいいわ、それが温かいお湯を沸かせてくれるの。」

「いやあ嬉しくてね、この冬は久々に越えられそうだわ」

ああ……、いつも通りの霊夢だった。

さしずめ、そのポットとか言うやつを自慢したかっただけなのだろう。

なんて、気ままな巫女なのか。

少しだけ羨ましく思えた。

「……で」

霊夢がお茶を天子の前に差し出していつもの声色で訊く。

「なんの用かしら？」

厄介事は勘弁という表情で、天子に訪ねる。

「えっと……」

こういう対応は予想外だった。

いや結局の所、何も考えずにやってきたのだが、ここからなんて言うおうか。

自分の中で反芻していた言葉が、消えて無くなった。

「ねえ」

不意に声がした。

霊夢の声だ。

あまりに煩わしくて、うんざりとした声で。

「私は嫌いな奴にお茶なんてやらないわよ」

と、一言。

天子の心中を見たかのように、彼女は

博麗霊夢は告げる。

「……はっ」

甘い言葉よりも、

どんな言い訳よりも、

彼女の言葉は素直で。

馬鹿みたいに正直だった。

「早く言いなさいよ……！そういうことはっ！私がどれだけ」

どれだけ、

どれだけ悩んだだろうか。

「あら、言っただけでなかったか？私が異変を解決した後に」

霊夢がにやにやしながら名台詞かのように少しだけ語気を強めて喋る。

「幻想郷は貴女を迎えるわ、って」

確かに、名台詞だった。

少なくとも天子にとっては。

顔が熱い、視界がぼやけてくる。

恥ずかしいから？いや違う、

……嬉しいのだ。

「確かに規模が大きい異変だったわ、幻想郷の異変ナンバーファイブには軽く入るかもね。

でもね異変を起こしたやつらは皆、揃いも揃ってこう言うのよ」

お茶をずずーっとまた一口。

どうでもいいのだけど彼女は猫舌なのだろうか。

「もっと早く異変を起こしておけば良かった、ってね。私にしたら冗談じゃないけど、けどあいつらの言い分も分かる気がするのよ。

幻想となった皆は寂しいのよ、孤独で、何も分からずに自分の殻に閉じ籠もってさ」

確かにそうかもしれない。

天界から見下ろす地上の出来事を羨ましく思い、そしてその輪の中に入れなくて、ただ見てるだけだった。

それを寂しかった、と否定出来るだろうか。いや否だ。

「そんなやつをこの幻想郷の皆は理解してるのよ、かつては自分もそうだったから、ってね。

幻想郷は寂しがり屋の集まりなのよ、どうしようもない馬鹿みた

いなやつらがいつもいつも馬鹿みたいに騒いでさ。

……だからね、天子。幻想郷の皆は嫌いな奴なんていないのよ」

霊夢がその長い喋りに、こんなに長く話すつもりは無かったんだけどね、と小さく呟いて、天子を見据える。

天子はただただ、霊夢の話に頷く事しかなかった。

喉が震えて、今喋ってしまったら笑われてしまいそうで、そんな彼女が明るいう太陽みたいな存在で、

ああもう、どうしたらいいの。

「柄にも無いこと言うんじゃないわね、金輪際こんなことは話してやらないんだから」

天子は既に霊夢を見れずにいた。

コタツの上の机の木目をずっと見ていた。見上げるなんて出来なかった、泣きそうなのを堪えてるのがばればれになってしまう。

「で、貴女の問題は解決した？」

「……うん」

ふう、と呟いて霊夢がお茶をぐいっと一気飲みする。

熱くないのか、それ。

「それで、なんだけど」

コタツから出て奥の部屋に行こうとして、ふと立ち止まる。

天子からは霊夢の背中しか見えなかった。

「今日さ、早苗達が宴会やるみたいなんだけど。あんたも来る？」

「えっ………？」

「ああもつやりずらいわね！めそめそしてんじゃないわよ、今から宴会に行くわよ！以上！！」

ぴしゃりと、言い放って霊夢は奥の部屋へと入っていった。天子はそれを半ば放心状態で眺め、そして気付く。

衣玖や魔理沙、アリスは宴会があるということを知っていた。

その上で、萃香や衣玖はわざわざ今日に限って私を地上へ誘導した。最後に私を博麗神社にいかせるために。

私の事を考えてくれた。

その事実には、私は応えただろうか。

皆の優しさに、応えられただろうか。

「ごめんなさい、なんて言うんじゃないわよ。ありがとって言いなさいよ。分かった？」

本当に、見透かしたように。

マフラーという最小限の防寒装備をして、紅白の巫女はにやりと笑った。

「さあ行くわよ、タダでご飯が食べられるんだから」

そんな格好悪い台詞で、

彼女　博麗霊夢は手を差し伸べる。

……暖くて、大きな手だった。

暇を持て余した天人の遊び（後書き）

随分とご無沙汰でしたね。

おはこんにちばんは。レクです。

さて、初の緋想天キャラですね。

時系列的にはAnother Storyの守矢一家が宴会をする話と同系列と考えておいていいでしょう。

ってこれ、気付いた人っていないですよ。

そんなわけで、天子の話です。

タイトルに関しては出オチ感たっぷり。

話の中身は、ほのぼのとした日常です。この短編集では珍しいほのぼの話。

けどまあ、若干「あれ？」って思った人もいますが、深く言及するつもりは無いです。気のせい。

そっぴゃ萃香の瓢箪は水を入れたらお酒が湧くという解釈だったのですが、どうなんでしょうか。やっぱり無限に湧いてくるのかな。

ちなみにこの話、衣玖と魔理沙、萃香達は夕方に行われる宴会の事を知っていました。

天子の心中に気付いた衣玖が裏では色々頑張っていたという設定があったりします……w

二十一時三十五分十秒 前編

大学から帰る途中、道に迷ってしまった。

「さて、どうしたもんかね」

正確な時間と位置を知ることが出来る私であったが、生憎今日は雨である。傘の内側に広げられた小さな天体にはひたひたと雨漏りをしていた。

彼女、宇佐見蓮子はため息をして見たことがない地をさ迷い続ける。

「ぼろぼろの傘だとは思わなかったわ、何が超合成繊維よ」

傘と傘を作った会社に悪態をつきながら歩き続ける。辺りは真っ暗で雨という日でもあり、人が通る気配が無かった。それでいて街路灯の灯りは消えており、尚一層蓮子を不安にさせた。というか、こんなご時世に”こんなレトロ”な街路灯を見ることになるとは思ってもよらなかった。

「ここら一体はまだ開発されていないのかしら。いやもしかしたらメリーが言つてた向こう側の世界？ううん、それはあり得なさそうね……」

ぶつぶつと吹きながら、蓮子は街路灯とアスファルトの地面の道をひたすら歩き続けていた。

そもそも大学で残って本を読んでいたのがダメだったのだ。

電車も夜遅くは走っておらず、蓮子は不本意にも歩いて帰宅しないといけなくなつた。

一駅くらいの距離なのに徒歩では長く感じてしまうのは、最近運動していないせいなのか、身体の疲れが溜まっていく。それどころかその疲れに並行して精神にも疲れが溜まっていく。

ぴちゃりぴちゃり、と水が跳ねて虚空へと消える。

現在の技術では天気を変えることも可能と聞いた。

人間は月を手に入れ、それどころか自然を手に入れようとしている。

そんな小難しいことを蓮子は考えるようになった。

もしかしたら母について熱心に研究する教授に影響されたのかもしれない。いやそうであっては欲しく無いのだが。

この小難しいことと関連するのが、蓮子が秘封倶楽部と名を打ったオカルトサークルなのだ。

メンバーは蓮子と蓮子の親友であるマエリベリー・ハーンの計二名で成り立っている。

が、しかし。マエリベリー・ハーン、通称メリーが今日大学を休んだ所為か、こうして蓮子は一人で帰り……、いや迷う羽目になってしまった。

何れにせよ、一駅分の距離ならなんとか着くだろうと考えた楽観主義の蓮子は迷ったという焦りよりも、家に遅く着いてしまうことに苛立ちを感じていた。

秘封倶楽部は二人で秘封倶楽部なのだ。

メリーの為にも帰りにコンビニで適当にお菓子を買って渡そうか、いやこんな夜中だ。普通に眠りについてるのかもしれない。

或いは、“夢の世界”に行っているか。

「あれ、こんなところに」

そんな事を考えながら歩いていると見るからに異質なものが見えた。

アスファルトで塗装された道の脇に小さな石の階段が続いていたのだった。

本当に小さな入り口は周りの建物の陰に隠れていて、普通に歩いていては気付かないような階段だった。

「これは怪しい」

秘封倶楽部は普通のオカルトサークルではない。

不思議、魔法、と言った超常現象が噂される場所には足を運び調査してみるといふ、言うなれば実践派のサークルなのだ。

……勿論、自費で。

「少しだけ行ってみようかな」

そして蓮子は石階段にそつと足を踏み入れる。

境界とやらが視えるメリーがいれば、こんな怪しい場所ももつと注意深く視れるのだろうけど。夜中ということもあり視界が悪い。悪すぎる。

……おまけに雨が降るのだから厄介だ。

緩やかな、けど長い石階段を登り続ける。

大きな平たい石が道となっており、蓮子は遠くを見ても視界が悪くて何があるのか分からなかった。

雨の所為で靴はびしょびしょ。夜の寒気がそのままダイレクトに蓮子の足を刺す。

帰ったら風呂入る、なんて事を思ったら白い吐息を零れた。いけない、ため息をついたら幸せが消えてしまう。

ぴちゃりぴちゃり、と石の上の水溜まりが跳ねる。

そして幾ばくか歩いた後、ついに蓮子の視界が晴れた。

「……………へえ」

気付けば雨は止んでいた。

それどころか月が顔を覗かせて、綺麗な星空が見えていた。

本当ならば星空が見えるという事が、今のこの世界では滅多にないことなのだが、それよりも蓮子の視線の矛先は目の前にあった。

それは紛れもない神社だった。

いや、神社であった。と云うべきか。

貴重な木材が使われたその建物は所々朽ち果てており、神社へ向かう石畳は割れていて、それはそれは凄惨なものだった。

蓮子は傘を畳んで、もう一度前方を見やる。

時代から取り残された残骸が、目の前にあった。

メリーがいれば良かったのに。

蓮子は一人で調べるのは止めておこう。と考えた。

というのも、こんなミスティアスで怪しいところは、一人で散策すべきではないと私の第六感が警鐘を鳴らしている。

……というか本音を言えばこんな真夜中にこんな怪しげな場所を調べるなんて正直怖い。神隠しとか心霊現象とか起きそうだ。

それにお風呂に入りたい。暖かい布団に入りたい。

先程までの探求心と冒険心よりも早く帰りたいという気持ちが強かった。

それにメリーがいない今、私が調べてもまた二人でここに来ることになる。

と、なれば私が下調べしても意味が無いわけで。

「っても、そのまま帰るのもなんだか釈然としないし……」

石畳の向こうに鎮座する賽銭箱に向かう。

木と木を固定する金具が錆びていて、心なしか傾いているように見えるそれに、蓮子は財布から取り出した小銭を投げ入れる。

「メリーが大学に来ますように。メリーが社会復帰しますように。メリーが……」

たった数十円の金で色んなお願い事するのはどうなのかと思われ
るが、蓮子はそんな事も気にせず願い事を述べる。

「後は……、そくだ。メリーと離ればなれになりませんように。メ
リーが幸せになりますように。」

ぱんぱん、と二拍手して鐘を鳴らす。

そして蓮子は満足したのか、くすりと笑って神社を後にする。

「そつえば」

神社から出る間に、あることに気付く。

「賽銭を入れた時に音がしなかったような……？ ま、いつか」

そして蓮子は軽い足取りで来た道に戻っていった。
とある三月の、雨の日の事だった。

次の日。メリーは大学に来なかった。

大学に入ってから成績が芳しくない私は少しでも点数あげようとしてるのだが、目の前で苺について語っている教授を見ると、点数あげなくても生きていけるしなあなんて思ってしまう。

苺教授にとっては生徒の点数よりも研究の方に熱心なのは周知の事実なのだが、しっかし、本当に苺について毎日120分も語るのだから凄い。変人にしか見えない。

そんな私も、周りから変人とも言われるような事をやってるのだから、目の前で語る教授の印象こそが、私の印象なのかもしれないと思って、ひどく落ち込んだ。

まあ、教授の顔は生き活きしてたし、本人は幸せなんだろうな、って分かるんだけど。

そんな苺教授の人間観察をしながら蓮子は映像の字を頭に入れていく。

世の中、全てがデジタルになってしまった。電車から見える風景も、空も、何もかも。

ひよっとしたら目の前にいる苺教授もホログラムかもしれない。

全てが人工物で溢れた世界。

その中に私がいる。

そんな事を思うと、これじゃあまるでこの世界が他の世界から傍観されてるような、そんな錯覚をする。

メリーが視る境界の向こう側の世界というものは、どうやらこの世界とは全然違うものらしい。

全てが天然モノ。人の手が加わっていない自然のものらしい。

筒を持って帰りたかったなあ、とメリーは悔しがっていた。その向こう側の世界というものは、メリーが言うには夢を見た時に行けるらしい。

だったら、その世界はただの夢なんじゃないかと訊いたが、夢という割には内容が鮮明で頬をつねったら痛かったと言っていた。

半信半疑ではあったが、幽体離脱なんてものがあるのだから否定は出来なかった。

メリーは境界を視ることが出来るらしい。

らしい、というのは私が境界を視ることが出来ないからで、在るかどうかなど確認のしようが無かった。

彼女はその境界を視ることが出来るのだが、その境界は何の為にあるのか、分からないでいた。

彼女しか感知出来ない境界は、私達秘封倶楽部にとって、オカルトっぽいよね、っていう陳腐な理由によって解決しなければならない問題であった。

蓮子はノートに一本の線を引く。

私達が認識出来る境界はどこにもある。例えば今書いたような一本の線によって境界が引かれたことになる。その境界によってノートの1ページが半分ずつとなり、別世界が作られる。

境界はどこにも存在する。

こじつけという意識で、境界は無限に広がっていく。メリーにこのことを言ったらピンと来ないと言われた。

境界を視る、だけではなく扱うことが出来れば、それは使い方次第では恐ろしい力になるのではないかと説いたが、メリーは首を横に振るばかりだった。

そんなこと、無理よ。

逆に蓮子の力が成長したらとんでもないことになるんじゃない？と返された。

そんな夢物語を話し合ったのは……、いつだっただろうか。今では思い出せなかった。

そして蓮子は一本の線を消そうとしたが、力強く書いた所為か線の後がうつすらと残ってしまった。

うつすらと残った消し跡をぼんやりと眺め、そしてまた専教授の間観察を始めた。

次の日も、メリーは大学に来なかった。

流行りの風邪でも引いたのだろうか、ここ数日顔を合わせていない。流石に不安になったので蓮子はメリーが住む寮に赴くことにした。

ついでに、コンビニエンスストアでケーキを購入。今のうちにメリーに借りを作った分を埋めておこうという魂胆だ。

肌寒い日が続くが、曆的には春なのだ。黄金色に染まる夕日を見て、日が長くなったなあ、なんて思った。

片手にはケーキの入ったビニール袋を携えながら、アスファルトの小坂を歩く。

メリーの家に行くために、蓮子の歩調は自然と速くなる。

「あれ、蓮子？」

蓮子が後ろの声に反応して振り返る。

「あ」

そこには買い物袋を提げたメリーがいた。

「久しぶりね」

「久しぶり……、って何でメリーがここにいる訳？」

「家の食料が尽きたから買い物しに」

「……………」

どうやらメリーは風邪を引いていたらしい。

んで、体調が良くなったから今日、近所のスーパーに買い物に行くこととしたのだという。

「お見舞いに来てくれるなら蓮子に買い出ししてもらえば良かったわ」

「心配して損した……………」

しかしメリーは一週間ほど休んでいたのだ。

かなりの熱があつたのだろう、普通じゃ食料なんて尽きないし、彼女は無計画で突っ走るような性格ではないのだから、食事もちゃんと考えて摂っていたのだろう。

今日くらいは彼女のがままを聞いてやってもいいかもしれない。

「んじゃ、はい」

差し出されるは、大きなスーパーの袋。二つ。

「ほら私、病み上がりだし」

前言撤回。

いやこの場合は前思撤回と云うべきか。

まあでも、唯一無二の親友の頼みなら仕方ない。うん、そうだ、仕方ない。

「仕方ないなあ。今日だけよ」

一週間ぶりの彼女に、あー、そういやメリーってこんな感じだったなあなんて思いを抱いて、

蓮子はスーパールの袋を受け取って、思わず、笑ってしまった。

「一週間って長いものね、メリーがいないと秘封倶楽部じゃないね」

「秘封倶楽部、なんだか久しぶりに聞いたわ。その名前」

「一週間は久しぶりの範囲なのね」

アスファルトの道は夕陽の所為で茜色に染まっていた。

まるでレッドカーペッドのようで、その上を歩く私達は気分を弾ませながら、話始める。

「ねえ、蓮子」

ん、とメリーを見やる。

そこには何か悪戯を考えているような、けどそれを隠しているような、そんな形容しがたい。まあつまりは、胡散臭そうな顔をしてメリーは蓮子に訊いた。

「夢と現、蓮子あなたなら、どちらを現実として選択する？」

その問いは、ひどく抽象的で、曖昧で、そんなことを考えてもみなかった蓮子は頭を傾げて考える。

というか現は現実なんじゃないかと思う訳だけでも、そんな解答を彼女が求めていることは百も承知だ。

「そうねえ……」

メリーが言う、夢とは何なのか。

きつと、将来の夢とかそういうたものではない、人が寝るときに見る夢なのだろう。

ただそれが現実の事象だと考えるのはなかなか難しい。

毎回、夢は形を変えるのだから。

時にはただの少女Aだったり、王冠を被ったお姫様だったり、それこそ人間を俯瞰する存在となったり。夢は曖昧で、夢の世界は寿命が短い。

けれど、それが無ければどうだろう？

それが現実になれば、お姫様になれたり……それこそ俯瞰する存在にもなれるかもしれない。

その時、秘封倶楽部の蓮子と違う役を全うする蓮子、どちらが良いのか、とメリーはそう聞いているのかもしれない。

「私は……」

しかし私は大前提として考えていることがある。

「メリーがいる方が現実だわ」

秘封倶楽部は、二人で秘封倶楽部なのだから。

「これが、この世界が、夢だったら貴女はそれでも此処に留まるの？」

そんな彼女の問いに、

「まあデメリットが無いならいいんじゃない」

そう、あっさりと答える蓮子。

きっと彼女は、世界の半分をくれてやるうと言われても、今のよう
にあっさりと答を下すのだろう。

そんな答えが聞けて、嬉しかった。

けど、もし私がいなくなったら蓮子は　。

「そうだ、この袋に入ってるプリンが食べたいな」

メリーは、はっとして隣にいる蓮子を見る。

私は、何を考えているのだろうか。

いつか、離れてしまうような、そんな気がした。

「どうぞ、それ三つセットのだから。一つくらいいいわよ」

「やったー！メリー早く帰ろー！」

「はいはい」

「うつ……」

二度寝をした。

蓮子はまだ覚醒していない頭に鞭を打って辺りを見渡し、窓から見える風景に絶句し、そして時計を見つけて冷や汗をかいた。

空は青空から紅空へと変わり、鳥の囀りは鳥の鳴き声に変わってしまった。

急激な変化に戸惑って、二度寝をした後悔がじわじわと襲ってくる。そういえばメリーに、「長時間の睡眠は体に毒よ」なんて言われていたような気がする。

つてあれ、そっぴやメリーがいない。

名前を呼んでみたが声は返ってこなくて、幾ばくかの虚しさを感じるだけだった。

ふとテーブルを見ると、昨日どんちゃん騒ぎした残骸であるビール缶やプリンのカップ等が片付けられていた。

代わりに一枚、白い紙が置かれていた。きっとメリーが書き置きでもしたのだらうと思い、手にとったら案の定メリーの書き置きだった。

大学に行ってきます。

起きたら掃除してなさい。

二行目が何度も消した後が見えた。

よくよく見ると、買い物に行ってこいとか色んな事が書かれていたようだ。

でも結局、掃除の仕事を任せたといい事は、それだけ買い物とかには向いて無いということかもしれない。

「頼りないのかしら、うーん」

マイナス思考にスイッチが入った蓮子は、ベッドに腰掛けて溜め息をする。

なんだかだるい。非常にだるい。

ぼーっとしといたら、お腹が鳴って、そういや朝と昼にご飯を食べたていないことに気づき、急に晩御飯が恋しくなった。

メリー、ちゃんと私の分の晩御飯も買ってきてくれるかしら、と不安に思い、そしてまた、ぼーっと窓の外の風景を眺める。

「なーんか、言い忘れてる事がある気がするんだけどなあ……」

それもひどく重要な何かを。

覚醒しきっていない頭を総動員して思い出そうとしても、何も思い出せなかった。

メリーの家は1Kで、一人暮らしにはぴったりの家だった。

とあるアパートの一角に位置するここは、陽当たり良好で、眺めも悪くない。

メリー自身、しっかりした所（どこか抜けているような気はするけど）があるため、キッチンやら本棚まで綺麗に整理整頓されている。ただ、秘封倶楽部で遠出するせいか、旅費がとんでもないことになっている。

その為か、メリーの家にはあまり家具は置かれておらず、入居特典のベッドとテーブル、そしてメリーと蓮子の二人でお金を出し合っ

て購入した本棚しか無かった。

ちなみに蓮子は本棚の本を読んだことが無かった。大抵のものは大学の図書館で読めるせいか、不思議とメリーの家にある本は、家具と同等にしか見ていなかった。

そんな本棚を、ぼーっと眺めて、

「三度寝でもしよ」

蓮子はまたベッドに身を委ねる。
……今度はあまり寝付けなかった。

三度目の目覚めは、二度目よりも気分の悪い目覚めだった。

「蓮子、起きなさいよ」

私のパートナー。マエリベリー・ハーンが買い物袋片手に見下ろしていた。

睡眠が浅い割にはしつかり三度寝をしていた蓮子だが、二度寝よりも、より一層の疲労感と倦怠感が襲いかかってきた。

「一日中寝てた……」

「寝過ぎよ、寿命縮むわよ」

「うっ……」

寝惚け眼の蓮子を見て溜め息をつき、どさりと買い物袋を置いて、その中から今晚の弁当を並べていった。

「サンドイッチは飽きたからおにぎりです」

「買い物お疲れ様です」

メリーに敬礼して、適当に目に止まったものを戴く。

「今日何も食べて無かったからお腹が減ったわ」

「あれ、蓮子の為にサンドイッチ作った筈なんだけど」

「そんなの無かったよ」

「じゃあ間違って昼食分のサンドイッチ、蓮子の分も持っていったやつたかも……」

がくり、とうなだれて、蓮子はコンビニエンスストアで買ってきたおにぎりを頬張る。

「美味しい」

「そりゃあ、お腹減ってるんだから」

かくして、疲れたということでもメリーはすぐにベッドに入って寝てしまった。

ここ数日、外にあまり出なかった彼女にとって、久しぶりの大学は慣れてないのかもしれない。

そんな相棒の寝顔を、ぼーっと眺めていた。

落書きしてやろうか、と思ったが、泊めてもらっている身分だし、それにメリーが寝てるのに家に帰るのもなんだか癪だ。……という

かメリーの家の鍵を持っていないというのもあり、蓮子は帰る気が無かった。

そういった事もあってか、今日もメリーの家に泊まるうと思った訳なのだが、如何せん、一日中寝ていた蓮子にとって、寝るということが非常に難しかった。脳が覚醒したせいも、眠いという感覚は一

切感せず、ただひたすら、メリーのいない退屈な時間を余儀なくされた。

「……………」

ベッドの脇に敷いた布団に突っ伏して、何か、暇を潰すことは出来ないか、と考える。

勉強は……、いいや。

ゲームは……、持っていない。

天体観測は……、外は寒い。

「あれ」

ふと、視界に映った本棚に目を留める。

そっぴやここに有る本を讀んだことが無いんだっけ、と思ひ、興味が沸いた蓮子は本棚から適当に一冊選んで讀むことにした。

昔から、蓮子は讀書が好きな方だった。

暇なときは図書館に出向いて本を讀むこともよくあった。

讀めば、讀んだ分だけ、色んな知識を手に入れられるし、何より、讀んだ後に賢くなつたんじゃないかと思ふからだ。

自身の眼が特異な事もあつてか、興味の矛先がオカルトに向けられたのはそう遅くなかつた。

蓮子は『多世界解釈』と書かれた本のページをめくる。

タイトルの文字は明朝体で、それ以外に無駄な裝飾が為されておらず、テキストと白い空白だけが存在していた。ぼつりとあるそれは、より一層、”それらしさ”を出していた。

そしてこれは、メリーの所有物なのである。その事実が、もしかし

たらホンモノの本かもしれない、と期待に胸を踊らせ、蓮子はその本の世界へ入り込む。

多世界解釈、私達が住まうこの世界とは別の世界があるという考え。それがもしメリーの云う、夢であったとしたら。そんな繋がりを感じずにはいられなかった。

次の日の朝、メリーはカーテンの隙間から溢れる陽の光によって起こされた。むくり、と上半身を起こして、大きな欠伸を一つ。

「……………」

永い夢を見た。

けど何の夢だったのか、忘れてしまった。

人の見る夢は、儚いのだと誰かが言っていたが、まさにその通りかもしれない。

手のひらから溢れ落ちるかのように、あっという間に、消えてしま

う。

それが、なんだか可哀想で、そして悲しくて、けれど、そんな思いも数分後には忘れてしまうのだろうと思うと、こんなことを考えても仕方ないことなのだと思うた。

それから、メリーは深呼吸をして、カーテンを思いっきり開ける。この晴れ具合じゃ、じきに蓮子も起きるだろう。

「……………」

蓮子は強烈な日射しによって起こされた。

目が開けなくても分かる。

目蓋を閉じた状態なのに、視界は白。きつと、直射日光の所為だろう。凄く眩しい。

「……………」

右手で目を覆って日光を遮断する。

布団が暖かくて気持ちがいい、まだ起きたくない、誰だカーテンをあけたのは……………」

「起きなさい、蓮子」

「……………」

ああ、ここはメリーの家だった。ど忘れしていた。

メリーの声は平静で、まるで母のような温もりがあった。これなら尚更寝るしかないだろう。

「狸寝入りだっつてのは分かってるわよ」

「……………」

ここで反応してはいけない。
反応すればたちまち布団を剥がされ、私のエデンが失樂園となってしまう。

「また一日中寝てるつもり？」

「……………」

狸寝入りと分かっているのか分からないが、そんな心理作戦は私には効かない。多分。

「狸寝入りしてる時、あなたニヤニヤしてるんだもの」

「えっ」

なんだそれは、と黙って思わず言葉にしてしまった。

その時に僅かに目蓋を開けてしまった。

蓮子を見た。その僅かな時間の中で、メリーが邪悪な笑みを浮かべているのを。

「……………」

「……………」

さっきの間の抜けた声が聴こえてはいない筈だ。

……………多分。

「そっちがその気なら、私だって考えがあるわ」

「……………」

考えて？

そう思った矢先、私のエデンは崩壊した。

ばさり、と熱がこもった布団が一瞬にして蓮子の体が離れ、中空を

舞う。

一瞬にして蓮子の体は布団という鎧が剥がされた所為で、冷気を纏い、そして

「まだまだーっ！」

ぴしゃり、と

窓を開け放った。

まだ冷たい春の風が、蓮子の体を突き刺し、その寒さ故に、目を覚ませざる得なかった。

「おはよう、蓮子」

そしてまた、秘封倶楽部の一日が始まる。

二十一時三十五分十秒 後編(前書き)

何かが少し、ずれている。

いつものように、蓮子とメリーの二人は大学へと足を運び、莓が好きな教授 通称、莓教授の講義を聞いていた。

莓教授は生徒達と年代代で、そしてまたその年で研究者となった天才でもあり、そして彼女は変わり者でもあった。

「魔法って、存在すると思う？」

魔法、というワードに、講堂に集まった生徒達は苦笑した。

他の教授などは、場を和やかにするためによく突拍子の無いことなどを言うが、彼女は至って真面目に問いかけた。

秘封倶楽部の二人は、彼女が何か知っているともみて、講義に聞きに行くことにしたのだが、どうにもこうにも話を聞く機会を掴めずいた。

「魔法、かぁ……」

そう呟く蓮子はペンをくるくると回して、「あっ」と閃いたかのよう、メリーに自分の目を指差して訊いた。

「この目には魔法が掛かってたりして」

「魔法とは何か違うベクトルのものだと思うけど……、確かにそうかもしれないわね」

「けど、不思議な力って事は分かるわ。でもそれは魔法というより

は生まれついた能力、オカルトっぽく言うなら超能力と捉えた方が
良いと思うわ」

「メリーの眼も？」

「少なくとも私はそう考えるかな」

先程の話が終わったのか、母教授は比較物理学についてつらつらと
話始めた。

あちゃー、さっきの話を聞いておけば良かったかなと思った蓮子だ
がメリーに「すぐ終わったわよ」と言われ、納得する。

そもそも、そんな話は相手にされないのだから。

魔法は科学となり、魔力なんてエネルギーは無いのだから。

けど、蓮子とメリーはそんな得体の知れない力が存在していること
を知っている。

それを魔法と結びつけるかどうかは分からないけども、目の前に
いる母教授が求めようとする何かの延長線上に、私達が求めるそ
う、答えみたいなものが存在するのかもしれない。

「何で教授は魔法について生徒に訊いたんですか？」

講義が終わってすぐに、蓮子は母教授の元へと駆け寄って質問した。
メリーが慌ててついてきたが気にしない。

「だって、素敵じゃない」

にこやかに笑みを浮かべて、母教授は答えた。

その単純な回答に、蓮子は目を見開いた。在るか、無いかの話なの
に、それを彼女は確かめようとしているのだ。

魔法なんて無いのだと、通説のように語られて、何世紀も経ってい

るといふのに。そんな幻想を追い求めようとしている。

「ま、私を追い出した学会への復讐もあるのだけどね」

そういえば訊いたことがある。

目の前にいる葎教授は、魔力の存在について発表し、そして馬鹿にされたという。

五世紀も先をいく科学力をもった天才。深紅のボレロとスカートで紅に染まった彼女。

岡崎夢美は、くすりと笑う。

自分を嘲笑った学会へ、

そして、変わり果てたこの世界へ。

それから次の日。

岡崎夢美は生徒達に問い掛けた。

「魔法が使えたら何がしたい？」

生徒達は口々に色々な事を言い合った。それは秘封倶楽部の二人も同じで、

「とりあえず瞬間移動は欠かせないわね」

「んー、私は空を飛んでみたいなあ」

なんて事を話し合った。

瞬間移動が出来れば旅費が掛からないじゃないと言うメリーに対して、蓮子は経過が大事なのよ、経過が、と言っていた。

「まあ、旅自体が楽しいってのもあるんだけどね」
「確かに」

気付くと比較物理学の講義に戻っていた。

蓮子はそんな専教授の姿を芒と見つめ、昨日のやりとりを思い出す。少ないやりとりではあったが、けれど、彼女の意志が垣間見れたような気がする。

なんとしてでも証明する。そんな意思が。

もしかしたら、もうそれは実現しようとしてるのかもしれない。彼女ならやり遂げてしまいそうな、そんな気がした。

「教授に付いていくの？」
「まさか」

私の心の内を察したかのように、メリーは問い掛ける。

「私達は、私達のやり方で行かなきゃ意味がないじゃない」
「蓮子なら言うと思った」

メリーが笑みを浮かべた。
そう言ってくれて嬉しいというニュアンスが込められてる、そんな気がした。

蓮子は恥ずかしげに頭を掻いて、「あっ、そういえば」と呟く。

「メリーに教えようと思ってたんだけど、何だっけ……」

そう、私は何かをメリーに教えようとしていたのだった。

昨日、今日じゃない、数日前に、メリーに何かを教えようとして、そして会う前に忘れてしまったのだらう。

教えなくちゃ、という臆気な記憶が、蓮子自身に、得体の知れない何かを感じて嫌悪感を抱き、更に記憶が薄れていきそうな錯覚に陥る。

「うーん、大したことの無いことだったかも」

「思い出したら言っただけ、気になるから」

ノートに、メリーの家に行く前に何か伝えようとしていた。と書いて、その字を丸で囲む。

「あつ、もしかして」

閃いたと言わんばかりに、蓮子はメリーにびっ！と指を指して、

「プリンのお使いを頼もうとしたのかも！」

「あなたは病人にお使いを頼もうとしていたのかしら」

そして一蹴された。

「そうだ、プリンといえば。蓮子、あなたもしかして最後の一個食べた？」

「……………」

「目を逸らさないでよ」

「……………」

「黙秘権なんてないわよ」

「うっ……。ごめんなさい、プリンが食べてって言うものだから」
「プリンが喋るわけ無いじゃない」

メリーに両手を合わせて慈悲を乞う。ため息をついて額に手をあてる姿が容易に想像出来た。しかしまあ、仕方なかったのだ。あまりにも美味しそうに見えたのだから、それこそ魔法みたいに、食べたという欲求が……。

「欲求を少し抑えて、自分でプリンを買えばよかったじゃない」

「メリーのプリンが美味しそうに見えたの！」

苦笑。

そして二度目のため息。

やれやれ、といった具合にメリーは「今度何か奢りなさいよ」と言っ
つて、講義を聞き始めた。

「おおお！それでこそ私のパートナー！ありが」

「うるさい」

「……はい」

そんな彼女をみて、蓮子もまた講義に集中する。

講堂は教授の大きな声と生徒達の声で、少しだけ騒がしかった。

結局、彼女達二人が集中出来たのは、僅か五分程度だった。

そして比較物理学の講義を終えて、蓮子とメリーが談笑しているな
か、ふと後ろから声をかけられた。

「こんにちは」

おもむろに振り返ったら莓教授がいた。
驚いたのは私だけではないようだ。メリーもまた、目を丸く開いていた。

「貴女達、秘封倶楽部よね？」

莓教授の助手が一人、一昔前の海兵服を着ていて、金髪のツインテールの少女が莓教授の斜め後ろに堂々と立っていた。

「……ええ、そうですが」

その蓮子の答に、莓教授は満足したのか、微かに笑みを浮かべて、

「それじゃ、貴女の名前は？」

「宇佐見蓮子です」

すかさずメリーも。

「マエリベリー・ハーンです」

「良い名前ね」

莓教授がそう言って、赤いマントを翻し、海兵服を着た少女を従えて去っていった。

「なんだったのかしら」

「さあ……」

「メリー来ないなあ」

次の日の講義に、メリーは来なかった。

春という事もあり、急激な温度の上昇に体を壊したのかもしれないともあれ、いつも二人で受けていた講義も、蓮子一人だけだと寂しく感じてしまう。

比較物理学の講義になると、赤いボレロ着込んだ専教授が堂々とやってきた。

気のせいだろうか、岡崎夢美の顔が少しだけ陰しいような感じがした。

「明日から比較物理学の講義は他の教授がやることになったの」

開口一番、専教授は生徒に言い放った。

そして、嬉々とした口調で専教授は続けた。

「まあ一定期間だけなんだけどね、その間、私はこことは違う世界に研究しに行ってくるわ」

その言葉に、どよめきが起こる。

顔立ちも良く、女性として美しい方に分類される彼女が、電波のよくな事を言ったのだ。困惑するのも仕方ない。

そんなどよめきを異に介さずに、いつもどおりの講義が始まった。

蓮子はただ、そんな岡崎夢美を眺めることしか出来なかった。

蓮子はまだ専教授の言った事が理解出来ていなかった。

別の世界とはこの世界とは違う、もう一つの世界、つまりメリーが言っていた夢の世界に繋がるのではないかと。しかしそう簡単に”彼処”に行けはしないだろう。それこそ、夢の世界なのだから。

いや毎教授が指す世界が夢の世界では無くても、彼女がいかにとんでもないことをしようとしているのか分かる。

魔法がある絵本の世界に行ってくる、と同レベルの発言であり、どんなに科学の力を集めても難しいのではないかと。蓮子自身、そうとしか思えないし、この講堂にいる生徒は皆そう思っているだろう。

蓮子はおもむろにノートに「教授が別世界に」と書き込んだ。

彼女なら、天才の彼女なら、もしかしたらやり遂げてしまうのではないかという思いが、離れられなかった。

やり遂げたら、どうするのだろう。

ふとそんな疑問が浮かんだ。魔力という存在を証明したら、彼女は一体何を求め始めようとするのか。

彼女自身も、きっとそんなことを考えてはいないだろう。

私達だってそうだ。

メリーの云う、夢の世界に行けたとしたら、私達は何をする？ その世界が一方通行の道だったら？

……きっと、考えてはいけないことなのかもしれない。けど実際にそうなったとしたら、私は、きっと。

きっと？

程なくして、90分の講義が終わった。
 尊教授が満足気に講堂を見渡して、堂々と去っていった。
 私は、はっとして机に広げていたノートや筆記用具をバッグにしま
 い込んで、急いで尊教授の後を追った。

講堂から出た、長い廊下に尊教授こと、岡崎夢美が赤いマントをは
 ためかせながら歩いていった。
 廊下には誰もおらず、開け放たれた窓から、心地よい風と微かに人
 工の桜の花びらが降り注いでいた。

「教授」

走って追いかけていた私は、息を整えてから話し掛けた。
 岡崎夢美が、さらりと後ろを振り向く。
 そして話し掛けられた対象を確認すると、口元に笑みが浮かんだ。

「ひょっとして」

蓮子と夢美の距離はざっと、五メートル程度。

けどそれ以上相手に近づいたら、こちら側に戻ってこられないだろう。

「これからやろうとしてる事に、興味をもったのかしら？」

岡崎夢美は、蓮子に向かって一歩進んだ。

やろうとしてる事。

蓮子は無意識のうちに唾を飲み込んだ。

心音が聞こえてきて煩い。

凜とした夢美の声は蓮子の意志を揺るがし、そしてまた、試しているようにも聞こえた。

「それは、どういう？」

もしかしたら、初めて彼女と対話をしたのかもしれない。

今の岡崎夢美は本来の教授としてではなく、興味を持った一個人として、蓮子に話しかけているように見えた。

「そのまんまの意味よ、私に付いてくる事。付いてくれば、もしかしたら貴女が求めようとしているものが、手に入るのかもしれないわよ？……そんなものが無くても、天然モノの世界なのだから、持ち帰れば富を得ることが出来るわ」

手を広げて、夢美は蓮子を見つめる。その深い瞳の先は、果たして本当に私を見ているのか、

いや違う、瞳の先には違う世界が広がっているのだろう。自身が求めようとする答が待つ場所へ。

「私は……、私一人で行く訳にはいきません」

そして夢美はそう言われる事に、もしかしたら分かっていたのかも
しれない。

「そう、残念ね」

きつと、その先の事も。

そう言っつて、少し俯いて、

「貴女が求めようとするものは、輪郭がはっきりしてるのかしら」

呟きにもとれるような、小さな声で、夢美は言った。

蓮子は辛うじてそれを聞き取れたが、その言葉の意味をいまいち理
解出来ずに、まるで時が止まったかのように、蓮子と夢美がいる廊
下が静寂に包まれた。

少しすれば生徒達の賑やかな声で騒がしくなるだろう、けどその時
には既に私達はいなくなっているだろう。

静かに、まるで、幻想みたいに。

「私は世界を渡って、魔力という存在の輪郭を形作るの」

徐々に、ゆっくりりと、夢美は顔をあげながら、力強い声で続ける。

「科学の天才と言われるようが、魔法への道は閉ざされていた。それ
は大衆が感じている”有り得ない”という先入観、それを覆すため
に。」

……ねえ、知ってるかしら。言葉の力と揶揄される言霊に対して、想いの力も存在するのよ。

それは科学的、というよりはオカルト的な話だけれども、もしそうだとするなら」

そこで一度、口をつぐむ。

蓮子は彼女の言いたいことが分かったような気がした。

……やめて、とは言えなかった。

「大衆に植え付けられた不可能という精神、それがこの世界で魔法という力が失われた原因の一つ。そして私は、魔力の存在を証明し、魔法は可能なのだと、扱えるのだと、知らしめるのよ」

魔法が使えたら、どんなに素敵だろうか。

魔法が使えたら、どんな事でも出来そうだ。

けど、けれど、蓮子はそんな夢美が哀れに見えて仕方がなかった。これまでにどれだけだけの努力をしてきたのか、嫌でも理解出来る。けどその間にも、科学という人工の神秘は衰退を知らずに伸び続けているのだ。

それこそ、魔法が陳腐のように見える程に。

それを蓮子は言わなかった。違う、言えなかった。

彼女が求めようとする幻想と現実には大きな壁が存在している。それを壊し、共存するなんて事が、果たして出来るのだろうか。

「私が人工魔法と称したのは、せめてものの対抗だった」

人工魔法、少しだけ聞いたことがある。

なんでも銃から光線や、光の弾を出すことが出来るらしい。しかしそれは、魔法ではなく、科学の力として扱われた。

五世紀先を進む彼女は、魔法ではなく科学の力と称された魔法を使っている。

それが逆に、この世界では魔法が存在しないという現実をより一層際立たせた。

蓮子は自然と落ち着いてきた。

心音も煩くないし、今では目の前にいる夢美を真っ直ぐに見ることが出来た。

「オカルトにも手をつけたわ。実験はしてないけど、幽霊という存在が在るとするならば、それを一ヶ所に集める事も出来る筈」

並の人間が、それを可能にするのは努力の賜物でしかないのだろう。普通は出来ない、そんな事が頭を過った。ならば、彼女は普通ではないのだろうか、いやそうじゃない。並大抵の努力では出来ないようなものをやつてのけた、それこそが彼女が天才と言われる所以なのかもしれない。

「それなのに魔法という存在は否定され、そして否定されたままこの世界からひっそりと消えてしまうのよ」

その言葉に、蓮子は少し前に遭遇したとある神社について思い出した。

そう、あの神社のように、人々の記憶から消えていき、そしてこの世界から音もなく、ひっそりと消えていくのだろう。

私達が今こうして居るうちに、少しずつ世間に飲み込まれ、そして失

っていく。

それがとても怖くて、そして寂しくも感じた。

そして夢美は自身の赤い髪を弄って、

「話が逸れちゃったわね、ごめんなさい」

と、申し訳なさそうに言った。

「で、話を戻すわ。貴女の求めるものに輪郭はあるのかしら」

その問いかけに、蓮子は脳裏にパートナーであるメリーの姿が思い浮かんだ。

ああそうだ、と蓮子は一人納得して、そして理解する。

夢美の言葉を借りるならば、メリーこそが、私の求めるものであって、それを手にした私は、それ以外に何も要らないのだった。

だから、私はきつと、夢美の誘いを断った。

「あります。私の側にいてくれますから」

こんな千載一遇の機会に、メリーが休んだから教授と行けなかったじゃない！なんて事は何故か思わなかった。

今のこの選択が、自然であり、大袈裟に言えば運命なのだろう。

「それは」

だから、私は胸を張って堂々と言えるのだ。

私はメリーがいることが満足であり、そして

「今も側にいるのかしら？」

えっ？

「在るように見えて、本当はあやふやなのかもしれない。いつ消えても、おかしくないのよ」

夢美の言葉が体の奥深くに染み込んでいく。

嫌悪感？、いや、それすら感じない。分からない、目の前にいるこの人間が言っていることが。

「それは……、今日は講義を休んだからで」

しかし、思い当たる節があるのも事実だった。

あの夕日が照らしたあの時に、メリーに夢の世界について聞かれた時に、

蓮子は少しだけ、胸騒ぎがしていた。

もしかしたら、メリーが消えてしまっんじゃないかって。

「……………」

それは数秒の事だったと思う。

夢美が探るような目付きで見たかと思うと、はぁ、とため息をついて、そして笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、少し意地悪しちゃったわ」

腑に落ちない。

それでは、メリーは消えてもしまっなんていう物言いじゃないか、そもそも、なんでそんなことを

「さて」

そんな事を考えてる時に、夢美はまるで先程の話が無かったかのよう
うに、明るい声で、

「私は行くわ」

なんて事を、言うのであった。

夢美が、教授が背を向ける。

「あ
」

ここで私は何か言わなければならぬような気がした。

それは、何故だろうか。私でさえ分からない。

ただ、今何か言っておかないと、後悔するよな気がした。

一歩、一歩、

岡崎夢美は、あちら側へと歩いていく。

「あ
」

一步、一步、
蓮子と夢美の距離は段々離れていく。
それと同時に、生徒達の喧騒が徐々に聞こえてきた。
まるで、氷が溶けるかのように、蓮子と夢美の世界が崩れ去るかの
ように。

「教授　！」

蓮子は” 専教授 ” に向かって叫んだ。

自分でもこんなに大きな声が出せるとは思わず、内心驚いた。

「どうしたの」

すっ、と半身だけこちらに向いて、夢美は” 生徒 ” を見やる。
赤い髪がさらりと揺れる。春の風が二人の間を駆け抜けた。

「帰ってくるの、待ってます」

貴女にはまだ、聞いてみたいことがあるのだから。

「ありがと。土産話、期待してて頂戴」

くすり、と笑って専教授は蓮子の元から去っていった。
こつ、こつ、と彼女の靴の音がやけに印象的で。
彼女の後ろ姿が見えなくなるまで、蓮子はその場に立ち尽くしていた。

その日の夜はずっと夜空を眺めていた。

夜でしか意味を為さないこの眼で、空を見上げる。星が見えなくなる変わりに、月へと旅行に行くツアーの灯りが夜空を彩っていた。

いつからだろう。

当たり前だったものが、いつの間にかすり替えられていたのは。

いつからだろう。

いつの間にか忘れて、消え去ってしまったのは。

夜空に手を伸ばして、ため息を一つついた。

微かに見えた星から、時間を導きだす。

午後十時三十三分、それでも街は眠らない。

耳を凝らすと、薄い壁の向こうから、花見をしているのだろうか、

静かなこの部屋にも花見の喧騒が聞こえてきた。

この窓から見える風景も、きつと、変わっていくのだろう。

そしてやがては、ホログラムとなり現実はやがて消え去っていくのかもしれない。

ぎゅっ、と拳を握る。

これからどんな世界へと変わっていくのか、今の私には考えられなかった。

岡崎夢美なら、教授なら、

この世界の行く末を見通せたのだろうか。

「なーに考えてんだか……」

らしくない、
そう思って蓮子は目蓋を下ろした。

夢を見た。

自由に空を飛ぶ夢を。

夢を見た。

メリーの手を握って大空へ飛んだ夢を。

夢の中で頬をつねって、そしたら痛みを感じて。

これは夢じゃない！と興奮したところで目が醒めてしまった。

。

時計のアラームが耳障りで、寝ぼけ眼でゆらりと時計を見やると、既に一時限目の講義が始まっている時間であった。

そして数秒後経って、漸く蓮子は寝坊したのだと気づいた。

それにしても不思議な夢だった。

まるで子供の時に思い描いたような、非現実的な夢が実現したかのようだった。

回想していくも、頭が覚醒してきたせいか徐々に夢の内容が思い出せなくなり、はあ、と溜息をついて大学へ行く支度を始めた。

夢とは物語上に続いていくものでは無いらしい。そんな話を聞いたことがある。

なんでも、夢の中で見るビジョンを一つ一つを追って説明していくと必ず躓くのだそうだ。

人間が順々に説明していくという事自体に、無理があるのだという。それは自分の頭に対しても言えることで、「さっきの夢はなんだったんだろうか」と回想した時点で全てを思い出せないのだそうだ。

そういうこともあってか蓮子は、少しでも覚えておくために、夢の内容を日記に記そうかと思っただがやめておいた。

なんでも夢日記を付けると、現実と夢が区別出来なくなるそうだ。ホラー関係の情報サイトでそんな事を聞いたのだった。

もしやメリーやってるのかしら。と同時に思ったが、メリーがそんな面倒な事をする訳がない。

していたとしても、彼女は云わば夢の世界へと行けるのだ。日記をわざわざ付ける必要もないだろう。

そこで蓮子は少し考える。

夢の世界ならば、私が見ていた夢での光景も。夢の世界では現実となるのではないかと。

もしそうだとしたらなかなかのユーモラスな世界だ。

そんな世界を思い浮かべて苦笑しながらも、髪を整え、バッグに必要なものを入れて、

そして最後にお気に入りの帽子を被って、

「それじゃ行ってきます」

蓮子は家を後にした。

「
」

家を出て早々、蓮子は春が到来したことに感動した。

今までの肌寒さと違って変わって、日射しが暖かく、一面に青い絵の具を塗ったかのように、空は青で埋め尽くされていた。

遅刻した時の通学は、普段の”いつも”とは違って、理由は無いがわくわくするのであった。

それはいつもと違う、日常から非日常へと移るものであり、そんな非日常を期待している蓮子は心なしか意気揚々としていた。

そんな時に見える街の風景もいつもと違って見えて。街全体が春の訪れに喜ぶかのように、燦々と輝いていて、

それはただのガラスの反射でしかないのだが、そんなこともお構いもせずに、蓮子は大学へと足を運んだ。

「遅いわ」

開口一番、メリーにぴしゃりと言われた。

なんでも一時限目は比較物理学の講義だったらしく、いつもの専教授から知らない教授が教壇に立ったのだから驚いたという。

「それで、彼女は？」

こっそりとメリーの隣に座って、

「行ったよ」

行ったよ。

そんな蓮子の言葉に若干の陰りが射した。
事実、岡崎夢美は行った。五世紀先の科学力を持つ天才は蓮子達とは違う世界へと渡った。

「そう」

メリーは静かに、蓮子の答えに呼応するかのように声のトーンを落として言った。

そして二人は何気ない日常へと溶け込んでいく。
教授が言ったことを、投影されたホログラムの文字を、さっさと書き写していく。

「あ、そうだ」

前方でただ本を読み上げていく教授を見ながら、蓮子は思い出したようにメリーに訊いた。

「帰りにカフェ行かない？」

莓教授とのやりとりで、とある雨の日に見付けた神社の事を思い出したのだ。

今日の夜は久々に秘封倶楽部の活動をしよう。

蓮子はぐっと拳をにぎる。

場所はそう、あの神社だ。

ついでに一時限目のノートも借りておこう。そうしよう。

「そういえば、メリーは昨日どうしたの？」

難しい計算式を書き写していく。大学の数学は教師でさえ唸るとい
うが、秘封倶楽部の二人はそれを難なく解いていく。

「勘で解いてみた」という蓮子と、「それくらい理解出来るわ」と
いうメリー。

そんな彼女達だから、大学の講義とは一種の待ち合わせ場所でもあ
った。

「昨日はなんだか頭が痛くてね、気分も悪かったから」

なるほどと頷いて、蓮子はおもむろに、窓から見える春の景色を眺
めた。

春は始まりの季節だ。

暦上、1月が始まりなんじゃないかと思っただが、もしかしたら、冬
は初めの季節なのではないかと、くだらない事を考えた。

そしてそんな野暮な考えを打ち消し、今日は久しぶりに喫茶店で大
きなパフェをメリーと一緒に食べようかと画策するのであった。

「メリーは莓好き？」

「嫌いではないわ」

「私も」

「でも教授は苺の美味しさについてニコマも使って語っていたわ」

「うーん、そう言われるとなあ。試しに苺パフェでも食べてみようかしら」

「んじゃ私は上にプリン乗っかってるのを頼もうかな」

「ってメリーも苺パフェにしなさいよ」

「蓮子が前にプリンを余計に食べたからプリン乗っかってるやつが食べたいの」

そうこう言ってるうちに大学の講義は終わりを告げ、講義室の窓からは茜色に染まった空でいっばいだった。

「日が長くなつたわね」

「二ヶ月後はまだ青いよ、きつと」

蓮子とメリーの二人が大学を出てとある喫茶店に着いたときには、既に日は沈み、新年度だからだろうか、辺りは若者で賑わっていた。

「うーん……」

「メリー、どうしたの?」

「なんだか頭痛いわ……。ちょっと歩きすぎたかも」

「う……」

「蓮子が電車代をけちるから……」

「そ、それは、定期が切れてたの忘れてて」

メリーは頭をさすって、

「これは奢るしかないわね、うん」

ひきつった笑顔で、得意気にそう言った。

「お待ちしました。特大イチゴスペシャルと特大プリンアラモードでございます」

赤髪をしたメイド風のロボットが、機械とは思えぬような滑らかな動きで、蓮子とメリーの前に大きなパフェをそつと置いた。

蓮子の前には苺が沢山乗った大きなパフェで、メリーの前にはクリームによるデコレーションが鮮やかな大きなプリン。

この二つとも蓮子の奢りである。しかも特大。

「思ったより」

「うん」

「大きいわね……」

「まあ蓮子の奢りだし」

「むっ」

財布にいくら入れてきたっけと心の片隅で思いながら、スプーンでパフェを崩していく。

まるで砂のお城のように出来たそれをスプーンで崩していく様は、なんだか楽しくて、

そしてそれと同時に完全なものを壊していく哀しさ　　は大げさだけでも、なんだか勿体無い気もするのであった。

そんなことを思ってしまうのは、やはり蓮子自身がパフェを奢る立場だからだろうか。

しかし、それでも、数秒後にはそんなことを厭わずにパフェを崩していく私がいるのだけれども。

苺とクリームが混ざった箇所をスプーンで掬って、口に入れる。

舌が蕩ける、とは上手い表現だと思う。

実際、口に入れて甘美な甘味が広がったと同時に、舌の上で溶けたかのように消えていったのだから。

メリーがそんな蓮子の様子を見つめる。

きつと苺パフェの美味しさがどんなものか、蓮子のコメントを待っているのだろう。

「ありだね、これ」

「それじゃ一口」

「あっ」

すつ、とメリーのスプーンが苺の城をそつと崩していく。

それでも微動だにしないこの城は、やはり特大のサイズだからだろうか。

「ああ、これはありだわ」

「でしょ」

何がありなのかきつとこの二人でも説明出来ないだろう。

しかし、この二人をありと言わしめる何かがあるのは確かだった。

「なんとなくあの教授が苺にはまるのは理解でき……。いややっぱり出来ないや」

「同感だわ」

あれ、

不意に蓮子はこの光景に既視感を覚えた。

確かに見た覚えがあるが、いつ、どこでのことか思い出せない。

「そうだ、今日遅刻したからノート見せてもらっていいかな。確か、メリーと同じ講義だったよね？」

「うん、いいわよ。えーっと、あったあった。はい、私のノート」

ああそうだ、こんな会話をしたことがある。

特大のパフェを頼んで、そして。そして。

そして……。なんだっけ？

「メリーのノート綺麗だねえ。私とは大違い」

「後で復習するときの事も考えてね、読めない字があったら教えて」

でも、その既視観は果たして現実で起こったものだろうか。

夢という可能性もあるのだ。記憶としての光景を忘れているだけで、感覚としては覚えてるような。

そんな可能性も捨てきれない。寧ろ、濃厚なのかもしれない。

「時間あるし、帰ったらじっくり見てみるよ」

「明日は遅刻しないようにね」

ここ最近、夢という曖昧なものに対してよく考えるようになったせいか、

もしかしたらというifに、夢がくっ付いてきている。

思考の中に、新しい選択肢が増えて客観的に見たらいいのかもしれないが。

蓮子はそんななか、

夢に食われる。

そんなワードを、何故か思い浮かんだ。

その思考すら、メリーとの会話と毎パフェの爽やかな甘味で消し去られていく。
そして、それと同時に、この既視感について考える事が煩わしくなる。

「それです」

その後、蓮子メリーの二人はパフェを食べながら他愛もない話を続けた。

食べきれそうになかった特大のパフェは、思いの外二人の胃袋に収まり、「大したこと無かったわね」との評価が下った。

勿論、蓮子の奢りである。

そして席を立とうかというその時に、蓮子はやっと話せるようなそんな雰囲気醸し出しながら、メリーに告げた。

「今日はさ、久しぶりに秘封倶楽部の活動をしようかなって」

「宛はあるのかしら？」

「ええ、この前私が事前に出向いてみたわ」

「それ本当に大丈夫なのかしら……」

「でもまあ、行ってみる価値はある　いや、ないかもしれないけど、他に行く宛無いし、行ってみない？」

これから、秘封倶楽部の活動が始まる。

「神社に、行くわよ」

少しの違和感を感じながら、宇佐見蓮子は伝票を持って席を立った。

「本当にこっちで合ってるのかしら」

メリーが不安げな表情を浮かべながら蓮子に訊く。

「大丈夫、大丈夫」

蓮子が初めて神社へやってきた時、帰る間際に雨が上がったのは幸運の出来事だった。

晴れていれば、蓮子の目によって、現在の位置を導き出すことが出来るのだった。

そのお陰で蓮子とメリーは目的地へ迷わずに進むことが出来た。

「電車代けちって、しかもこんなに歩くなんて……。これは奢りね。

プリン一個」

そんなメリーの疲れた声に「仕方ないなあ」と返して、蓮子はずっと歩き続けた足を止めた。

二人の前には、神社へ続く長い石階段が続いていた。夜のせいか、暗闇で階段の果てが見えなかった。

「いかにも、って感じだね」

「なんだか怖いわね」

そんなやりとりをして、神社に続く長い石階段へ足を踏み入れた。前に一人でここにやってきた時は、好奇心で長く感じなかったが、二回目のこの地は、一回目よりも何故か不気味な印象を蓮子に与えた。

それはメリーも同じだったらしく、階段道だというのに、ずっと蓮子の服の端を掴んでいるのだった。

時刻は既に午後九時を過ぎていた。夜の闇は次第に濃くなりつつあった。

「あ、見えた見えた」

二人は石階段をやつとのこととで登りきった。

そんな彼女達を待ちわびていたのは、ひどく寂れきった小さな神社だった。

人のいる気配もなく、この時代から取り残されていく可哀想な形骸が。

「そついえばこつて何て言う神社かしら」

メリーのそんな疑問に蓮子は辺りを見渡す。

神社といえど表札はあるだろう。そこに名前が書いてあるはずだ。蓮子の予想通りに、その表札はすぐに見つかった。

この神社に人が誰も来なくなつて、かなりの歳月が経っていたのか、その表札は状態が悪く、文字が掠れて読みづらかった。

「はく…… 。 ああ……博麗神社ね」

博麗神社。それがこの神社の名前。

頭の中で一度だけその名前を繰り返して、そして神社の境内へと足を踏み入れる。

神社の境内は、先ほどみた外観となんら変わりなく、石畳は剥がれ、樹木は枯れ、神社というよりは廃墟という言葉が連想された。

そんななか、二人は「折角来たのだからお賽銭ぐらい入れていこう」ということで、神社の賽銭箱まで歩き進めた。

博麗神社の賽銭箱は神社の外観同様、いつ壊れてもおかしくない程に。寂れていた。

本来は良質な木材で作られていたのかもしれない。だからこそ、この賽銭箱は今でも原型を留めているのかもしれない。

それはメリーも思つたらしく、言葉にこそ出していなかったが、感嘆しているように見えた。

そもそもこういういた賽銭箱等の類は、お金になるため泥棒等によつて賽銭箱自体が盗まれるなんて事が多々あり、

盗まれずにここにあるということは、これほどまでに寂れきつた神社だからこそなのかもしれない。

「とりあえず百円玉でも」

そう言つて、二人はそれぞれ百円玉を投げ入った。ちやりん、と透き通つた音を聞いて、蓮子は手を合わせた。目を閉じて、お願い事を頭の中で何度も唱える。

これは調べて分かつたことなのだが、お願い事をすればその神社にいる狐が叶えてくれるそうだ。

ただ、その事について後日感謝せねば願い事以上の不幸に襲われるらしい。

この神社にも、狐、いや、神様はいるのだろうか。いるとしたらどんな神様なのか。

そしてこの有様を見て、どう思うだろうか。

そんな興味が少しだけ沸いた。

「あれ」

目を開けると隣にいる筈のメリーがいなかった。

目を閉じてる間、なんの気配もしなかった。気配を消してメリーはどこかへいったのだろうか。

あまりに唐突な出来事に、蓮子は混乱した。

「メリー」

まるで隣に話しかけるように、蓮子は呼びかける。

蓮子の頭が、何も考えられなくなり、心臓が高鳴る。

「メリー？」

賽銭箱から離れて、見渡しのいい場所で辺りを見渡す。彼女のちよつとした悪戯だったら、いいのにと。いや、寧ろ、そうであって欲しいと思った。

「メリー？ねえメリーったら！」

力強く、叫ぶ。

その声が反響し合い、蓮子の耳に届いた。

『夢』というワードを思い出して、不安になる。

彼女は夢の世界に消えたのか、或いは飲み込まれたのか。

そんな、一番可能性の低いようなものが、最有力と違ってしまふ。

「ここに連れてきたのは悪かったからさ！メリーどこにいるの……！」

彼女が、蓮子に対して愛想を尽かしたかのように。

そんな哀しい考えすら浮かんできた。

境内を走り回り、彼女を探しても見つからなかった。

そして幾ばくかした後、蓮子はずいに足を止めた。

見つからない。それこそ神隠しのように。

後ろを振り向いて神社を見やる。最初こそ寂しげに感じた神社だが、今となつては何かあるようなそんな気がしてならなかった。

少なくとも蓮子の目には、この博麗神社は何か違うものの様に見えた。

それがなんなのか蓮子には分からないけども。ただ、一つだけ言えるのは。

蓮子とメリーではなく、メリーだけが消えたという事。

蓮子ではなく、蓮子とメリーの二人ではなく。

その事実にも、蓮子は拳を握って夜空を見上げた。

夜の空は蓮子の気持ちなど厭わず、綺麗な満月と数多の星々が輝いていた。

星空を見て、既に22時なのだと知った。もうそんな時間なのか、と思つて、半ば諦めた状態で、博麗神社を後にしようとしたその時だった。

「これは」

境内の入り口、大きな鳥居の下に何の装飾もされていない黒い本が落ちていた。

二人でここを通つたときには気づかなかつたのだろうか。いや違う。あの時は落ちていなかった。

ならこれは一体なんなのだろうか。

蓮子は黒い本を手に取り、頭を大きく振つて、もう一度だけ博麗神社を見た。

メリーが感じた、「怖い」はどういう意味であつたのか。

そんな事を考えて、途端、蓮子は底知れぬ恐怖に満たされた。

何が起こつたのか、それすら分からない事に、蓮子はパニックに陥つた。

秘封倶楽部として色んなところを巡り巡つた蓮子であつたが、こんな事は初めてだった。

そして蓮子は走つた。神社から遠ざかつた。

これは夢なのだと、自身に言い聞かせて。

片手には黒い本。その腕には腕時計。

その時計の針は21時35分10秒で止まっていた。

E
n
d
.
.
.

二十一時三十五分十秒 後編（後書き）

お久しぶりです。

そんな訳で、あのお話を埋める秘封倶楽部のお話でした。蓮子メインですけど。

岡崎夢美のキャラが原作と微妙に違うのは気のせいでしょうか。いやでもカリスマありますよね彼女。

というわけで二次設定というのが色濃く出来た話だったのではないのでしょうか。

さてこのお話で、やっと。といった感じでしょうか。

これから先、短編集という根幹の話が続くのではないかと。

彼女達の物語は、まだ終わりません。けど次に出てくるのは先の話。

10/06/26 記

胡蝶の幻想 前編(前書き)

都?合?の?良?い?夢?が?見?た?く?て?。

こ?の?現?に?戻?つ?て?こ?ら?れ?な?い?よ?づ?に?。

そ?の?時?、?私?を?呼?ぶ?声?が?し?た?。

胡蝶の幻想 前編

暑？い？陽？射？し？の？日？々？が？過？ぎ？去？り？、
肌？寒？い？紅？葉？の？日？々？が？過？ぎ？去？り？、
真？つ？白？な？雪？の？日？々？が？過？ぎ？去？り？、
そ？し？て？、？春？の？季？節？が？や？つ？て？き？た？。

隙？間？を？操？る？妖？怪？、？八？雲？紫？は？そ？ん？な？
季？節？の？変？わ？り？目？を？感？じ？て？感？慨？深？く？
咳？を？つ？い？た？。

春？の？季？節？の？象？徴？た？る？、？桜？の？花？び？ら？
が？優？雅？に？、？け？れ？ど？哀？し？げ？に？舞？つ？て？
い？た？。

そ？れ？は？ま？る？で？、？雪？か？ら？桜？に？変？わ？つ？
た？よ？う？に？。？世？界？が？桜？に？覆？わ？れ？て？る？
よ？う？な？、？そ？ん？な？錯？覚？す？ら？感？じ？た？。

「？…？…？…？…？」

実？の？所？、？八？雲？紫？は？寝？坊？し？た？。

桜？？は？散？る？前？の？満？開？時？が？美？し？く？、？素
？晴？ら？し？い？と？知？つ？て？い？た？筈？な？の？に？。
？そ？れ？に？も？関？わ？ら？？ず？”？寝？坊？”？し？て？
し？ま？つ？た？の？は？、？つ？ま？る？と？こ？ろ？、？「？
寒？か？つ？た？」？と？し？か？言？え？な？か？つ？た？。
寒？か？つ？た？故？に？、？花？見？シ？ー？ズ？ン？か？ら？
少？し？遅？れ？て？し？ま？つ？た？。

し？か？し？ど？う？だ？ろ？？う？か？、？そ？ん？な？寝？坊

？し？た？大？妖？怪？の？前？に？は？、？そ？れ？こ？そ？一
？番？美？し？い？時？を？逃？し？た？の？に？も？閑？？わ？
ら？ず？、？淡？い？薄？紅？色？を？し？た？綺？麗？な？花？
び？ら？が？舞？つ？て？い？る？の？だ？。

散？つ？て？い？な？か？つ？た？ら？、？ど？ん？な？に？綺？
麗？だ？つ？た？か？。

こ？れ？以？上？の？美？し？さ？を？、？見？れ？な？か？つ？
た？事？に？若？干？の？後？悔？を？し？て？、？少？し？の？
間？、？八？雲？紫？は？そ？ん？な？桜？の？木？を？見？つ？
め？て？い？た？。

「？　　？　　？」

紫？は？静？か？に？目？を？閉？じ？た？。

頬？を？撫？で？る？よ？う？な？柔？ら？か？な？風？が？吹
？い？て？い？て？、？気？持？ち？が？良？い？。？そ？し？て
？風？に？運？ば？れ？た？、？春？の？匂？い？が？鼻？孔？を
？掠？め？、？新？鮮？な？空？気？が？体？内？を？蹂？躪？を
し？、？あ？る？種？の？清？々？し？さ？を？感？じ？て？、
紫？は？ゆ？つ？く？り？と？目？を？開？い？た？。

「？春？が？、？来？た？の？ね？」

そ？つ？と？咳？い？て？、

今？度？は？藍？と？こ？こ？で？花？見？を？し？よ？う？か？
な？、？と？考？え？て？、？お？気？に？入？り？の？日？傘？
を？く？る？く？る？と？楽？し？げ？に？回？し？な？が？ら？、
？桜？の？木？の？森？を？歩？い？た？。

少？し？の？間？歩？く？と？、？見？渡？し？の？良？い？開？
け？た？場？所？に？着？い？た？。

真？ん？中？に？大？き？な？桜？の？木？が？堂？々？と？生？
え？て？い？て？、？そ？こ？か？ら？遠？ざ？か？る？よ？う？
に？桜？の？木？が？生？え？て？い？た？。

ま？る？で？こ？の？桜？の？森？の？長？か？と？思？う？よ
？う？な？、？大？き？な？桜？の？木？に？は？桜？の？蕾？し
？か？実？つ？て？お？ら？ず？、？そ？こ？だ？け？が？少？
し？だ？け？時？間？が？ず？れ？て？い？る？よ？う？な？、？
そ？ん？な？気？が？し？た？。

こ？こ？で？花？見？を？し？よ？う？。

紫？は？そ？う？考？え？て？、？く？す？り？と？笑？み？を？
浮？か？べ？て？、？そ？し？て？何？処？か？ら？か？聞？こ？
え？て？き？た？足？音？に？気？付？い？て？、？隙？間？の？
中？へ？と？消？え？て？い？つ？た？。

？
？
？
？
？
？

夜？。

夕？暮？れ？の？橙？が？過？ぎ？去？り？、？空？は？闇？に？
覆？わ？れ？る？。

ま？る？で？そ？れ？は？天？蓋？の？よ？う？に？。？紙？芝？
居？の？よ？う？に？。

決？ま？つ？た？時？間？に？闇？に？染？ま？る？、？そ？の？
様？は？、？如？何？に？も？誰？か？の？意？図？に？よ？つ？

て？操？作？さ？れ？て？る？の？で？は？な？い？か？。
そ？の？誰？か？が？、？人？知？の？超？え？た？存？在？だ？
と？し？た？ら？。？ど？う？だ？ろ？う？か？。

「？藍？に？は？悪？い？け？ど？」

い？や？、？そ？ん？な？存？在？は？あ？り？え？な？い？の？
か？も？知？れ？な？い？。

存？在？、？と？い？う？よ？り？は？そ？れ？は？法？則？み？
た？い？な？も？の？だ？か？ら？。

奇？跡？的？な？数？字？が？重？な？り？合？つ？て？、？こ？
の？地？上？が？あ？る？の？だ？か？ら？。

軌？道？上？の？些？細？な？ズ？レ？は？崩？壊？を？生？む？。

「？夜？桜？も？い？い？わ？ね？」

そ？の？ズ？レ？さ？え？も？無？い？、？そ？の？計？算？さ？
れ？つ？く？し？た？こ？の？地？上？の？シ？ス？テ？ム？は？、
い？や？シ？ス？テ？ム？自？体？が？、？ま？さ？し？く？人？
知？を？超？え？た？存？在？。

私？達？が？知？覚？す？る？こ？と？す？ら？出？来？な？い？、
？そ？う？い？つ？た？別？次？元？の？話？。

「？…？…？…？…？」

私？は？そ？れ？を？、？あ？る？目？的？を？持？つ？て？。
実？現？さ？せ？よ？う？と？し？て？い？る？。

理？想？郷？。？誰？も？が？平？等？に？、？そ？し？て？助？
け？合？え？る？よ？う？な？、？そ？ん？な？楽？園？を？。

そ？ん？な？目？的？を？掲？げ？て？、？自？分？は？本？当？

に？自？分？な？の？か？と？問？う？時？が？あ？る？。
何？で？そ？ん？な？事？を？す？る？の？。？こ？の？能？力？
さ？え？あ？れ？ば？世？界？で？す？ら？自？分？の？手？の？
内？だ？と？い？う？の？に？。
け？ど？、？し？な？か？つ？た？。？出？来？な？か？つ？た？。
妖？怪？、？い？や？大？妖？怪？と？な？つ？た？今？で？も？
そ？ん？な？事？は？出？来？な？か？つ？た？。

「？あ？ら？、？先？客？か？し？ら？？？」

こ？の？世？界？に？は？楽？し？い？こ？と？が？満？ち？て？
い？る？の？だ？か？ら？。

そ？う？、？世？界？に？は？楽？し？い？こ？と？が？満？ち？
て？い？る？。

そ？の？反？面？、？世？界？に？は？哀？し？い？こ？と？も？
満？ち？て？い？る？。

だ？か？ら？、？私？は？楽？し？い？こ？と？が？満？ち？溢？
れ？た？世？界？が？創？り？た？い？。

違？う？、？そ？う？じ？や？な？く？て？。

見？て？み？た？い？。？そ？の？世？界？を？、？そ？の？世？
界？で？暮？ら？す？人？々？を？。

「？…？…？」

大？き？な？桜？の？木？の？下？に？、？一？人？、？着？物？
を？着？た？女？性？が？い？た？。

白？い？着？物？に？、？薄？紅？色？の？帯？。？そ？の？後？
姿？が？、？と？て？も？綺？麗？で？。

風？が？は？ら？り？と？そ？よ？ぐ？度？に？、？女？性？の？
黒？い？髪？が？さ？ら？り？と？揺？れ？る？。

大？き？な？桜？の？木？の？上？に？は？丸？い？お？月？様？
が？一？つ？つ？。？そ？の？姿？を？照？ら？す？か？の？よ？う？
に？、？輝？い？て？い？た？。

八？雲？紫？は？そ？の？姿？に？呆？気？に？と？ら？れ？、？
少？し？の？間？言？葉？が？出？な？か？つ？た？。

「？…？…？」

彼？女？は？、？人？間？だ？ろ？う？か？。

そ？ん？な？疑？問？す？ら？浮？か？ん？だ？。

桜？の？花？び？ら？が？舞？う？。

彼？女？は？、？妖？怪？だ？ろ？う？か？。

そ？ん？な？疑？問？も？浮？か？ん？だ？。

妖？怪？が？跋？扈？す？る？こ？の？夜？の？刻？に？、？彼？
女？は？一？人？で？桜？の？木？を？見？上？げ？て？い？た？。
風？が？は？ら？り？と？吹？く？度？に？、？桜？が？舞？い？
上？が？つ？て？、？そ？し？て？落？ち？て？い？く？。

そ？の？中？心？に？彼？女？は？い？て？、？そ？の？彼？女？
は？桜？の？花？を？咲？か？せ？な？い？木？を？見？上？げ？
て？い？た？。

そ？ん？な？彼？女？が？不？思？議？で？。

そ？し？て？、？気？に？な？つ？た？の？だ？つ？た？。？彼？

女？の？事？が？。

声？が？出？な？か？つ？た？。

違？う？。

そ？う？じ？や？な？い？。

声？を？出？そ？う？と？し？た？。

「？こ？こ？に？い？ら？つ？し？や？つ？た？の？で？す？か？
し？か？し？中？を？舞？つ？た？そ？の？声？に？八？雲？紫？
は？隙？間？の？中？へ？と？消？え？る？。

そ？れ？は？凜？と？し？た？、？力？強？い？、？男？の？声？
だ？つ？た？。

彼？女？の？配？偶？者？だ？ろ？う？か？、？と？紫？は？考？
え？て？、？そ？し？て？隙？間？を？完？全？に？閉？ざ？す？。

闇？。

そ？し？て？、？灯？り？。

ま？る？で？今？ま？で？幻？想？の？光？景？を？見？て？い？
た？か？の？よ？う？に？。

自？分？の？家？に？着？い？た？と？き？に？、？未？だ？に？
あ？の？光？景？が？浮？か？ぶ？の？だ？つ？た？。

桜？を？見？上？げ？る？少？女？の？姿？を？。

そ？れ？が？頭？か？ら？離？れ？な？く？て？、？も？う？一？
度？隙？間？を？開？い？て？あ？の？場？所？に？行？こ？う？
か？と？考？え？て？、？そ？し？て？止？め？た？。

き？つ？と？。

き？つ？と？明？日？も？く？る？。？そ？ん？な？気？が？し？
た？か？ら？だ？。

あ？の？桜？の？木？の？下？で？、？花？を？咲？か？せ？な？
い？木？の？元？で？、

彼？女？は？ま？た？見？上？げ？る？の？だ？ろ？う？。

だ？か？ら？明？日？、？ま？た？あ？の？場？所？に？行？こ？
う？。

八？雲？紫？は？そ？う？考？え？て？、？は？あ？、？と？息？
を？吐？く？。

？
？
？
？
？
？

「？花？見？は？皆？で？す？る？も？の？よ？、？一？人？じ？
や？寂？し？い？じ？や？な？い？」

次？の？日？の？夜？も？、？彼？女？は？そ？こ？に？い？た？
だ？か？ら？私？は？意？を？決？し？て？声？を？掛？け？て？
み？た？の？だ？つ？た？。

妖？怪？ら？し？く？。？隙？間？か？ら？身？体？を？覗？か？
せ？て？。

彼？女？の？上？か？ら？、？気？怠？そ？う？な？声？で？。

「？あ？な？た？は？？？。？妖？怪？さ？ん？？？」

隙？間？か？ら？顔？を？覗？か？せ？る？な？ん？て？い？う？、
？心？臓？が？弱？い？人？が？み？た？ら？卒？倒？し？そ？う？
？な？光？景？を？、

彼？女？は？意？に？介？さ？ず？、？ま？る？で？新？し？い？
友？達？が？出？来？た？か？の？よ？う？な？口？ぶ？り？で？
訊？い？た？。

「？え？え？、？そ？う？よ？。？と？っ？て？も？怖？い？妖？
怪？さ？ん？よ？」

に？こ？や？か？に？笑？み？を？作？つ？て？、？八？雲？紫？
は？扇？を？広？げ？て？口？元？を？隠？す？。

目？を？細？め？、？彼？女？に？对？し？て？睨？み？を？利？
か？せ？て？も？怖？が？ら？な？い？の？で？「？な？ん？だ？
怖？く？な？い？の？ね？」？と？溜？息？を？つ？い？た？。

そ？ん？な？紫？は？彼？女？を？注？意？深？く？見？て？い？
た？。

昨？日？と？違？う？着？物？を？着？て？い？た？が？、？そ？
れ？以？前？に？彼？女？の？肌？の？白？さ？に？驚？い？た？。
病的？な？ま？で？に？白？い？そ？れ？は？、？昼？間？か？
ら？外？を？出？ず？に？ず？つ？と？家？の？中？に？い？る？
と？い？う？事？だ？ろ？う？。

「？妖？怪？さ？ん？、？こ？こ？は？危？な？い？わ？」

「？そ？う？。？注？意？し？て？お？こ？う？か？し？ら？」

そ？し？て？何？よ？り？も？、？妖？怪？に？对？し？て？驚？
か？な？い？と？い？う？事？だ？。

普？段？か？ら？妖？怪？を？見？慣？れ？て？い？る？の？だ？
ろ？う？か？、？そ？れ？と？も？彼？女？が？妖？怪？だ？か？
ら？だ？ろ？う？か？。

い？や？後？者？は？違？う？だ？ろ？う？。？彼？女？は？人？
間？な？の？だ？ろ？う？。？わ？ざ？わ？ざ？妖？怪？が？妖？
怪？に？对？し？て？妖？怪？さ？ん？な？ど？と？呼？ば？な？
い？。

「？そ？う？だ？」

桜？の？木？か？ら？視？点？を？少？し？変？え？て？、？彼？

女？は？八？雲？紫？を？見？上？げ？る？。

「？あ？な？た？の？お？名？前？を？聞？か？せ？て？く？れ？
な？い？か？し？ら？？？」

「？八？雲？紫？」

く？す？つ？と？笑？つ？て？、？そ？の？問？い？に？答？え？
る？。

「？や？く？も？ゆ？か？り？」

彼？女？も？そ？の？名？を？囁？み？締？め？る？よ？う？に？
呟？い？て？、

「？私？は？、？西？行？寺？幽？々？子？。？よ？ろ？し？く？
ね？。？紫？」

西？行？寺？幽？々？子？。

そ？の？名？前？に？八？雲？紫？は？は？つ？と？す？る？。

彼？女？は？あ？の？法？師？の？娘？で？は？な？か？ろ？う？
か？。

だ？と？す？る？と？何？故？こ？こ？に？い？る？の？か？、？
分？か？ら？な？か？つ？た？。

い？や？寧？ろ？、？こ？ん？な？桜？の？森？に？い？る？の？
は？俗？世？と？の？縁？を？切？る？た？め？だ？ろ？う？か？。
思？考？す？る？。

し？か？し？何？も？答？え？は？出？な？か？つ？た？。

「？幽？々？子？。？ま？た？明？日？も？こ？こ？に？い？る？
か？し？ら？？？」

「ええ、きつと？」

自？然？と？幽？々？子？と？は？名？前？で？話？し？て？い？
た？。

そ？れ？は？何？と？な？く？、？彼？女？と？気？が？合？い？
そ？う？な？気？が？し？て？、

貴？女？と？一？度？会？つ？た？こ？と？あ？つ？た？か？し？
ら？？？と？尋？ね？て？し？ま？い？そ？う？だ？つ？た？。

そ？し？て？幾？ば？く？か？時？が？過？ぎ？て？、

「そ？れ？じ？や？」

「ま？た？明？日？」

二？人？は？お？互？い？の？家？へ？と？帰？つ？て？い？く？。

「紫？の？そ？れ？、？便？利？ね？」

「皆？そ？う？言？う？の？だ？け？ど？扱？い？づ？ら？い？
の？よ？ね？。？ほ？ら？、？り？ボ？ン？を？結？ば？な？き？
や？こ？の？隙？間？が？ど？う？な？る？か？分？か？つ？た？
も？ん？じ？や？な？い？し？」

？ ？ ？ ？ ？ ？

「西？行？寺？幽？々？子？…？…？…？」

あ？れ？か？ら？屋？敷？へ？戻？り？、？式？神？に？検？索？
を？か？け？た？の？だ？つ？た？。

藍？が？そ？れ？よ？り？晚？御？飯？に？し？ま？せ？ん？か？

と？言？つ？て？い？た？が？、？無？視？。

は？あ？、？と？溜？息？を？つ？い？て？藍？は？少？し？の？
間？考？え？る？素？振？り？を？見？せ？て？、

そ？の？問？い？に？対？し？て？都？合？が？良？か？つ？た？
の？か？、？そ？れ？と？も？性？能？が？良？か？つ？た？の？
か？分？か？ら？な？い？が？、？そ？の？答？は？す？ぐ？に？
出？た？の？だ？つ？た？。

「？そ？の？名？前？。？訊？い？た？事？あ？り？ま？す？」

藍？が？思？い？出？し？た？よ？う？に？言？つ？た？。

「？な？ん？で？も？、？死？へ？と？誘？う？少？女？だ？と？
か？」

西？行？寺？幽？々？子？。

死？へ？と？誘？う？少？女？。

忌？み？嫌？わ？れ？た？能？力？の？持？ち？主？。

「？死？へ？と？誘？う？、？ね？え？…？…？。？な？ん？と？
も？な？か？つ？た？け？ど？」

「？紫？様？、？お？会？い？に？な？ら？れ？た？の？で？す？
か？！…？」

「？ま？あ？ね？」

そ？の？能？力？を？持？つ？て？、？彼？女？は？何？を？思？
う？の？だ？ろ？う？か？。

寂？し？く？は？無？い？の？だ？ろ？う？か？。

悲？し？く？は？無？い？の？だ？ろ？う？か？。

彼？女？は？そ？れ？で？も？、？笑？み？を？浮？か？べ？て？

い？た？。

それ？は？、？久？々？の？話？し？相？手？だ？つ？た？か？
ら？…？…？…？

？
？
？
？
？
？

八？雲？紫？の？、？西？行？寺？幽？々？子？に？対？す？る？
関？心？は？、

ま？る？で？妖？怪？と？人？と？が？親？し？く？な？る？よ？
う？な？そ？れ？と？は？少？し？違？つ？た？よ？う？な？、？
気？が？し？た？。

そ？う？考？え？る？八？雲？紫？の？式？、？九？尾？の？妖？
で？あ？る？藍？は？、？紫？の？仕？組？ん？だ？プ？口？グ？
ラ？ム？か？ら？外？れ？た？思？考？を？す？る？。

前？の？幻？想？郷？と？同？じ？よ？う？に？、？紫？は？寝？
坊？し？、？そ？し？て？西？行？寺？幽？々？子？に？出？会？
う？。

そ？れ？か？ら？の？出？来？事？も？う？つ？つ？す？ら？と？だ？
が？覚？え？て？い？る？。

何？も？変？わ？ら？ず？に？、？ま？た？巡？つ？て？い？る？。
？な？ら？ば？そ？れ？で？い？い？じ？や？な？い？か？。

「？そ？れ？で？、？い？い？の？か？…？…？…？」

考？え？る？。

紫？の？考？え？て？い？る？事？を？。

今？ま？で？の？よ？う？に？や？っ？て？は？い？け？な？い？。

ただ？言？わ？れ？る？こ？と？を？こ？な？す？の？で？は？
な？く？、

言？わ？れ？る？こ？と？を？予？想？し？て？や？っ？て？お？
く？、？と？い？う？考？え？方？へ？。

そ？れ？は？あ？る？程？度？の？歴？史？を？手？に？入？れ？
た？藍？に？と？っ？て？、？容？易？い？こ？と？で？あ？り？、
し？か？し？今？ま？で？や？っ？た？こ？と？が？な？い？式？
と？し？て？の？藍？に？と？っ？て？は？難？し？い？こ？と？
こ？の？上？な？い？事？だ？っ？た？。

そ？の？先？見？は？八？雲？紫？と？西？行？寺？幽？々？子？
が？出？会？う？そ？の？時？じ？や？な？く？、

八？雲？紫？が？、？藍？を？隙？間？へ？と？送？っ？た？気？
の？遠？く？な？る？よ？う？な？将？来？の？事？で？、

そ？し？て？そ？れ？は？過？去？の？事？で？あ？り？、？藍？
は？自？分？自？身？を？隙？間？へ？送？っ？た？後？、

っ？ま？り？は？前？の？彼？女？が？言？っ？て？い？た？、

「？私？が？向？か？う？の？は？始？ま？り？で？は？な？く？
て？終？わ？り？よ？、？貴？女？は？来？る？べ？き？じ？や？
な？い？。」

そ？の？言？葉？の？真？意？を？確？か？め？る？べ？く？、？
藍？は？密？か？に？息？を？潜？め？て？、？思？考？す？る？。

？
？
？
？
？
？
？

夜？は？ね？、？妖？怪？の？時？間？な？の？。
西？行？寺？幽？々？子？が？云？う？。

そ？う？ね？、？な？ら？昼？時？に？現？れ？る？私？は？人？
間？だ？つ？た？り？し？て？。
八？雲？紫？が？茶？化？す？。

「？私？は？ね？、？紫？が？人？間？で？も？疑？わ？な？い？
わ？」

桜？の？花？び？ら？が？舞？う？な？か？、？幽？々？子？が？
紫？を？見？上？げ？て？眩？く？。

「？え？つ？…？…？」

そ？の？言？葉？が？意？外？だ？つ？た？か？ら？。

そ？し？て？自？分？の？同？一？性？が？、？何？か？内？側？
か？ら？締？め？付？け？ら？れ？る？よ？う？な？、？そ？ん？
な？感？覚？が？し？た？。

人？間？と？妖？怪？。？そ？の？境？界？は？一？体？何？で？
あ？ろ？う？か？。

境？界？を？操？る？私？は？、？一？人？一？種？族？の？妖？
怪？。

け？れ？ど？、？そ？れ？は？妖？怪？た？る？何？か？が？無？
け？れ？ば？人？間？と？い？う？存？在？に？な？る？の？で？
は？な？い？か？。

「？紫？は？ど？つ？ち？が？良？い？…？」

「？そ？う？ね？…？」

妖？怪？の？資？格？と？は？な？ん？だ？ろ？う？か？。
特？別？な？力？を？持？つ？て？い？る？こ？と？？
な？ら？ば？目？の？前？に？い？る？彼？女？は？人？間？で？
は？無？く？な？る？。
妖？怪？の？資？格？と？は？な？ん？だ？ろ？う？か？。
人？の？姿？を？し？て？い？な？い？こ？と？？
な？ら？ば？私？は？一？体？何？者？な？の？か？。

「？秘？密？」

扇？子？で？口？元？を？隠？し？、？意？味？あ？り？げ？に？
く？す？り？と？紫？は？笑？う？。
紫？陽？花？の？絵？が？描？か？れ？た？扇？子？が？映？し？
出？さ？れ？る？。

「？あ？ら？、？綺？麗？」

そ？れ？が？鮮？や？か？で？、？目？を？見？開？い？て？、？
幽？々？子？が？紫？の？そ？れ？を？指？差？す？。

「？あ？り？が？と？」

果？た？し？て？私？は？一？体？何？者？で？あ？る？う？か？。
そ？の？答？は？出？な？か？つ？た？。

そ？の？次？の？日？に？八？雲？紫？は？幽？々？子？の？屋？
敷？へ？と？赴？く？こ？と？に？し？た？。

理？由？は？特？に？無？い？。？強？い？て？言？う？の？で？

あ？れ？ば？、？そ？れ？は？幽？々？子？に？対？す？る？興？
味？で？あ？る？。

彼？女？が？屋？敷？で？ど？ん？な？生？活？を？し？て？、？
ど？ん？な？事？を？思？つ？て？い？る？の？か？。

そ？れ？が？知？り？た？か？つ？た？か？ら？で？あ？つ？た？。

「？妖？怪？風？情？が？、？こ？の？屋？敷？に？何？の？用？
だ？」

そ？う？、？だ？か？ら？こ？ん？な？と？こ？ろ？で？足？止？
め？を？食？ら？う？な？ん？て？思？つ？て？も？見？な？か？
つ？た？。

そ？も？そ？も？。？と？紫？は？思？う？。

こ？の？屋？敷？の？中？に？隙？間？で？入？つ？て？い？れ？
ば？面？倒？な？事？に？は？無？か？つ？た？の？で？あ？つ？
た？。

わ？ざ？わ？ざ？、？（？と？い？う？の？も？、？幽？々？子？
が？屋？敷？で？一？人？で？生？活？を？し？て？い？る？と？
思？つ？た？だ？け？に？）？正？面？か？ら？入？る？な？ん？
て？こ？と？さ？え？し？な？け？れ？ば？。

と？若？干？の？後？悔？と？目？の？前？に？い？る？。「？面？
倒？な？も？の？」？の？煩？わ？し？さ？に？、？は？あ？、？
と？溜？息？を？つ？い？た？。

そ？れ？は？初？老？の？男？性？で？あ？つ？た？。

袴？を？着？て？、？堂？々？と？屋？敷？の？玄？関？前？で？
？そ？の？双？眼？を？妖？怪？へ？と？睨？み？付？け？て？い？
？た？。

凄？腕？の？武？士？だ？つ？た？の？で？あ？る？う？か？、？

未だ？に？立？ち？振？る？舞？い？が？し？つ？か？り？し？
て？お？り？、

紫？相？手？に？隙？を？見？せ？て？お？ら？ず？、？い？つ？
で？も？腰？に？下？げ？た？刀？を？抜？け？る？状？態？で？
こ？ち？ら？の？様？子？を？伺？つ？て？い？る？。

返？答？次？第？で？は？斬？る？、？と？い？う？こ？と？だ？
る？う？か？。

紫？自？信？と？し？て？は？、？遊？び？に？来？た？わ？け？
で？戦？い？を？す？る？気？分？で？も？な？く？。
ま？た？一？つ？溜？息？を？つ？い？て？。

「？遊？び？に？来？た？の？よ？。？通？し？て？く？れ？な？
い？か？し？ら？」

と？言？つ？て？も？、？通？し？て？く？れ？な？い？の？は？
明？白？で？あ？つ？て？。

暫？く？し？た？後？、？屋？敷？の？前？で？の？喧？騒？に？
気？づ？い？た？幽？々？子？が？や？つ？て？き？て？、？や？
つ？と？の？事？で？屋？敷？の？中？に？入？る？こ？と？が？
出？来？た？の？で？あ？つ？た？。

「？で？も？驚？い？た？わ？。？紫？が？私？の？屋？敷？に？
来？る？な？ん？て？」

幽？々？子？が？興？奮？し？た？様？子？で？紫？に？話？し？
か？け？る？。

彼？女？曰？く？、？屋？敷？に？人？が？訪？れ？る？な？ん？
て？久？し？ぶ？り？だ？と？言？つ？て？い？た？せ？い？か？、

「声？に？歡？喜？の？色？が？こ？も？つ？て？い？た？。
そ？ん？な？幽？々？子？の？後？ろ？に？は？屋？敷？の？前？
で？立？ち？塞？が？つ？た？初？老？の？男？性？。？魂？魄？
？妖？忌？が？一？定？の？間？を？取？り？な？が？ら？音？
も？立？て？ず？に？付？い？て？き？た？。」

「？暇？つ？ぶ？し？よ？、？暇？つ？ぶ？し？」

幽？々？子？に？案？内？さ？れ？た？の？は？屋？敷？の？縁？
側？だ？つ？た？。

し？ん？と？静？ま？り？返？つ？て？い？て？、？風？の？そ？
よ？ぐ？音？だ？け？が？聞？こ？え？た？。

そ？こ？か？ら？見？え？る？風？景？は？、？桜？。

幽？々？子？と？初？め？て？出？会？つ？た？場？所？で？み？
た？桜？と？、？ち？よ？つ？と？だ？け？違？う？よ？う？な？
そ？ん？な？桜？。

「？こ？こ？か？ら？見？え？る？桜？も？綺？麗？で？し？よ？
う？？？」

嬉？々？と？喋？る？彼？女？は？思？わ？ず？顔？を？綻？ば？
せ？、？笑？み？を？浮？か？べ？て？紫？に？問？い？か？け？
た？。

そ？れ？は？紛？れ？も？無？い？普？通？の？少？女？で？あ？
つ？て？、？何？か？特？別？な？能？力？を？も？つ？よ？う？
な？、

そ？う？、？死？へ？と？誘？う？よ？う？な？恐？ろ？し？い？
能？力？を？も？つ？少？女？に？は？見？え？な？か？つ？た？。

「？え？え？。？そ？う？ね？」

だ？か？ら？、？こ？こ？か？ら？見？え？る？桜？を？少？し？
で？も？長？く？見？て？い？よ？う？と？思？つ？た？の？だ？
つ？た？。

「？幽？々？子？殿？」

あ？れ？か？ら？暫？く？し？た？後？、？唐？突？に？紫？は？
帰？る？と？言？つ？て？あ？つ？と？い？う？間？に？帰？つ？
て？し？ま？つ？た？。

そ？れ？こ？そ？が？八？雲？紫？ら？し？く？、？自？由？奔？
放？で？、？羨？ま？し？い？。？と？幽？々？子？は？思？つ？
て？い？た？。

そ？ん？な？な？か？紫？が？座？つ？て？い？た？と？こ？ろ？
を？見？な？が？ら？呆？け？て？い？た？ら？、？後？ろ？か？
ら？妖？忌？が？お？茶？を？差？し？出？し？た？。

「？彼？女？は？一？体？」

「？友？達？よ？」

「？左？様？で？」

出？さ？れ？た？お？茶？を？手？に？と？つ？て？、？そ？つ？
と？口？を？つ？け？る？。

妖？忌？の？出？す？お？茶？は？渋？み？が？あ？つ？て？、？
ま？だ？寒？さ？が？残？る？春？に？は？丁？度？良？か？つ？
た？。

夕？刻？の？空？が？綺？麗？な？茜？色？に？染？ま？り？、？
屋？敷？か？ら？覗？か？せ？る？四？角？い？風？景？は？色？
を？朱？に？染？め？て？い？つ？た？。

「彼？女？は？妖？怪？で？す？。？も？し？か？し？た？ら？
幽？々？子？殿？の？お？命？が？　？」

「化？け？物？の？首？を？取？る？な？ん？て？こ？と？、？
妖？怪？で？も？し？な？い？わ？。？彼？ら？だ？っ？て？命？
が？惜？し？い？も？の？」

「？し？か？し？…？…？」

「そ？れ？で？も？、？私？に？近？付？く？な？ら？。？そ？
こ？に？悪？意？が？あ？っ？た？と？し？て？も？私？は？嬉？
し？い？の？よ？」

そ？う？、？私？は？化？け？物？な？の？だ？。

人？間？で？も？妖？怪？で？も？無？い？。？そ？れ？す？ら？
畏？怖？す？る？存？在？。

死？へ？と？誘？う？女？な？の？だ？か？ら？。

世？間？で？も？疎？ま？れ？、？妖？怪？か？ら？も？怯？え？
ら？れ？、？こ？の？地？で？ひ？っ？そ？り？と？暮？ら？し？
て？き？た？。

あ？る？目？的？を？達？し？て？、？そ？し？て？自？分？は？
こ？の？地？で？消？え？去？ろ？う？と？。

だ？か？ら？八？雲？紫？と？い？う？存？在？は？常？識？外？。
非？常？識？の？存？在？で？あ？っ？た？。

彼？女？が？見？て？い？る？世？界？と？は？、？ど？ん？な？
も？の？な？の？か？。

私？が？見？て？い？る？灰？色？の？世？界？か？ら？、？色？
鮮？や？か？な？世？界？へ？と？連？れ？て？行？っ？て？く？
れ？る？よ？う？な？気？が？し？て？。

け？ど？、？そ？れ？は？叶？う？事？が？無？い？こ？と？も？
分？か？つ？て？い？た？。

私？に？は？や？ら？な？く？て？い？け？な？い？こ？と？が？
あ？る？。

だ？か？ら？。？こ？の？出？会？い？は？き？つ？と？私？の？
猶？予？の？期？間？。

こ？れ？が？私？の？残？さ？れ？た？時？間？。

「？…？…？桜？、？綺？麗？ね？」

「？え？え？？？」

い？つ？ま？で？も？こ？ん？な？時？間？が？続？け？ば？い？
い？の？に？、？と？。

初？め？て？思？う？の？だ？つ？た？。

ゆ？く？へ？な？く？月？に？心？の？す？み？す？み？て
？

果？て？は？い？か？に？か？な？ら？ん？と？す？ら？ん

そ？つ？と？、？そ？れ？を？口？ず？さ？ん？で？、
静？か？に？目？を？閉？じ？る？。

？ ？ど？こ？ま？で？も？月？に？心？が？澄？ん？で？い？
き？、？こ？の？果？て？に？私？の？心？は？ど？う？な？つ？
て？し？ま？う？の？だ？ろ？う？か？。

…？…？今？の？私？に？合？つ？た？短？歌？で？あ？つ？た？。
ど？こ？へ？向？か？お？う？と？し？て？い？る？の？か？。

少？し？冷？え？た？風？が？、？頬？を？掠？め？て？、？心？
臓？を？攪？ら？れ？る？感？覚？に？も？ど？か？し？さ？を？

覚？え？て？。

そ？の？も？ど？か？し？さ？こ？そ？が？、？今？の？心？中？
な？の？だ？ろ？う？と？気？づ？い？た？。

「？寒？く？な？つ？て？き？ま？し？た？な？、？戸？を？締？
め？て？参？り？ま？す？」

？
？
？
？
？
？

「？ま？だ？い？た？の？か？」

「？桜？が？綺？麗？で？ね？」

妖？忌？が？屋？敷？の？戸？を？閉？め？て？い？る？と？、？
と？あ？る？庭？の？一？角？で？八？雲？紫？を？発？見？し？
た？の？だ？つ？た？。

親？指？で？鞘？か？ら？刀？身？を？少？し？だ？け？出？し？
て？、？い？つ？で？も？抜？け？る？状？態？に？し？た？そ？
の？時？の？こ？と？だ？つ？た？。

「？私？に？は？分？か？り？ま？せ？ん？な？、？紫？殿？」

「？あ？ら？、？貴？方？の？方？が？彼？女？よ？り？分？か？
る？の？で？は？な？い？か？し？ら？？？」

縁？側？で？刀？に？手？を？か？け？る？者？と？、

庭？で？傘？を？さ？し？て？桜？を？見？上？げ？る？者？、

妖？忌？は？目？を？細？め？て？眼？前？の？妖？怪？を？凝？

視？し？て？い？た？が？、？彼？女？の？方？は？そ？ん？な？

視？線？を？無？視？し？て？桜？を？見？上？げ？て？い？た？。

ま？る？で？妖？忌？が？彼？女？に？と？つ？て？取？る？に？
足？ら？な？い？人？物？の？よ？う？に？、
彼？女？は？平？然？と？、？そ？し？て？、？思？い？出？し？
た？よ？う？に？、？咳？い？た？。

「？あ？の？桜？の？木？に？は？誰？が？埋？ま？つ？て？い？
る？の？か？し？ら？」

止？ま？つ？た？。

紫？と？妖？忌？。？二？人？以？外？、？何？も？か？も？が？
止？ま？つ？た？。

桜？の？花？び？ら？は？静？寂？を？保？ち？、？瞬？き？す？
ら？も？忘？れ？て？し？ま？う？。

ご？く？り？、？と？喉？が？鳴？つ？た？。

「？勿？論？、？こ？の？桜？の？木？。？じ？や？な？い？わ？
よ？」

彼？女？の？注？釈？は？妖？忌？を？更？に？追？い？詰？め？
る？。

彼？か？ら？除？か？せ？る？紫？の？表？情？は？見？え？な？
か？つ？た？。

見？え？な？い？か？ら？こ？そ？、？図？り？か？ね？て？い？
た？。

「？桜？の？木？の？下？に？、？誰？が？埋？ま？つ？て？い？
る？？？聞？い？た？こ？と？あ？り？ま？せ？ん？な？」

平？然？と？し？た？口？調？で？答？え？る？。

こ？の？妖？怪？は？何？を？考？え？て？い？る？の？か？。

そ？し？て？何？が？目？的？な？の？か？、？分？か？ら？な？
か？つ？た？。

「？そ？う？…？…？。？な？ら？い？い？わ？」

そ？し？て？彼？女？は？風？に？攫？わ？れ？る？か？の？よ？
う？に？消？え？た？。

胡蝶の幻想 後編(前書き)

?心?を?ば?深?き?紅?葉?の?色?に?そ?め?て
別?れ?ゆ?く?や?散?る?に?な?る?ら?む

さ?あ?、?心?を?真?紅?に?染?め?て?

お?別?れ?を?し?ま?し?よ?う?。

そ?れ?が?あ?な?た?と?の?出?会?い?な?の?だ?か?
ら?。

物?語?は?加?速?す?る?。

い？つ？か？ら？だ？ろ？う？か？。

私？が？人？と？会？わ？な？く？な？つ？た？の？は？。

い？つ？か？ら？だ？ろ？う？か？。

私？が？此？処？に？住？ん？だ？の？は？。

い？つ？か？ら？だ？ろ？う？か？。

私？が？人？で？は？無？い？存？在？に？な？つ？た？の？は？。

「？は？じ？め？か？ら？決？ま？つ？て？い？た？事？な？の？か？も？し？れ？な？い？わ？ね？」

決？ま？つ？て？い？た？の？だ？ろ？う？か？。

私？が？死？へ？と？誘？う？能？力？を？も？つ？た？こ？と？

が？。

決？ま？つ？て？い？た？の？だ？ろ？う？か？。

私？が？あ？れ？を？殺？す？為？に？此？処？に？来？た？事？

が？。

決？ま？つ？て？い？た？の？だ？ろ？う？か？。

…？…？あ？の？場？所？で？彼？女？と？出？会？う？事？が？。

「？決？ま？る？、？で？す？か？…？」

春？夏？秋？冬？。

そ？し？て？、？春？夏？秋？冬？。

巡？り？巡？つ？て？、？春？が？来？て？。

い？つ？の？ま？に？か？、？夏？が？や？つ？て？来？て？。

一？陣？の？風？の？よ？う？に？、？秋？が？過？ぎ？て？い？
つ？た？。
ま？る？で？そ？れ？が？理？か？の？よ？う？に？、？冬？が？
訪？れ？る？。

「？え？え？、？何？も？か？も？。？全？て？。？」

は？ら？り？は？ら？り？、？と？桜？が？縁？側？に？落？ち？
て？く？る？夜？の？こ？と？。

そ？れ？は？諦？め？、？だ？。？と？妖？忌？は？幽？々？子？
の？虚？ろ？な？目？を？見？て？思？つ？た？の？だ？つ？た？。
屋？敷？の？庭？に？咲？い？た？桜？の？木？を？彼？女？は？
見？て？い？な？か？つ？た？。

そ？の？向？こ？う？の？、？そ？れ？こ？そ？妖？忌？す？ら？
見？え？な？い？何？か？を？、？ず？つ？と？彼？女？は？眺？
め？て？い？る？。

縁？側？に？座？つ？て？、？桜？の？花？び？ら？が？幽？々？
子？の？懐？を？白？に？染？め？よ？う？と？し？て？も？意？
に？介？さ？ず？、

た？だ？た？だ？、？時？が？ゆ？つ？く？り？と？流？れ？て？
い？た？。

「？花？見？れ？ば？そ？の？い？は？れ？と？は？な？け？れ？
ど？も？？心？の？う？ち？ぞ？苦？し？か？り？け？る？」

静？か？に？、？咳？く？よ？う？に？、
そ？つ？と？彼？女？は？紡？い？だ？。

桜？の？花？を？見？る？と？、？訳？も？無？く？胸？の？
奥？が？苦？し？く？な？る？の？で？す？。

「夜？は？冷？え？ま？す？。？そ？ろ？そ？ろ？お？休？み？
に？な？ら？れ？た？方？が？」

「…？…？少？し？だ？け？、？あ？と？少？し？だ？け？。？
こ？う？し？て？い？た？い？の？」

妖？忌？は？そ？つ？と？額？く？と？、？ま？た？静？謐？な？
屋？敷？へ？と？戻？る？。

い？つ？も？笑？つ？て？い？た？頃？の？彼？女？の？面？影？
を？消？し？去？る？よ？う？な？、？そ？ん？な？夜？だ？つ？
た？。

？
？
？
？
？
？

“？そ？れ？”？は？、？そ？れ？こ？そ？ま？る？で？決？ま？
つ？て？い？た？か？の？よ？う？に？幽？々？子？の？身？に？
降？り？か？か？つ？た？の？だ？つ？た？。

人？も？妖？も？、？全？て？平？等？に？死？へ？と？誘？う？
能？力？。

そ？の？能？力？に？気？づ？い？た？時？に？は？既？に？周？
り？か？ら？見？る？目？が？変？わ？つ？て？い？た？。

人？で？も？な？い？、？妖？で？も？な？い？、？そ？れ？こ？
そ？神？で？は？な？く？、？地？獄？の？使？い？と？擲？掬？
さ？れ？、

幽？々？子？の？周？り？の？人？間？は？彼？女？の？身？を？
案？じ？て？、？こ？の？屋？敷？に？や？つ？て？き？た？。

「？死？は？、？怖？い？の？も？の？？」

一？人？。？ま？た？一？人？。
布？団？に？横？た？わ？つ？て？、？顔？に？白？い？布？を？
あ？て？が？つ？た？人？間？が？増？え？て？い？つ？た？。
そ？れ？は？紛？れ？も？無？い？死？人？で？あ？つ？て？、？
当？時？の？幽？々？子？で？も？些？末？な？が？ら？そ？の？
死？の？香？り？を？感？じ？て？い？た？。

「？え？え？、？怖？い？で？す？と？も？。？…？…？け？れ？
ど？死？は？終？わ？り？で？は？な？く？通？過？点？と？考？
え？る？よ？う？に？な？り？ま？し？た？」

私？に？剣？を？教？え？て？。

庭？師？に？そ？れ？を？言？つ？た？の？は？何？時？の？事？
だ？ろ？う？か？。

能？力？ゆ？え？に？殺？す？の？で？は？な？く？。？た？ゆ？
み？な？い？精？神？力？を？以？つ？て？す？れ？ば？そ？の？
死？す？ら？自？分？で？止？め？る？こ？と？が？出？来？る？
の？は？な？い？か？。

そ？う？考？え？て？の？決？断？だ？つ？た？。

し？か？し？そ？れ？は？焼？け？石？に？水？で？あ？つ？た？。
結？果？的？に？言？え？ば？い？く？ら？庭？師？で？あ？る？
妖？忌？か？ら？剣？術？を？指？南？さ？れ？た？と？し？て？
も？幽？々？子？の？体？で？は？碌？に？剣？を？扱？う？こ？
と？は？出？来？な？か？つ？た？か？ら？だ？。

「？通？過？点？…？」

屋？敷？に？や？つ？て？き？て？、
春？が？来？て？。

夏？が？来？て？。

秋？が？来？て？。

冬？が？来？て？。

一？年？と？い？う？も？の？が？ど？れ？だ？け？あ？つ？と？
い？う？間？で？、？そ？れ？で？い？て？儂？い？の？も？の？
な？の？だ？と？知？り？、

屋？敷？に？い？た？人？間？は？と？う？と？う？幽？々？子？
と？庭？師？で？あ？る？妖？忌？だ？け？で？あ？つ？た？。

そ？れ？以？外？は？皆？、？死？ん？で？し？ま？つ？た？。

病？気？も？、？寿？命？で？も？、？な？ん？で？も？な？い？
肅？然？た？る？死？。？有？無？を？言？わ？せ？な？い？能？
力？。

「？え？え？通？過？点？で？す？。？死？ぬ？前？に？良？い？
事？を？す？れ？ば？天？国？に？。？当？然？悪？い？こ？と？
を？し？て？い？れ？ば？地？獄？に？連？れ？て？行？か？れ？
る？の？だ？と？、？聞？い？た？こ？と？が？あ？る？の？で？
す？」

妖？忌？の？言？葉？は？力？が？あ？つ？て？、？重？み？が？
あ？つ？た？。

庭？師？で？あ？る？彼？は？幽？々？子？の？生？ま？れ？た？
こ？ろ？か？ら？見？守？つ？て？い？る？の？だ？か？ら？。

「？私？は？…？…？。？天？国？に？逝？け？る？の？か？し？
ら？」

そ？れ？は？ひ？ど？く？震？え？て？い？た？と？思？う？。

空？を？見？上？げ？て？、？微？か？な？鳴？咽？感？を？必？
死？に？我？慢？し？て？。

声？に？も？な？ら？な？い？声？で？、？妖？忌？で？す？ら？
見？た？こ？と？の？な？い？表？情？で？。
気？丈？に？振？舞？つ？て？い？た？彼？女？の？、？初？め？
て？の？涙？だ？つ？た？。

？　？そ？れ？か？ら？ま？た？春？が？来？て？。　？夏？が？
来？て？。　？秋？が？来？て？。　？冬？が？来？て？。
幽？々？子？は？屋？敷？の？縁？側？で？、？思？う？の？で？
あ？つ？た？。

「？西？行？妖？」

そ？の？名？前？を？呟？い？て？、？虚？ろ？な？そ？の？瞳？
に？力？が？宿？る？。

一？際？大？き？い？桜？の？木？。　？八？雲？紫？と？出？逢？
つ？た？場？所？。

桜？の？花？を？咲？か？せ？な？い？あ？の？木？が？普？通？
の？桜？の？木？で？は？無？い？事？は？分？か？つ？て？い？
た？。

「？ね？え？、？桜？の？花？は？ど？う？し？て？鮮？や？か？
な？薄？紅？色？に？染？ま？る？の？か？し？ら？」

言？葉？を？投？げ？か？け？る？。

そ？う？す？れ？ば？誰？か？が？、？返？し？て？く？れ？る？
よ？う？な？気？が？し？た？か？ら？だ？。

け？れ？ど？そ？の？言？葉？は？宙？を？舞？い？、？風？に？
攫？わ？れ？る？か？の？よ？う？に？消？え？て？い？つ？た？。

「……？……？それ？は？ね……。？人？の？血？を？吸？つ？て？
い？る？か？ら？綺？麗？な？花？を？咲？か？せ？る？の？よ？」

ひ？ど？く？暗？い？声？だ？つ？た？。

そ？れ？が？自？分？か？ら？発？し？た？も？の？だ？と？い？
う？こ？と？に？気？づ？き？、？寒？気？が？し？た？。

西？行？妖？。？そ？れ？こ？そ？幽？々？子？の？目？的？だ？
つ？た？。

何？故？な？ら？ば？西？行？妖？と？呼？ば？れ？る？、？花？
を？咲？か？せ？な？い？桜？の？木？の？下？で？、？西？行？
法？師？は？死？ん？だ？の？だ？か？ら？。

賭？け？で？あ？る？。

死？へ？と？誘？う？少？女？と？、

死？を？招？く？桜？の？木？と？、

ど？ち？ら？が？本？当？の？死？せ？る？も？の？な？の？か？、
？ど？ち？ら？が？果？た？し？て？本？当？の？化？け？物？な
？の？か？。

復？讐？で？あ？つ？て？、？復？讐？で？は？な？い？な？に？
か？。

言？う？な？れ？ば？、？歪？ん？だ？使？命？感？。

「？ど？う？せ？地？獄？へ？行？く？の？な？ら？、？せ？め
て？最？後？ま？で？」

そ？し？て？桜？の？木？を？睨？み？つ？け？る？。

全？て？は？決？ま？つ？て？い？る？の？だ？か？ら？。

？ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

夜？。

そ？れ？は？人？々？が？眠？り？に？就？き？、？妖？怪？共？
が？跋？扈？す？る？時？間？だ？つ？た？。

妖？忌？が？寝？て？い？る？の？を？確？認？し？て？、？幽？
々？子？は？深？い？闇？へ？と？身？を？乗？り？出？し？た？。
目？が？暗？闇？に？慣？れ？て？お？ら？ず？、？辺？り？が？
真？つ？暗？で？あ？つ？た？が？、？そ？れ？で？も？彼？女？
は？軽？い？足？取？り？で？其？処？へ？向？か？つ？た？。

幽？々？子？の？白？い？装？束？は？寝？る？と？き？に？着？
る？も？の？で？あ？つ？た？が？、？誰？も？が？寝？静？ま？
つ？た？暗？い？夜？に？は？綺？麗？な？ほ？ど？白？く？輝？
い？て？い？た？。

天？女？の？よ？う？に？見？え？る？そ？れ？は？、？す？た？
す？た？と？足？を？止？め？る？こ？と？な？く？、？目？的？
地？ま？で？歩？き？続？け？た？。

「？御？機？嫌？よ？う？。？こ？こ？に？貴？女？が？来？る？
と？思？つ？て？い？た？わ？」

其？処？に？着？い？た？時？に？は？既？に？彼？女？は？い？
た？。

赤？い？リ？ボ？ン？で？隙？間？を？結？ん？だ？上？に？座？
つ？て？見？下？ろ？し？て？い？る？八？雲？紫？が？、？い？
た？。

さ？ら？り？と？し？た？艶？や？か？な？金？の？髪？が？摩？
く？た？び？に？、？透？き？通？つ？た？白？い？肌？が？晒？

さ？れ？て？い？る？。

そ？れ？を？意？に？介？さ？ず？、？く？す？り？と？幽？々？
子？に？对？し？て？笑？み？を？浮？か？べ？て？手？を？振？
る？の？だ？つ？た？。

「？私？も？思？つ？て？い？た？わ？。？紫？」

紫？の？笑？み？に？、？幽？々？子？も？笑？み？を？浮？か？
べ？て？返？す？。

紫？を？見？上？げ？る？と？思？わ？ず？に？は？い？ら？れ？
な？い？、？西？行？妖？が？、？そ？こ？に？は？あ？つ？た？。
桜？の？花？を？咲？か？せ？な？い？大？き？な？木？が？、？
八？雲？紫？の？背？に？雄？々？し？く？生？え？て？い？た？。
西？行？妖？の？、？圧？倒？的？な？存？在？感？に？息？を？
呑？む？。

「？ね？え？、？幽？々？子？」

そ？ん？な？幽？々？子？の？心？情？を？知？つ？て？か？知？
ら？ず？か？、？紫？は？楽？し？げ？に？話？を？進？め？る？。

「？も？し？こ？の？桜？の？木？が？満？開？に？な？つ？た？
ら？。？そ？の？時？は？一？緒？に？花？見？を？し？ま？し？
よ？う？つ？つ？」

も？し？、？こ？の？桜？の？木？が？満？開？に？な？つ？た？
ら？。

そ？れ？は？な？ん？て？綺？麗？な？花？が？見？れ？る？の？
だ？ろ？う？か？。

そ？れ？は？な？ん？て？甘？い？誘？い？な？の？だ？ろ？う？

か？。

勿？論？、？紫？は？知？ら？な？い？の？だ？ろ？う？。
目？の？前？に？あ？る？の？が？、？た？だ？の？桜？の？木？
で？は？な？く？、？血？を？飲？み？す？ぎ？た？妖？怪？だ？
と？い？う？事？を？。

そ？し？て？こ？の？西？行？妖？は？花？を？咲？か？せ？な？
い？こ？と？を？。

「？そ？う？ね？　？　？。」

言？え？な？か？つ？た？。

こ？の？桜？の？木？は？花？を？咲？か？せ？な？い？わ？。
そ？の？一？言？が？、？言？え？な？か？つ？た？。

「？他？の？桜？は？散？つ？て？い？る？の？に？、？こ？の？
大？き？な？桜？の？木？は？、？ま？だ？花？を？咲？か？せ？
な？い？な？ん？て？ね？」

不？思？議？そ？う？に？眩？く？彼？女？を？、？見？る？こ？
と？が？出？来？な？く？て？、

そ？つ？と？視？線？を？西？行？妖？に？向？け？て？、
桜？の？花？を？咲？か？せ？な？い？西？行？妖？が？、？眠？
つ？て？い？る？よ？う？に？見？え？た？の？だ？つ？た？。

西？行？妖？が？眠？つ？て？い？る？。

そ？う？思？つ？た？幽？々？子？で？あ？つ？た？が？、？あ？
な？が？ち？間？違？い？で？は？無？い？の？で？は？な？い？
か？と？考？え？る？。

で？は？、？こ？の？桜？が？開？花？し？た？時？、？一？体？
何？が？起？こ？る？の？だ？ろ？う？か？。

一？抹？の？好？奇？心？と？、？不？安？が？同？時？に？沸？
い？て？出？て？き？た？。

…？…？眠？つ？て？い？る？の？な？ら？ば？、？起？こ？せ？
ば？い？い？の？だ？。

そ？の？对？価？が？何？に？な？ろ？う？と？も？、？私？は？
こ？の？目？で？西？行？妖？の？開？花？を？見？て？み？た？
く？な？つ？た？。

興？味？が？、？好？奇？心？へ？と？変？わ？り？、？紫？の？
言？つ？て？る？事？を？聞？き？流？し？て？し？ま？う？く？
ら？い？に？、？魅？力？的？な？も？の？へ？と？変？わ？つ？
て？い？つ？た？。

「？そ？れ？で？ね？、？藍？が？ね？　？　？」

「？決？め？た？」

紫？の？声？を？遮？つ？て？、？彼？女？は？紫？に？笑？み？
を？見？せ？て？、？そ？し？て

「？私？が？こ？の？西？行？妖？の？花？を？咲？か？せ？て？
あ？げ？る？」

そ？れ？が？何？を？意？味？す？る？の？か？、？幽？々？子？
に？も？、？ま？し？て？や？紫？に？も？分？か？つ？て？い？
な？か？つ？た？。

紫？は？そ？ん？な？幽？々？子？の？声？色？か？ら？不？穩？
な？気？配？を？感？じ？た？と？い？う？事？だ？け？。

そ？し？て？、？幽？々？子？が？桜？の？魅？力？に？取？り？
憑？か？れ？た？そ？れ？に？、？似？て？い？る？よ？う？な？
そ？ん？な？気？が？し？た？。

？ ？ ？ ？ ？ ？ ？

「？…？…？」

そ？の？頃？、？魂？魄？妖？忌？は？静？か？に？目？を？開？
け？て？音？も？無？く？立？ち？上？が？つ？た？。

動？き？に？は？無？駄？が？無？く？、？庭？師？と？い？う？
よ？り？は？武？士？と？い？う？よ？う？な？風？格？を？持？
つ？彼？は？、？溜？息？を？一？つ？つ？い？て？懐？に？あ？
つ？た？刀？を？拾？い？上？げ？た？。

幽？々？子？を？護？る？彼？は？勿？論？、？幽？々？子？が？
屋？敷？を？出？て？行？つ？た？事？に？気？づ？い？て？い？
た？。

け？ど？妖？忌？が？寝？て？い？る？事？を？確？認？し？て
？か？ら？出？て？行？つ？た？こ？と？が？気？が？か？り？で
？、？そ？ん？な？彼？女？を？邪？魔？を？し？て？は？い？
け？な？い？と？思？い？、？外？出？に？つ？い？て？話？に？
触？れ？な？か？つ？た？の？だ？つ？た？。

い？や？、？触？れ？ら？れ？な？か？つ？た？。

嬉？々？と？し？て？外？へ？、？闇？へ？足？を？踏？み？入？
れ？る？彼？女？を？、？止？め？る？こ？と？が？出？来？な？
か？つ？た？。

待？つ？て？下？さ？い？、？と？言？え？な？か？つ？た？。

ご？一？緒？に？よ？ろ？し？い？で？し？よ？う？か？、？と？
も？言？え？な？か？つ？た？。

「？…？…？」

け？ど？、？ど？う？い？う？風？の？吹？き？回？し？か？分？
か？ら？な？い？け？ど？も？、
妖？忌？は？お？も？む？ろ？に？幽？々？子？の？後？を？追？
う？こ？と？に？し？た？の？だ？つ？た？。

「？西？行？妖？」

一？言？、？そ？う？眩？い？て？暗？闇？の？中？、？足？を？
一？層？早？め？る？。

春？の？季？節？。？桜？の？季？節？に？な？つ？て？も？、？
花？を？咲？か？せ？な？い？桜？の？木？。

あ？ま？り？に？も？血？を？吸？い？す？ぎ？た？桜？の？木？
彼？女？は？そ？れ？を？何？度？も？見？上？げ？、？眺？め？
？そ？し？て？何？を？感？じ？た？の？だ？ろ？う？か？。

「？…？…？」

い？つ？か？は？こ？う？な？る？の？で？は？な？い？か？。

妖？忌？は？彼？女？の？成？長？を？見？守？る？に？つ？れ？
て？、？そ？ん？な？事？を？思？つ？て？い？た？。

い？つ？か？は？こ？う？な？つ？て？し？ま？う？の？で？は？
な？い？か？。

そ？ん？な？思？い？は？や？が？て？、？現？実？と？な？り？
？少？し？の？好？奇？心？が？後？押？し？し？て？、？彼？は
？向？か？お？う？と？し？て？い？る？。

ど？こ？に？。？西？行？妖？に？。

ど？こ？に？。？幽？々？子？殿？の？元？に？。

ん???

お?か?し?い?。

何?か?が?、?お?か?し?い?。

…?…?彼?女?が?西?行?妖?に?近?付?い?た?と?し?
て?、?一?体?何?が?起?こ?る?と?い?う?の?だ?。
い?つ?か?は?こ?う?な?つ?て?し?ま?う?の?で?は?
な?い?か?。

そ?れ?は?ど?う?な?つ?て?し?ま?う?の?か?。

そ?ん?な?こ?と?を?考?え?よ?う?と?し?た?と?き?
?少?女?の?楽?し?げ?な?声?が?聞?こ?え?た?。

は?つ?と?気?づ?い?て?妖?忌?は?眼?前?の?光?景?
に?目?を?凝?ら?す?。

彼?の?目?に?ま?ず?も?つ?て?映?つ?た?の?は?大?
き?な?桜?の?木?。?西?行?妖?が?妖?忌?を?見?下?
ろ?し?て?い?た?。

そ?し?て?次?に?映?つ?た?の?が?、?幽?々?子?と?
紫?の?二?人?。

妖?怪?と?人?間?が?楽?し?く?話?し?て?い?る?。
耳?を?そ?ば?立?て?て?聞?く?限?り?で?は?紫?が?
一?方?的?に?話?し?て?い?る?よ?う?に?見?え?る?
が?、

遠?い?場?所?か?ら?そ?れ?を?見?て?い?る?妖?忌?
に?は?よ?く?分?か?ら?な?か?つ?た?。

幽々子？の？背？中？を？見？て？、？彼？は？一？人？思？
う？の？だ？つ？た？。

い？つ？も？彼？女？の？傍？に？い？た？妖？忌？だ？が？、？
こ？ん？な？に？も？彼？女？の？背？中？は？大？き？か？つ？
た？も？の？だ？ろ？う？か？。

成？長？し？て？、？大？き？く？な？つ？た？彼？女？は？、？
何？人？も？の？の？死？を？背？負？つ？て？生？き？て？い？
る？。

そ？ん？な？彼？女？を？独？り？に？は？さ？せ？た？く？な？
い？、？そ？う？思？つ？た？妖？忌？で？あ？つ？た？が？、
彼？女？と？紫？の？姿？を？見？て？、？も？う？十？分？で？
は？な？い？か？、？と？思？わ？ず？に？は？い？ら？れ？な？
か？つ？た？。

私？が？い？な？く？な？つ？て？も？、？彼？女？は？生？き？
て？い？け？る？の？で？は？な？い？だ？ろ？う？か？。

手？を？貸？し？て？や？ら？な？い？と？足？取？り？も？お？
ぼ？つ？か？な？い？彼？女？が？転？ん？で？し？ま？い？そ？
う？で？、

誰？か？ら？も？恐？れ？ら？れ？、？蔑？ま？れ？た？彼？女？
が？不？憫？で？な？ら？な？く？て？、

そ？し？て？な？に？よ？り？、？彼？女？が？好？き？だ？つ？
た？か？ら？。

だ？か？ら？妖？忌？は？ず？つ？と？彼？女？の？傍？に？い？
よ？う？。？そ？う？思？つ？た？。

「？…？…？」

け？ど？そ？の？必？要？は？な？い？の？か？も？し？れ？な？
い？。

妖？忌？は？来？た？道？を？振？り？返？つ？て？、？静？か？
に？屋？敷？へ？と？帰？つ？て？い？つ？た？。

？
？
？
？
？
？

こ？れ？は？彼？女？な？り？の？決？意？だ？つ？た？の？だ？
る？う？。

紫？は？事？の？顛？末？が？終？わ？つ？た？と？き？、？そ？
う？結？論？付？け？た？。

「？私？が？こ？の？西？行？妖？の？花？を？咲？か？せ？て？
あ？げ？る？」

そ？の？言？葉？が？意？味？す？る？こ？と？を？、？ま？だ？
知？ら？な？く？て？。

そ？う？い？え？ば？、？こ？の？桜？の？木？に？花？を？咲？
か？せ？た？ら？花？見？を？し？よ？う？か？と？言？つ？た？
か？ら？か？し？ら？。

…？…？な？ん？て？事？に？思？い？至？つ？た？。

だ？か？ら？無？責？任？に？も？、？彼？女？は？言？つ？て？
し？ま？う？の？だ？つ？た？。

「？楽？し？み？に？し？て？る？わ？」

そ？の？時？の？幽？々？子？の？表？情？は？、？一？体？ど？
ん？な？表？情？を？し？て？い？た？の？だ？ろ？う？か？。

呆？れ？た？、？の？だ？ろ？う？か？。

そ？れ？と？も？、？哀？し？か？つ？た？の？だ？ろ？う？か？。

「そ？れ？じ？ゃ？、？ま？た？会？え？る？日？ま？で？」

あ？ま？り？に？も？、？唐？突？過？ぎ？る？出？来？事？に？
背？を？向？け？て？、？去？つ？て？い？つ？た？彼？女？を？
見？て？。

こ？れ？が？何？を？意？味？し？て？い？る？の？か？、？そ？
れ？以？前？に？、
彼？女？に？何？が？あ？つ？た？の？か？、？そ？れ？が？知？
り？た？か？つ？た？。

「？…？…？」

呆？然？。

何？が？な？ん？だ？か？、？分？か？ら？な？い？。

「？…？…？紫？様？」

幽？々？子？の？背？を？ず？つ？と？目？で？追？つ？た？紫？
の？背？後？で？、？西？行？妖？は？嗤？つ？た？。
そ？ん？な？気？が？し？た？。

？
？
？
？
？
？

「？幽？々？子？殿？は？誰？と？も？会？い？た？が？つ？て？
い？な？い？よ？う？だ？。？私？も？含？め？て？、？な？」

次？の？日？の？朝？。

人？間？が？朝？目？覚？め？て？、？す？ぐ？の？時？間？に？
紫？は？幽？々？子？の？屋？敷？へ？と？出？向？い？た？。
屋？敷？の？中？へ？隙？間？を？使？つ？て？入？ら？な？か？
つ？た？の？は？、？幽？々？子？に？嫌？わ？れ？た？く？無？
か？つ？た？と？い？う？事？も？あ？り？、
屋？敷？の？前？ま？で？隙？間？で？や？つ？て？き？て？、？
玄？関？先？で？彼？女？は？妖？忌？に？ぴ？し？や？り？と？
言？わ？れ？た？の？だ？つ？た？。

「？…？…？そ？う？」

会？い？た？が？つ？て？い？な？い？、？と？い？う？妖？忌？
か？ら？の？言？葉？は？真？実？味？に？欠？け？て？い？た？
が？、？妖？忌？自？身？に？も？会？い？た？が？つ？て？い？
な？い？と？な？る？と？、
そ？れ？こ？そ？余？計？に？、？そ？れ？が？事？実？な？の？
だ？と？突？き？つ？け？ら？れ？た？気？分？に？な？つ？た？。

「？…？…？そ？う？だ？、？あ？の？大？き？な？桜？の？木？
の？事？に？つ？い？て？聞？い？て？も？い？い？か？し？ら？
そ？し？て？、？幽？々？子？の？口？か？ら？語？ら？れ？な？
い？の？で？あ？れ？ば？、
彼？に？聞？く？し？か？無？か？つ？た？。？気？に？な？つ？
て？い？た？こ？と？を？。
き？つ？と？そ？れ？は？彼？女？に？関？係？す？る？も？の？
な？の？だ？ろ？う？と？。

「？い？い？だ？ろ？う？。？た？だ？条？件？が？あ？る？」

「？条？件？、？で？す？つ？て？？？」

「幽々子？殿を、見捨てる？ない？で欲？しい？」

「体？何？の？条？件？を？出？さ？れ？る？の？か？と？思？つ？て？身？構？え？た？紫？で？あ？つ？た？が？、全？く？の？想？定？外？の？条？件？に？驚？い？た？。」

「そん？な？条？件？な？ど？、？条？件？と？は？言？え？な？い？。」

「私？は？千？年？を？超？え？る？妖？怪？で？あ？つ？て？、？彼？女？は？人？の？子？な？の？だ？か？ら？。」

「え？え？、？見？捨？て？な？い？わ？よ？。？だ？つ？て？私？の？友？達？な？の？だ？か？ら？。」

「そ？う？、？彼？女？は？人？の？子？な？の？だ？か？ら？。」

「そ？れ？か？ら？妖？忌？は？幽々子？の？生？い？立？ち？を？語？つ？た？。」

「彼？女？自？身？が？特？異？な？能？力？を？持？つ？た？少？女？で？あ？る？事？や？、？こ？の？地？へ？や？つ？て？き？た？こ？と？も？。」

「そ？し？て？こ？の？屋？敷？に？幽々子？と？妖？忌？し？か？い？な？い？訳？も？。？何？も？か？も？。」

「妖？忌？は？ど？こ？か？懐？か？し？さ？を？感？じ？な？が？ら？語？り？、？紫？は？そ？ん？な？妖？忌？に？口？を？挟？ま？ず？に？黙？つ？て？聞？い？て？い？た？。」

「聞？い？て？い？く？に？連？れ？て？、？紫？の？知？ら？な？い？彼？女？が？妖？忌？の？中？に？は？い？た？と？い？う？事？を？知？つ？た？。」

彼？女？は？、？私？に？ど？ん？な？姿？を？見？せ？て？い？
た？だ？ろ？う？か？。

彼？の？語？る？中？で？、？そ？れ？こ？そ？無？邪？気？な？
子？供？の？よ？う？う？な？し？ぐ？さ？を？、？笑？顔？を？見？
せ？た？だ？ろ？う？か？。

私？に？向？け？た？、？笑？顔？は？ど？こ？か？大？人？び？
て？い？て？、？そ？し？て？…？…？。

よ？く？、？分？か？ら？な？い？。

「？最？後？に？、？西？行？妖？に？つ？い？て？話？し？て？
お？き？た？い？こ？と？が？あ？る？」

西？行？妖？と？い？う？ワ？ー？ド？を？耳？に？し？た？途？
端？、？不？思？議？と？傘？を？握？つ？て？い？た？手？に？
力？が？籠？つ？た？。

恐？ら？く？心？の？片？隅？で？語？ら？れ？る？で？あ？る？
う？と？思？つ？て？い？た？か？ら？か？も？し？れ？な？い？。
だ？か？ら？こ？そ？前？に？妖？忌？と？話？し？た？時？に？
鎌？を？か？け？て？い？た？の？だ？が？、？あ？の？時？は？
ひ？つ？か？か？ら？な？か？つ？た？。

そ？れ？を？今？、？私？に？話？す？と？い？う？こ？と？は？
彼？は？僅？か？で？も？自？分？を？信？頼？し？て？い？る？
と？い？う？こ？と？だ？ろ？う？か？。

「？一？際？大？き？な？桜？の？木？が？あ？る？の？は？、？
知？つ？て？い？る？な？。？あ？れ？は？桜？の？木？で？は？
あ？る？が？、？同？時？に？妖？怪？で？も？あ？る？」

信？頼？、？と？い？う？も？の？を？私？は？築？け？た？の？
だ？ろ？う？か？。

そ？れ？も？よ？く？分？か？ら？な？い？。

「？…？…？血？を？吸？い？す？ぎ？た？、？妖？怪？な？ん？
だ？」

？ ？ ？ ？ ？ ？

「？そ？れ？は？つ？ま？り？あ？の？桜？の？木？は？幽？々？
子？と？同？質？の？能？力？を？持？つ？て？い？る？と？い？
う？の？…？」

「お？そ？ら？く？、？な？。？あ？の？桜？の？木？は？今？ま
？で？何？故？か？幽？々？子？殿？に？危？害？を？加？え？て
？い？な？か？つ？た？か？？ら？安？心？し？き？つ？て？い？
た？が？、？一？応？紫？殿？に？も？知？つ？て？い？て？欲？
し？か？つ？た？」

死？へ？と？誘？う？の？と？同？質？の？能？力？。

あ？の？桜？の？木？も？ま？た？、？死？の？能？力？を？持？
つ？て？い？る？の？だ？ろ？う？。

血？を？吸？い？す？ぎ？た？故？の？、？忌？ま？わ？し？い？
謂？れ？の？力？。

花？を？咲？か？せ？な？い？と？い？う？の？は？、？つ？ま？
り？死？を？象？徴？し？て？い？る？の？だ？ろ？う？か？。

「？あ？り？が？と？う？。？何？か？掴？め？た？気？が？す？
る？わ？」

「？死？」？と？い？う？キ？ー？ワ？ー？ド？が？溢？れ？か？

え？り？、？死？が？軽？い？も？の？の？よ？う？に？思？え？
て？な？ら？な？か？つ？た？。

平？然？と？、？目？の？前？に？あ？る？と？い？う？の？に？
？そ？れ？は？少？し？前？に？い？て？笑？つ？て？い？る？の？
？だ？。

追？い？つ？く？こ？と？も？追？い？つ？か？れ？る？こ？と？
も？な？い？距？離？。

彼？女？は？、？西？行？寺？幽？々？子？は？、？一？体？何？
を？考？え？て？い？る？の？か？。

そ？れ？は？桜？の？木？と？関？係？し？て？い？る？の？だ？
る？う？か？。

『？私？が？こ？の？西？行？妖？の？花？を？咲？か？せ？て？
あ？げ？る？』

ふ？い？に？彼？女？の？言？葉？が？過？ぎ？つ？た？。

あ？の？妖？怪？桜？を？咲？か？す？と？い？う？事？が？何？
を？意？味？し？て？い？る？の？か？、？気？づ？い？て？。

妖？忌？と？別？れ？た？後？、？す？ぐ？さ？ま？隙？間？を？
使？つ？て？移？動？し？た？の？だ？つ？た？。

「？そ？れ？は？あ？ま？り？に？も？無？謀？だ？わ？…？…？
！？！？」

焦？り？に？混？じ？つ？た？咳？き？が？、？隙？間？の？中？
へ？と？消？え？去？つ？た？。

？
？
？
？
？
？
？

隙？間？と？呼？ば？れ？る？虚？空？の？闇？へ？と？消？え？
て？い？く？八？雲？紫？の？背？を？、？妖？忌？は？目？を？
細？め？な？が？ら？眺？め？て？い？た？。

あ？の？暗？い？闇？の？向？こ？う？に？は？何？が？あ？る？
の？だ？ろ？う？か？。

少？し？だ？け？気？に？な？つ？て？、？や？め？た？。？私？
は？あ？ち？ら？に？行？つ？て？は？な？ら？な？い？と？思？
つ？た？。

行？つ？た？と？こ？ろ？で？何？に？な？る？と？も？、？思？
つ？た？。

彼？女？の？言？葉？に？は？、？少？な？か？ら？ず？「？貴？
方？は？此？処？に？居？る？べ？き？」と？い？う？思？い？
が？込？め？ら？れ？て？い？た？よ？う？な？気？が？す？る？。
自？惚？れ？か？も？し？れ？な？い？が？、？そ？う？感？じ？
た？の？だ？つ？た？。

そ？し？て？感？じ？た？の？で？あ？れ？ば？や？る？し？か？
な？い？。

「？私？に？時？間？が？あ？れ？ば？」

け？ど？、？そ？れ？は？難？し？い？こ？と？の？よ？う？に？
も？思？え？た？。

そ？れ？は？突？然？や？つ？て？く？る？。？段？階？を？踏？
ま？ず？に？、？何？か？が？キ？ツ？力？ケ？で？と？か？そ？
う？い？う？の？を？無？視？し？て？、？い？き？な？り？現？
れ？る？。

だ？か？ら？き？つ？と？余？裕？が？生？ま？れ？て？し？ま？
う？の？だ？ろ？う？。？段？階？を？踏？ん？で？な？い？が？
故？に？「？き？つ？と？大？丈？夫？だ？ろ？う？」と？い？

う？あ？り？も？し？な？い？余？裕？が？。

も？し？か？し？た？ら？、？そ？れ？が？妖？忌？の？行？動？
に？も？現？れ？て？い？る？の？か？も？し？れ？な？い？。

「？時？間？な？ど？、？と？つ？く？の？昔？に？無？く？な？
つ？て？い？た？の？だ？つ？た？な？」

寂？し？げ？に？語？る？庭？師？が？空？を？仰？ぐ？。

陽？射？し？が？眩？し？く？て？手？で？目？を？覆？う？よ？
う？に？し？た？が？、？覆？う？こ？と？が？出？来？な？か？
つ？た？。

手？の？ひ？ら？か？ら？す？り？抜？け？る？感？覚？に？、？
妖？忌？は？溜？息？を？呟？い？た？。

？ ？ ？ ？ ？ ？

「？君？が？や？つ？て？く？る？な？ん？て？思？つ？て？も？
見？な？か？つ？た？よ？。？ん？、？急？ぎ？の？用？か？い？
？？」

「？貴？方？と？ゆ？つ？く？り？お？話？し？た？い？と？こ？
る？だ？け？ど？、？生？憎？、？急？を？要？す？る？の？よ？」

紅？。

八？雲？紫？が？隙？間？を？使？つ？て？や？つ？て？く？た？
場？所？は？紅？に？困？ま？れ？た？大？き？な？部？屋？だ？
つ？た？。

頭？上？に？は？大？き？な？シ？ヤ？ン？デ？リ？ア？。？灯？
る？火？は？ゆ？ら？ゆ？ら？と？規？則？正？し？く？燃？え？

て？い？て？、？それ？が？魔？法？に？よ？つ？て？制？御？
さ？れ？て？い？る？こ？と？が？分？か？る？。
と？ん？、？ふ？か？ふ？か？の？絨？毯？に？降？り？立？つ？
て？紫？は？目？の？前？に？い？る？人？物？に？願？い？出？
た？。

「？図？書？館？を？使？わ？せ？て？欲？し？い？の？」

「？い？い？だ？ろ？う？。？そ？の？代？わ？り？一？つ？頼？
み？た？い？こ？と？が？あ？る？」

「？そ？れ？が？私？に？出？来？る？事？な？ら？、？ね？」

目？の？前？の？人？物？が？く？す？り？と？笑？つ？て？、？
手？を？あ？げ？る？。

図？書？館？を？好？き？に？使？え？、？と？い？う？サ？イ？
ン？に？紫？は？顔？を？綻？ば？せ？て？、？く？る？り？と？
振？り？向？い？て？隙？間？へ？と？消？え？去？つ？た？。

……勘？繰？り？過？ぎ？で？は？な？い？だ？ろ？う？か？。

彼？女？だ？つ？て？、？紫？と？会？い？た？く？な？い？時？
だ？つ？て？あ？る？の？か？も？し？れ？な？い？。

そ？れ？が？重？な？つ？て？し？ま？つ？た？だ？け？で？は？
無？い？の？か？？

そ？ん？な？考？え？が？思？い？浮？か？ん？で？、？首？を？
左？右？に？振？つ？て？か？き？消？し？た？。

幽？々？子？が？行？お？う？と？し？て？い？る？、？咲？か？
な？い？も？の？を？咲？か？す？、？そ？の？行？為？だ？け？
で？危？険？な？の？は？確？か？だ？つ？た？。

生？あ？る？も？の？を？必？然？的？な？死？へ？と？招？く？、

？な？ら？ま？だ？い？い？。？そ？の？死？と？い？う？も？の？
？が？生？の？延？長？線？上？に？存？在？し？て？い？る？の？
？だ？か？ら？。

し？か？し？逆？は？ど？う？だ？ろ？う？。？死？か？ら？生？
へ？、？そ？れ？は？と？て？も？危？険？な？事？だ？。

ど？ん？な？物？語？に？も？、？生？き？返？す？に？は？そ？
れ？相？応？の？代？償？を？求？め？ら？れ？る？事？が？多？
い？。

西？行？妖？に？咲？か？せ？る？代？わ？り？に？幽？々？子？
が？代？償？と？し？て？死？に？至？る？可？能？性？が？あ？
る？の？か？も？し？れ？な？い？。

そ？し？て？そ？れ？を？彼？女？は？知？つ？て？い？る？の？
だ？ろ？う？。？死？へ？と？誘？う？少？女？な？ら？ば？、？
生？死？す？ら？操？れ？る？と？踏？ん？で？の？行？為？か？
も？し？れ？な？い？。

な？ら？ば？紫？は？止？め？な？く？て？は？い？け？な？い？。
？彼？女？の？友？達？と？し？て？。？何？よ？り？、？二？番
？目？の？親？友？ま？で？離？し？た？く？な？か？つ？た？。

八？雲？紫？の？妖？怪？と？し？て？の？力？は？強？い？と？
は？言？い？切？れ？な？か？つ？た？。

力？で？も？負？け？る？。？妖？力？で？も？負？け？る？。

境？界？を？操？る？、？と？い？う？一？点？の？み？で？何？
と？か？生？き？て？き？た？。

そ？れ？で？も？き？つ？と？、？幻？想？の？妖？怪？に？は？
負？け？て？し？ま？う？か？も？し？れ？な？い？。

西？行？妖？と？言？わ？れ？る？妖？怪？に？は？歴？史？が？
あ？る？。

歌？聖？と？呼？ば？れ？た？男？が？あ？の？木？の？本？で？
死？に？至？り？、？そ？し？て？そ？の？繰？り？返？し？だ？。

何？人？も？、？何？人？も？の？血？を？吸？つ？た？妖？怪？桜？。？そ？の？力？は？計？り？知？れ？な？い？。

封？印？す？る？。

何？も？起？こ？る？前？に？、？彼？女？が？動？き？出？す？前？に？。

「？私？が？も？つ？と？強？く？な？れ？ば？、？守？れ？る？の？か？し？ら？。」

彼？女？を？。

「？見？つ？け？た？」

大？量？の？本？に？困？ま？れ？な？が？ら？、？紫？は？目？的？の？本？を？見？つ？け？る？こ？と？が？出？来？た？。

こ？れ？は？大？量？の？桜？の？花？び？ら？か？ら？一？つ？だ？け？色？が？違？う？花？び？ら？を？搜？す？の？と？同？じ？く？ら？い？難？し？い？も？の？で？、

自？分？自？身？、？簡？単？に？見？つ？か？ら？な？い？だ？ろ？う？と？高？を？括？つ？て？い？た？だ？け？に？、？そ？の？本？を？見？つ？け？た？と？き？に？思？わ？ず？声？を？上？げ？て？し？ま？つ？た？。

焦？り？に？混？じ？つ？た？声？が？震？え？る？。？頭？が？い？つ？も？以？上？に？働？い？て？、？鮮？明？に？、？よ？り？ク？リ？ア？に？思？考？す？る？こ？と？が？出？来？る？。

そ？の？本？を？手？に？と？つ？て？、？マ？ヨ？ヒ？ガ？へ？
と？帰？る？。

そ？れ？で？も？そ？れ？が？杞？憂？で？あ？つ？て？欲？し？
い？。

そ？し？て？早？く？、？あ？の？桜？の？木？を？封？印？さ？
せ？な？け？れ？ば？な？ら？な？い？。

本？を？握？り？、？奥？歯？を？噛？み？締？め？た？。

？
？
？
？
？
？

？
？い？つ？ま？で？も？続？く？と？思？つ？て？い？た？。
う？う？ん？、？違？う？わ？ね？。

私？は？目？を？反？ら？す？事？が？出？来？ず？に？い？る？
の？だ？か？ら？。

だ？か？ら？、？だ？か？ら？、？私？は？こ？の？場？所？に？
い？る？の？だ？ろ？う？。

あ？の？日？々？を？続？か？せ？る？為？に？、？け？じ？め？
と？し？て？、？終？止？符？を？打？た？な？け？れ？ば？な？
ら？な？い？。

い？つ？の？間？に？長？き？眠？り？の？夢？さ？め？て？
？驚？く？こ？と？の？あ？ら？ん？と？す？ら？む

私？は？い？つ？ま？で？彷徨？つ？て？、？迷？い？続？け？
れ？ば？い？い？の？だ？ろ？う？か？。

い？つ？にな？ね？ば？、？私？は？。

？
？
？
？
？
？
？

「？…？…？」

夜？の？帳？か？ら？徐？々？に？明？る？く？な？つ？て？い？
く？丑？四？つ？時？。

妖？忌？は？微？か？な？物？音？が？玄？関？先？か？ら？聞？
こ？え？て？目？が？醒？め？た？。

元？々？浅？い？睡？眠？だ？つ？た？せ？い？か？、？意？識？
は？す？ぐ？に？覚？醒？し？そ？の？物？音？が？幽？々？子？
の？も？の？で？あ？る？と？推？測？し？た？。

朝？食？も？夕？飯？も？彼？女？と？食？事？を？共？に？す？
る？こ？と？が？無？く？、？幽？々？子？の？部？屋？の？前？
に？食？事？を？置？い？て？い？た？た？め？、？今？日？一？
日？、？彼？女？を？し？つ？か？り？見？て？は？い？な？か？
つ？た？。

だ？か？ら？だ？ろ？う？か？、？い？つ？も？の？外？出？に？
さ？し？て？ま？た？紫？と？会？う？の？だ？ろ？う？か？と？
思？つ？て？い？た？が？、？今？回？ば？か？り？は？妙？な？
胸？騒？ぎ？が？し？た？。

胸？を？締？め？付？け？ら？れ？る？よ？う？な？、？ひ？ど？
く？気？持？ち？悪？い？何？か？。

そ？の？正？体？は？き？つ？と？、？焦？り？だ？。

焦？り？が？、？妖？忌？を？急？か？し？、？そ？し？て？苦？
し？め？る？。

何？を？も？た？も？た？し？て？い？る？ん？だ？。？早？く？
幽？々？子？を？追？え？、？と？思？い？至？つ？た？時？に？
は？妖？忌？は？腰？に？刀？を？提？げ？て？翔？け？て？い？
つ？た？。

屋？敷？か？ら？出？た？時？に？は？既？に？幽？々？子？の？
姿？は？無？か？つ？た？。

目？を？凝？ら？し？て？辺？り？一？体？を？眺？め？て？も？
闇？し？か？な？く？、？彼？女？は？も？し？か？し？た？ら？
走？つ？て？い？る？の？か？、？と？い？う？事？を？考？え？
る？。

き？つ？と？彼？女？は？西？行？妖？の？元？へ？向？か？つ？
て？い？る？の？だ？ろ？う？。？だ？と？し？た？ら？行？く？
べ？き？道？は？一？つ？だ？つ？た？。

「？…？…？」

で？も？、？幽？々？子？の？元？に？追？い？つ？い？た？と？
し？た？ら？。

私？は？何？が？出？来？る？だ？ろ？う？か？。

何？を？し？て？あ？げ？ら？れ？る？だ？ろ？う？か？。

彼？女？に？对？し？て？、？何？も？出？来？な？い？の？で？
は？な？い？か？。

妖？忌？は？大？き？く？深？呼？吸？し？て？、？冷？た？い？
夜？の？空？気？が？彼？の？頭？に？鞭？を？打？つ？。

た？と？え？何？も？出？来？な？く？て？も？、？彼？女？の？
傍？に？居？て？や？れ？る？事？な？ら？出？来？る？だ？ろ？
う？。

山？桜？が？咲？き？誇？る？な？か？、？妖？忌？は？走？つ？
た？。

桜？の？花？び？ら？が？走？つ？て？い？く？妖？忌？を？す？
り？抜？け？て？宙？に？舞？う？。

体？が？悲？鳴？を？上？げ？る？。？足？が？鉛？の？よ？う？
に？重？く？な？つ？て？熱？を？帯？び？る？。？夜？の？冷？
気？が？顔？面？に？突？き？刺？し？頬？が？動？か？な？く？
な？つ？て？い？く？。

走？る？の？を？止？め？た？ら？も？う？彼？女？と？会？え？
な？い？の？で？は？な？い？か？と？い？う？錯？覚？を？覚？
え？て？、？た？だ？が？む？し？や？ら？に？走？つ？た？。

走？つ？て？走？つ？て？走？つ？て？、

妖？忌？は？少？し？だ？け？昔？の？事？を？思？い？出？し？
た？。

「？？？私？は？、？ど？う？し？た？ら？い？い？の？か？
し？ら？」

あ？れ？は？、？彼？女？の？父？親？が？死？ん？だ？と？い？
う？報？せ？を？聞？い？た？時？で？あ？つ？た？か？。

幽？々？子？の？父？親？は？彼？女？が？幼？い？頃？に？旅？
立？つ？て？し？ま？つ？た？の？だ？か？ら？、？最？初？に？
そ？の？報？せ？を？聞？い？た？時？は？表？情？を？崩？さ？
ず？、「？そ？う？…？…？」と？返？し？た？だ？け？だ？つ？
た？。

肉？親？を？無？く？し？た？と？い？う？実？感？が？無？か？
つ？た？の？か？も？し？れ？な？い？。

け？ど？少？し？経？つ？て？、？妖？忌？に？向？か？つ？て

「?…?…?も?う?会?え?な?い?の?か?し?ら?」?と
?鳴?咽?混?じ?り?に?そ?う?聴?い?て?き?た?と?
き?は?、?自?分?自?身?何?と?言?え?ば?良?い?の?
か?分?か?ら?な?か?つ?た?の?を?覚?え?て?い?る
?。
そ?し?て?死?の?儂?さ?と?無?情?さ?を?身?を?以?
つ?て?知?つ?た?彼?女?は?、?あ?れ?以?来?人?と?
接?す?る?こ?と?が?少?な?く?な?つ?た?。

「?そ?れ?は?…?、?私?に?も?分?か?り?ま?せ?
ん?な?」

そ?れ?を?聞?い?て?彼?女?は?顔?を?俯?か?せ?た?
で?も?こ?れ?ば?か?り?は?妖?忌?自?身?が?分?か?
る?も?の?で?も?な?い?し?、?何?と?い?つ?て?も?
彼?女?自?身?が?解?決?す?べ?き?問?題?だ?と?思?
つ?た?か?ら?だ?つ?た?。

だ?か?ら?妖?忌?は?ぶ?つ?き?ら?ぼ?う?に?彼?女?
に?告?げ?た?の?だ?つ?た?。

「?で?す?が?、?幽?々?子?殿?は?独?り?で?は?無?
い?こ?と?を?お?忘?れ?な?き?よ?う?」

そ?の?言?葉?に?呆?け?た?顔?を?見?せ?て?、?そ?
し?て?そ?の?意?味?を?理?解?し?、?は?に?か?ん?
だ?笑?顔?で?幽?々?子?は?「?あ?り?が?と?う?」?
と?言?つ?た?。

柄?に?も?無?い?事?を?、?と?。?恥?ず?か?し?く?
な?つ?て?妖?忌?は?背?を?向?け?て?早?々?と?立?
ち?去?つ?た?。

後？ろ？か？ら？は？く？す？り？と？笑？つ？た？声？が？聞？
こ？え？て？、？気？恥？ず？か？し？さ？と？安？堵？感？が？
彼？の？胸？を？一？杯？に？さ？せ？た？。

そ？ん？な？事？を？思？い？出？し？た？。

「？　？　？　？」

西？行？妖？が？蕾？を？実？ら？せ？て？い？た？。

い？や？そ？れ？よ？り？も？先？に？、？西？行？妖？の？幹？
の？元？で？倒？れ？て？い？る？人？影？に？目？が？い？つ？
た？。

白？い？着？物？を？着？た？、？彼？女？が？。

西？行？寺？幽？々？子？の？姿？が？、？そ？こ？に？あ？つ？
た？。

「？幽？々？子？殿？…？…？…？」

足？が？止？ま？つ？た？。

足？よ？り？も？先？に？震？え？る？手？が？前？に？出？て？、
？バ？ラ？ン？ス？を？崩？し？て？地？面？に？手？を？つ？い？
？て？、？は？つ？と？し？て？顔？を？上？げ？る？。

頭？が？真？つ？白？に？な？つ？た？。

思？い？出？し？て？い？た？懐？か？し？い？記？憶？と？か？、
？そ？ん？な？も？の？を？上？か？ら？白？で？塗？り？つ？ぶ？
？し？た？よ？う？に？。

妖？忌？は？何？度？か？転？び？そ？う？に？な？り？な？が？
ら？も？、？幽？々？子？の？元？へ？駆？け？つ？け？た？。

「ゆゆゆ……？こ……？……？？」

彼？女？が？着？た？白？い？着？物？に？紅？黒？い？色？を？
見？た？時？に？、？こ？れ？は？何？だ？と？思？つ？て？、？
少？し？時？間？が？掛？か？つ？て？理？解？し？て？、？思？
わ？ず？幽？々？子？の？手？を？握？つ？た？。

夜？の？冷？気？を？纏？つ？た？妖？忌？の？手？は？冷？た？
く？、？彼？女？の？手？を？握？つ？て？も？そ？れ？が？暖？
か？い？の？か？冷？た？い？の？か？分？か？ら？な？か？つ？
た？。

感？覚？の？無？い？手？で？握？り？締？め？な？が？ら？、？
彼？女？の？姿？を？も？う？一？度？見？る？。？白？の？着？
物？の？そ？れ？は？、？ま？る？で？死？装？束？の？よ？う？
だ？、？と？思？つ？た？。

「……？妖？忌？の？手？、？冷？た？い？わ？」

今？に？も？消？え？そ？う？な？声？で？、？彼？女？は？言？
つ？た？。

笑？み？を？作？る？よ？う？に？頬？を？ぎ？こ？ち？な？く？
動？か？し？て？、？彼？の？手？を？握？り？返？し？た？。

「？な？に？し？て？？？」

「？私？、？駄？目？だ？つ？た？わ？」

妖？忌？の？声？を？遮？つ？て？、？幽？々？子？は？笑？み？
を？作？つ？た？ま？ま？西？行？妖？と？妖？忌？を？見？上？
げ？な？が？ら？話？し？始？め？る？。

「？桜？の？誘？惑？に？、？負？け？た？の？」

桜？は？人？を？呼？び？寄？せ？る？。

桜？に？人？が？や？つ？て？く？る？の？で？は？な？く？、？桜？に？魅？了？さ？れ？て？人？は？や？つ？て？く？る？。

そ？ん？な？事？を？聞？い？た？こ？と？が？あ？つ？た？。

で？も？分？か？ら？な？か？つ？た？。？今？に？な？つ？て？彼？女？が？桜？に？魅？了？さ？れ？る？理？由？が？。

西？行？妖？が？原？因？な？ら？ば？、？何？で？今？な？の？か？。

そ？の？最？た？る？き？つ？か？け？が？分？か？ら？な？く？て？、？何？で？こ？う？な？つ？て？し？ま？つ？た？の？か？と？考？え？て？、

妖？忌？の？心？の？内？で？答？え？が？出？な？い？の？を？見？透？か？し？た？よ？う？に？、？彼？女？は？続？け？た？。

「？こ？の？桜？が？咲？い？た？ら？、？花？見？を？し？よ？う？。？つ？て？約？束？し？た？の？」

誰？と？。

と？言？お？う？と？し？て？、？八？雲？紫？の？姿？が？思？い？浮？か？ん？だ？。

そ？う？い？え？ば？彼？女？の？姿？が？無？い？。？今？日？に？限？つ？て？来？な？い？と？は？思？え？な？か？つ？た？。

紫？は？幽？々？子？の？事？を？気？に？か？け？て？い？る？よ？う？だ？つ？た？し？、？何？よ？り？心？配？し？て？い？

る？節？が？あ？つ？た？。

あ？つ？と？い？う？間？に？空？間？移？動？出？来？る？彼？女？な？ら？ば？、？私？よ？り？先？に？彼？女？の？元？に？駆？け？つ？け？て？い？た？の？で？は？な？い？か？と？思？

つ？た？。

「？で？も？、？や？つ？ぱ？り？駄？目？だ？つ？た？」

弱？弱？しく？話？す？彼？女？が？見？て？い？ら？れ？な？
く？な？つ？て？、？彼？女？を？抱？き？し？め？た？。

冷？た？い？身？体？同？士？、？そ？こ？に？は？何？も？感？
覚？な？ど？無？か？つ？た？。

妖？忌？の？体？は？冷？え？切？つ？て？い？て？、？そ？し？
て？彼？女？の？身？体？も？冷？え？切？つ？て？い？た？。

「？妖？忌？」

「？…？…？」

「？あ？り？が？と？う？」

思？い？が？け？な？い？言？葉？に？、？待？つ？て？く？れ？、
？と？思？つ？た？。

だ？か？ら？彼？は？単？刀？直？入？に？訊？い？た？の？だ？
つ？た？。

？ ？死？ん？で？し？ま？う？の？で？す？か？？

？ ？そ？う？ね？、？そ？う？か？も？し？れ？な？い？。

「？ふ？ざ？け？な？い？で？下？さ？い？、？幽？々？子？殿？
…？…？！？！？ ？私？が？助？け？ま？す？か？ら？。？助？
け？る？か？ら？…？…？」

「？ね？え？妖？忌？、？西？行？妖？は？咲？い？て？い？る？

か？し？ら？」

抱？き？し？め？て？い？た？彼？女？を？そ？つ？と？放？し？
て？、？西？行？妖？を？見？上？げ？る？。

蕾？ば？か？り？で？、？一？つ？で？も？花？を？咲？か？せ？
て？い？な？い？か？と？目？を？動？か？し？て？、？必？死？
に？探？す？。

け？ど？依？然？と？し？て？、？花？を？咲？か？せ？る？こ？
と？は？無？か？つ？た？。

「？咲？い？て？、？無？い？の？ね？」

彼？女？の？身？体？が？動？か？な？い？の？を？見？る？と？、
？動？か？せ？な？い？ほ？ど？に？衰？弱？し？て？い？る？の？
？だ？ろ？う？。

目？は？薄？つ？す？ら？と？閉？じ？か？け？て？い？て？、？
声？を？発？す？る？だ？け？で？辛？そ？う？な？彼？女？を？
見？て？は？い？ら？れ？な？か？つ？た？。

「？願？は？く？は？、？花？の？下？に？て？、？春？死？な？
ん？…？…？」

彼？女？の？紡？ぎ？だ？す？言？葉？に？、？必？死？に？耳？
を？傾？け？る？。

一？言？も？聞？き？漏？ら？し？て？は？い？け？な？い？と？
思？つ？て？、？思？わ？ず？幽？々？子？の？手？を？強？く？
握？る？。

彼？女？の？声？を？聞？か？ず？に？無？理？矢？理？で？も？
屋？敷？に？戻？つ？て？も？助？か？る？保？障？な？ん？て？
無？か？つ？た？。

既？に？彼？女？の？着？物？を？染？め？て？い？る？血？は？
妖？忌？の？着？物？に？も？染？み？こ？ん？で？い？て？、？
と？て？も？助？か？る？な？ん？て？思？え？な？か？つ？た？。

「？そ？の？如？月？の？」

だ？か？ら？無？言？で？彼？女？の？言？葉？に？頷？く？し？
か？な？か？つ？た？。
た？だ？た？だ？、？頷？く？し？か？な？か？つ？た？。

「？望？月？の？頃？　？　？…？…？」

そ？の？短？歌？を？詠？い？終？え？て？、？彼？女？は？、？
も？う？声？が？出？な？い？の？で？あ？ろ？う？。

あ？、？り？、？が？、？と？、？う？。

そ？う？口？で？形？作？つ？て？、？微？笑？ん？で？、？微？
笑？ん？で？…？…？。

？　？彼？女？、？西？行？寺？幽？々？子？は？息？を？引？
き？取？つ？た？。

何？も？言？え？な？か？つ？た？。

何？も？、？言？え？な？か？つ？た？。

「？幽？々？子？殿？…？…？、？幽？々？子？殿？…？…？！？
！？」

こ？う？も？あ？つ？さ？り？と？、？終？わ？つ？て？し？ま？

う？も？の？な？の？だ？ろ？う？か？。
彼？女？の？命？は？こ？う？も？簡？単？に？消？え？て？し？
ま？う？の？だ？ろ？う？か？。

「？お？願？い？で？す？か？ら？、？手？を？握？り？返？し？
て？く？だ？さ？い？…？…？」

安？ら？か？な？死？顔？だ？つ？た？。

血？を？流？し？て？、？痛？か？つ？た？だ？ろ？う？。？寒？
か？つ？た？だ？ろ？う？。

そ？ん？な？中？で？彼？女？は？笑？ん？だ？ま？ま？逝？つ？
た？。

幸？せ？そ？う？に？笑？う？彼？女？が？、？ひ？よ？つ？と？
し？た？ら？ま？た？起？き？上？が？る？ん？じ？や？な？い？
か？と？思？つ？て？。

け？ど？彼？女？の？赤？が？現？実？を？突？き？付？け？、？
と？う？の？昔？に？枯？れ？た？と？思？つ？て？い？た？涙？
が？溢？れ？出？て？き？た？。

？
？
？
？
？
？
？

杞？憂？で？も？な？ん？で？も？な？か？つ？た？。

奇？し？く？も？紫？の？嫌？な？予？感？は？当？た？つ？て？

し？ま？つ？た？。

「？何？よ？…？…？こ？れ？…？…？」

西？行？妖？が？、？咲？い？て？い？た？。

満？開？の？花？は？、？薄？紅？色？に？染？ま？り？。？ぼ？
う？、？と？怪？し？げ？に？灯？る？光？に？、？紫？は？不？
安？を？覚？え？た？。

少？し？步？を？進？め？る？と？西？行？妖？の？下？で？倒？
れ？て？い？る？人？影？が？あ？つ？た？。

そ？れ？が？何？な？の？か？考？え？る？よ？り？も？先？に？、
？足？が？動？い？た？。

「？…？…？ゆ？ゆ？、？こ？…？」

訳？が？分？か？ら？な？か？つ？た？。

彼？女？は？何？で？笑？つ？た？ま？ま？動？か？な？い？の？
か？、

何？で？彼？女？の？傍？に？い？る？妖？忌？が？ず？つ？と？
泣？い？て？い？る？の？か？。

あ？ま？り？に？も？唐？突？な？出？来？事？に？頭？が？ど？
う？に？か？な？つ？て？し？ま？い？そ？う？だ？つ？た？。

「？満？開？よ？、？ね？え？。？こ？こ？で？花？見？を？す？
る？ん？じ？や？な？か？つ？た？の？…？…？…？」

声？が？震？え？て？、？手？の？先？が？冷？た？く？な？つ？
て？い？く？。

頬？を？引？き？攣？ら？せ？て？、？彼？女？を？、？動？か？
な？く？な？つ？た？彼？女？を？見？下？ろ？す？。

？　？　遅？か？つ？た？。

何？も？か？も？が？、？　遅？過？ぎ？で？手？遅？れ？で？、？
そ？し？て？全？て？が？終？わ？つ？た？後？だ？つ？た？。

心？に？ぼ？つ？か？り？と？穴？が？開？い？た？か？よ？う？
だ？つ？た？。

大？き？な？空？洞？が？出？来？て？し？ま？つ？た？か？の？
よ？う？な？虚？無？感？。

も？し？か？し？た？ら？妖？怪？は？、？　ほ？ん？と？は？中？
身？等？無？い？の？か？も？し？れ？な？い？。？　そ？れ？く？
ら？い？伽？藍？洞？で？何？も？無？か？つ？た？。

死？と？は？、？　唐？突？に？訪？れ？る？も？の？な？の？だ？
と？。

死？と？は？、？　も？う？彼？女？と？話？す？こ？と？は？出？
来？な？い？の？事？な？の？だ？と？。

死？と？は？、？　こ？ん？な？に？悲？し？い？も？の？な？の？
だ？と？。

今？更？に？な？つ？て？、？　知？つ？た？。

紫？は？お？も？む？ろ？に？満？開？の？西？行？妖？を？見？
上？げ？て？、？　や？り？切？れ？な？い？思？い？を？抱？い？
て？、？　拳？を？握？り？締？め？た？。

花？を？咲？か？せ？た？西？行？妖？は？、？　死？ん？だ？幽？
々？子？を？糧？に？し？て？い？る？よ？う？に？見？え？て？、
？　そ？し？て？、？　新？た？な？死？に？喜？ん？で？る？よ？う？
？　に？見？え？て？。

だ？か？ら？許？せ？な？か？つ？た？。

「？　？　こ？れ？以？上？、？　こ？ん？な？悲？劇？を？繰？
り？返？さ？な？い？よ？う？に？」

西？行？妖？を？、？封？印？す？る？。
そ？れ？が？亡？き？友？に？对？す？る？せ？め？て？も？の？
罪？滅？ぼ？し？だ？っ？た？。

胡蝶の幻想 後編(後書き)

お？久？し？ぶ？り？で？す？。

前？回？の？話？を？書？き？終？え？て？か？ら？四？ヶ？月？
ほ？ど？経？つ？て？よ？う？や？く？今？回？の？お？話？が？
終？わ？り？ま？し？た？。

今？回？の？は？A？n？o？t？h？e？r？S？t？o？r？
y？で？書？か？れ？て？い？た？も？の？を？リ？メ？イ？ク？
し？た？も？の？で？、？台？詞？だ？け？だ？つ？た？描？写？
に？地？の？分？を？加？え？た？り？、

リ？メ？イ？ク？前？を？読？ん？で？い？た？方？も？満？足？
出？来？る？よ？う？に？「？D？i？f？f？e？r？n？t？
S？t？o？r？y？で？の？胡？蝶？の？幻？想？」？を？意？
識？し？ま？し？た？。

つ？と？。

…？…？実？は？リ？メ？イ？ク？だ？け？あ？つ？て？、？語？
れ？る？部？分？が？何？も？無？か？つ？た？り？で？。

あ？と？が？き？の？ス？ペー？ス？を？ど？う？活？用？し？
よ？う？か？迷？つ？て？ま？す？。？は？い？。

そ？ん？な？訳？で？し？て？、？遅？筆？な？が？ら？も？今？
後？も？見？守？つ？て？い？た？だ？け？る？と？嬉？し？い？
で？す？。

こ？ん？な？に？書？く？ペー？ス？が？遅？い？と？、？は？

行間 (前書き)

桜？が？、？舞？つ？て？い？た？。
風？が？、？吹？い？て？い？た？。
髪？が？、？靡？い？て？い？た？。

「？こ？の？桜？の？木？は？、？花？を？咲？か？す？こ？と？
は？あ？る？の？か？し？ら？」

女？性？の？麗？ら？か？な？声？が？誰？か？に？問？い？掛？
け？る？。

肩？に？舞？い？落？ち？て？き？た？桜？の？花？び？ら？を？
？軽？く？手？で？払？い？落？と？し？て？、？彼？女？の？眼？
？前？に？あ？る？大？き？な？桜？の？木？を？見？上？げ？る？
？。

他？の？桜？の？木？と？は？違？う？、？大？き？な？幹？。
力？強？い？そ？れ？は？、？け？れ？ど？桜？の？花？は？お？
る？か？、？蓄？す？ら？生？つ？て？い？な？か？つ？た？。

だ？か？ら？、？だ？る？う？か？。

こ？の？桜？の？木？の？花？を？見？て？み？た？く？な？つ？
た？の？は？。

或？い？は？、？怖？い？も？の？見？た？さ？に？、？で？も？
あ？る？の？か？も？し？れ？な？い？。

花？を？咲？か？さ？な？い？、？と？い？う？よ？り？は？、？
咲？か？せ？ら？れ？な？い？の？で？は？な？い？か？と？考？
え？た？。

だ？か？ら？そ？こ？に？は？、？理？由？と？い？う？も？の？

が？存？在？す？る？わ？け？で？。

退？屈？な？毎？日？を？少？し？だ？け？鮮？や？か？な？色？
で？染？め？て？み？よ？う？。？そ？う？思？っ？た？。

「？ね？え？、？妖？夢？。？頼？み？た？い？こ？と？が？あ？
る？の？だ？け？れ？ど？…？…？」

行間。

「？紫？様？」

「？…？…？」

「？魂？魄？妖？夢？が？動？き？出？し？ま？し？た？」

「？…？…？」

「？春？を？集？め？て？い？る？そ？う？で？す？。？桜？の？木？を？咲？か？せ？る？為？に？、？と？」

「？…？…？そ？う？」

報？告？す？る？藍？に？背？を？向？け？る？よ？う？に？、？紫？は？布？団？で？寝？て？い？た？。

春？と？聞？い？て？、？も？う？そ？ん？な？季？節？な？の？か？と？思？つ？て？、？時？が？経？つ？の？は？早？い？も？の？だ？と？感？慨？深？く？な？る？。

「？…？…？い？い？の？で？す？か？…？」

「？…？…？」

「？こ？の？ま？ま？彼？女？達？を？放？つ？て？お？い？て？、？幽？々？子？様？が？？？」

「？そ？う？だ？、？藍？」

藍？の？言？葉？を？遮？つ？て？、？紫？は？さ？つ？き？ま？で？お？ぼ？ろ？げ？に？話？し？て？い？た？口？調？か？ら？一？変？。？鋭？い？声？が？藍？を？刺？し？た？。

そ？の？反？応？に？藍？は？驚？き？を？隠？せ？ず？に？は？

い？ら？れ？な？か？つ？た？。

「？な？ん？で？し？よ？づ？か？」「？と？声？を？絞？り？出？す？。」

「？花？見？の？準？備？、？し？と？い？て？」

誰が為に少女は筆を執るのか（前書き）

あなたは誰と聞いたら、
わたしは誰でしょうと、

そう答えるあなたは、
知っていたのかもしれない。

そうでしょう？

いつだってあなたはそうだったじゃない。

誰が為に少女は筆を執るのか

風が清々しかった。

いつもの妖精の悪戯も今日くらいは許してやろう。
そんな気分にさせる風だった。

「……」

屋敷の扉という扉が開け放たれ、巡り巡る初夏の風が蹂躪していた。ばらばらと風によって舞い上がる半紙に溜息をついて、彼女は何かに置くものとか無かったかおもむろに立ち上がった。

その立ち上がり方はどこかおしとやかで、彼女を知らない人間であればどこかの箱入り娘か、と道を尋ねるかのような感覚で訊くだろう、

「……あら、珍しいですね」

「まあね」

彼女が縁側の方を見やる。

そこには日傘を差してくすりと笑う風見幽香の姿があった。

四季のフラワーマスター、風見幽香。

主な活動場所は太陽の畑で、どうやら花を操る能力を持っているらしい。

それ以外の事は”後々”訊こうと思っていたが、これは手間が省けたのかもしれない。

そう彼女は考えて幽香の方に向き直って正座した。

幽香は縁側で傘を畳んでおり、自身は書斎において、

縁側と書斎の畳の敷居を境に見立て、そしてその絶妙な位置が人間と妖怪の境目みたいだな、と思った。

「貴女、稗田阿求って言うのよね」

「ええ、それが私の名前です」

幽香の凜とした声が書斎に静かに響いて、溶ける。書斎の日陰と縁側を照らす日向。境界は更に深まっていく。

「幻想郷縁起を書いているんですってね」

「そうですね、今まさに書いてる途中ですね」

傘を畳み終って、半身だけ捻って彼女は阿求の方を向いてにやりと微笑んだ。

それが何をしているのか分からない阿求であったが、とりあえず良いことが起きる事はないだろうと思った。

妖精の悪戯ならまだ。しかし、得体の知れない妖怪に目を付けられると思うと今後どうしていいかと思ひ悩むのであった。

「私の事は書いてるのかしら、それともまだ？」

「いえ、まだ書いてませんが……」

「そう、それなら良かったわ」

阿求に向けた笑みを、更に深く、口を吊り上げた攻撃的な笑みで表情を上書きする。

今後どうしていいかかと悩んでいた阿求であったが、今後という道すらないのではないかと錯覚してしまう。

「これから私の事を書きなさい」

「へっ？」

何を言っているんだこいつは。

そう思わざるえなかった。いくら幻想郷縁起が人間の読み物以上に知られていても、

元はといえば、『人間が妖怪に勝つための資料』なのである。

それなのに妖怪の彼女が自分の事を書けというのは一体どんな見だろうか。

「そうねえ……。風見幽香は凄く強くて普通の妖怪とは桁違いに強い妖怪って書きなさい」

およそ叫び声に近い大きな声で。無茶苦茶な事を言ってきた。

これまで幻想郷縁起を編纂していく上で妖精や妖怪相手に話を聞いたり噂を聞いてきたが、こんなケースは初めてであった。

呆気にとられる阿求を尻目に風によって舞い上げられた半紙を手にとって、へえ、幽香は感心して目を細める。

「一番初めが妖精ってのはまあ気に入らないけど、およそ及第点ね。紫の前に私の事を書くこと。いいわね」

念押しされて、ほとんど脅しに近かったがそれを承諾することに至った。

元々寿命が短い上、今の世をあまり生きられないという事を知っていても命は命だ。

面倒なことになっちゃったな、と頭を抱えようとして縁側から目の前の机に身体を向ける。

「分かりました」

仕方ない、仕方ない、と自分に言い聞かせて、
気づいた時には幽香の姿が消えていた。
変わりに、夏の到来を喜ぶように太陽の光を浴びる向日葵の花が庭
中を埋め尽くしていた。

彼女なりの感謝の気持ちなのだろうか。
阿求にしてみれば嫌味としか受け取れなかった。

そんな訳で、風見幽香について調べることになった。
そう、調べることになった。

「……少し待ってくれれば色々と質問出来たのですが」
はあ。と初夏の陽光を燦々と受けている向日葵を投げやりに見つめ
て、阿求は溜息をついた。
日陰で涼をとる自分からは幽香という存在は眩しくて、眩しくて。
まるで台風だ、と思った。

まるで大きな向日葵みたいだ、とも思った。
それはまさしく夏に輝く太陽の花のような存在で。
あんなに期待させられても私の方が困ってしまう。
何故ならば、幻想郷縁起はまだまだ完成する見込みなど無いからだ。
少なくとも知るべき事は、まだ沢山ある。
それが何なのか、おぼろげな記憶では筆を執ることもままならない。
阿求はもう一度向日葵に目をやって、これが夢じゃないかと確認し
た。

頬を引っ張ってみたら、勿論痛かった。これが現実か、と頭を抱え
る。

「風見幽香」

太陽の花の名前を呟いてみる。

いやマイナス思考になつてはいけない。

元から風見幽香について、いやそれ以外のツワモノにも調査する予定であつたのだ。

だからこれは来るべき順番が早まつただけ。

そう思うことにしよう。

彼女は花を操る程度の能力を有してることから、人里の花屋に縁があるのではないか。

そう考えて阿求は早速花屋に向かい、風見幽香の事について訊いた。訊いた結果によると、彼女は思っていたより感じが良いという事である。

礼儀があつて、丁寧で、私もああいう女性になりたいわ。という花屋の答えには驚かざるえない。

もしかして風見幽香は二人いるのではないか、もしかして風見幽香は双子ではないのか、

とても「凄く強くて普通の妖怪とは桁違いに強い妖怪って書きなさい」と自分で言うような妖怪とは思えない。

しかし、彼女はこの花屋によく通っているらしい。となると、この話はきつと本当なのだろう。

とても礼儀があるようには、思えないけども。

結局、花屋以外でも風見幽香について聞きまわつたが目ぼしい情報は何も無かつた。

たまに人里にやってきて、花屋に立ち寄って、消えているのだという。

私の屋敷にやってきたかと思えば、ふらっと消えるかのように。彼女はある種の、自由奔放な生き方をしていると思えた。

例えば、博麗神社の巫女。

彼女は人にも妖怪にも縛られない。

彼女にとって全てが平等で、

彼女にとって全ては近くも、遠からずもない。

どこかふわふわしていて、浮いてる。

異変解決の理由もそうだ、彼女自身が何かしらのメリットが無ければ動かない。

紅霧も、春雪も、永夜も。彼女は大衆よりも自分自身を優先する。

それはまさしく自己中心なのだが、あまりの自由奔放さに、嫌な印象を受けなかった。

それがやはり博麗神社の巫女のカリスマ性というものなのだろう。

風見幽香はそれに近いものを感じた。

あの屋敷で出会った一瞬で、ここまで考えるのは野暮なものかもしれない。

けれどあの一瞬より前に、彼女と会ったような気がしてならなかった。

それは、何時の事だろうか。転生する前の事などもう思い出せないのに。

けど感覚として残っている。その感覚だけは、覚えていたい。

「そうだ」

彼女の元に行くしか無い。
会って、話をして、そして書く。

妖怪の山とは反対方面の奥地。そこに太陽の畑があった。
太陽の畑の名前通り、一面の黄色が阿求の視界を埋めた。
その黄色は全て向日葵であり、太陽のごとく輝いていて思わず溜息
が出てしまった。

人里からここまで長い道のりを歩いてきたが、なるほど。これは歩
いてきた甲斐があったというものだ。

辺りを見渡すと数多の妖精が日向ぼっこしていたり、向日葵の向き
を買って遊んでいて、そのあまりにも平和的な光景に、
ここに風見幽香がいる、という事を忘れてしまいそうだった。

自身の背より一個分大きな向日葵を掻き分けて、太陽の畑の中心に
彼女はいた。

可愛い花の傘をさして、こちらに向かって風見幽香は微笑んで
いた。

思えば、私が太陽の畑に入った時から彼女は待っていたのだろうか、
しかしそんな思いも掻き消すように、幽香は私の姿を見て開口一番
に本題へ入るのだった。

「出来た？」

本当ならここで、ご機嫌ようなんて洒落た挨拶でもするのかもしれ
ない。

初めから彼女のペースに乗られたままだったのだ。

「いえ、全然。だからこうして貴女の元に伺いに来た訳です。……
ところで、」

幽香を見たときに感じた概視感。

それについて聞いてみるのもいいのかもしれない。
時間はまだあるのだから。

「以前に貴女と会った気がするのですが、覚えていませんでしょうか？」

「……」

阿求の問いに、風見幽香は微動だにしなかった。

寧ろ、先程よりも何かこう……。何を言ったらいいのか言葉を選べるような、いや、警戒しているようにも見えた。

しかし阿求には警戒されるような事をしたつもりが無いので首を傾げるしか他無かった。

「えーっと……。私何か、変な事言っしまいましたか？」

困惑気味に、わなわなと阿求は手を振り首を振った。

変な事を言った覚えは無いのだが、この妖怪を怒らせてしまっ
何が起こるか分からない。

そもそも、長く生きた妖怪ほど大したことでは怒らないと思っ
たが、その認識を改めるべきなのかもしれない。

長い時を生きる妖怪は大したことでは怒らない、但し風見幽香は例
外。みたいなの。

そんな戯言じみた考えすら出てきたところで、漸く幽香は口を開い
た。

「いや全然、変な事は言っていないわ。全く以って、変な事など一
切、ないわ」

良かった。怒っていないようだった。

怒っていたらどうしようかと思ったが、その心配も杞憂だったということだ。

しかし幽香の台詞に違和感を感じつつ、彼女は阿求の返答を待たずに続ける。

「そうね。確かに、阿求なら。稗田なら。可能性はあるのかもしれないわね。死んで、死んで、死んで、巡り、廻り、回って、それでも記憶する貴女なら。観測し続ける貴女なら。ならこれは幸運とも云うべき出会いなのかもしれないわ」

……ん？

困惑が、思わず口をついで洩れそうになった。

そもそもとして、彼女が何を言っているのか分からなかった。

何か、違和感を伴う言葉。心臓がちくちくするような嫌な言葉。

体というよりは、存在全体で拒絶するような、言葉。

それを例えるなら、そう。……呪詛。

「えーっと、あの。幽香さん？」

これまで数々の妖精や妖怪を相手にしてきたが、この風見幽香。彼女は一体何者なのだろうか。

稗田なら？可能性？記憶、観測、出会い、それらに心当たりが無くて、全然無くて。

”絶対的に心当たりが無い”という奇妙な清清しさすら感じるのであつた。

「良かった、私だけだと思っていた。嬉しいわ、凄くうれしい。何もかも知っていて、それでいて知らない振りをするのは辛いものね。悔しくて、大変で、何も変えられなくて。けどそうでなければ廻らな」

「幽香さん!!」

咄嗟、普段出さないような大きな声で叫んだ。自分自身でもびっくりするくらい大きな声だった。

「あ」

呪詛は止まり、違和感が止み、音が止んだ。

幽香を遮り、阿求はしまった、と思った。しかし取り繕う術も無い。言及されて不快だったからなんて言ったら一体どうなることやら。いやそれよりも、ここは冷静に考えるべきではないだろうか。こほん、と咳を一つついて、阿求は会話を試みる。

「あの、その、ごめんなさい。……多分、勘違いだと思います」

とても、鎌かけるつもりで言ったなんて言えない。

でもその返答はあまりにおかしくて、曲がっていて、歪んでいて。けれどよく考えてみればおかしい。”会った事ありませんでした?”という質問にあまりの的外れな答え。

ここまでの外れだと妖精と話しているようにも思えてしまう。風見幽香は太陽の妖精でした、って冗談を思いついたが、言ったところで殺されるだろう。

「勘違い……? そうね、確かに。そんな事が在るわけが無いものね」

怒られると思ったが、阿求の意に反して幽香は素直に言葉を返すのだった。

寂しげに、目を閉じて、薄っすらと微笑む彼女。そんな幽香の姿を見て、少しだけ、ほんの少しだけ胸に響くものがあった。

罪悪感とか、困惑とか、色んなものが凝縮した、ちくりとした痛み

に阿求は言いようも無い何かを感じたのだが、それすら塵気楼のよ
うにばやけて染みこんだ。

「でも、幽香さんは心当たりあるのでしょうか」

「あるわ。遠い昔の事で、遠い未来の事で、貴女とこうして話すの
は少しだけだったけれど、一瞬を何度も重ねた時間は幾重もの永い
時へと形を変える」

「それはどういう」

「知りたい？」

それは、嫌で、甘くて、嫌な響きで、甘美な響きで、
幽香の白く透き通る手が、阿求の眼前に差し出され、それを握ろう
か、握らないのか考えて、

この突拍子も無い違和感と突然の場面に、心を惑わされ、徐々に、
頭が真っ白に溶けて、ああ、私は握ってしまったのか、と考えて、

「
」

すべてがまっしろにそまった。

思えば、全てが唐突で。

思えば、全てが思い通りで。

目標が出現すればそれを達成するだけの簡単なシーン。

切り抜かれた、場面。それは物語というよりは記録、結果を伝える

為だけの映像。

そこに、山も谷もありはしない。あるのはただの経過。ここからあそこまでをまとめた、ただそれだけ。

だからそんなつまらない書物を落とすのは、ちょっとだけ恥ずかしかった。

いくら知識のある私だって、あんなものを必死で書いて、それを捨てるものに託すなんて事、あまりにも無茶で。

思いの外、それは案外あっさり。

思いの外、それは存外にあれよと。

つまるところそれは在るべきして、手にする者に与えられた宿命、
と言えはいいのか。

いやそんな大層なものではない。これは、呪いだ。持つものに知らない現実を突きつけて苦しめる、ただそれだけの、もの。

けどそんなものを落とすのは、やはり、私が であつたからだろう。

後悔なんてする訳が無い、なんて無い。

どれもこれも都合が良過ぎるのだ。

これは既に結果であつて、経過は存在していない。

これは既に経過であつて、結果は存在していない。

どれもこれもが連続して、連続して、気持ちが悪い。

このお話は、これでお終い。

あのお話は、これでお終い。

でもきつと、このお話は始まっていない。

この後彼女は、一体どうなるかなんて。

春桜の彼女は何を思い、

太陽の彼女は何を思い、

吸血は、虹色は、深紅は、奇跡は、

そしてあの嫌な目をした彼女は、知らないのだから。

全てを知らず、

巡って、

廻って、

回って。

最後の最後まで知ることなく、

ただ、そう、在るがままに、

溶けて、

融けて、

解けて。

そして、また、変わることの無い、始点へと。

移り、映され、最後はせめて、素敵な夢を見れるように。

全てが解けて、消えて、また、廻る。

「 思い出した。 」

照りつける夏の日には、やはり冷たいものが恋しくなるものだ。巷ではお菓子で氷精を（文字通り）釣って、涼を取ったりしているのだという。

一度はそんな面白そうな事をやってみたいと思うが、如何せん妖精に何度も悪戯をされている身としては、もう妖精はこりこりだ。折角書き上げた書物に悪戯書きされたり、筆や紙を乱暴に扱われたり、留守なのを見計らって荒らし放題。

もう我慢ならないと、屋敷のいたる所に罨をしかけたのがいけなかったのだと今更になって思う。

屋敷に罨がしかけられ、思いの外簡単に引つ掛かる妖精たちは、一層興奮し、今度はどんな罨がしかけられているのか楽しみにやってくるのであった。

罨をしかけた身としては頭を抱える事態に、どうしたものかと悩み、そんな中、寺子屋の先生である上白沢慧音に指導をお願いしたりなど、それはそれは大変な夏の日であった。

「麦茶、要るかい？」

「ありがとうございます。それじゃお言葉に甘えて。」

一通り書き終えて筆を置き、さあ休もうかというところで慧音が麦茶を差し出した。

訊くことによれば、この麦茶は妖怪にも美味しいと評判で、妖怪の山から、鴉天狗が度々飲みにくる程だという。

そこまでして飲みに行くより、山から出る湧き水の方が手頃で、冷えて美味しいと思うのだが、やはりそこは妖怪らしいというか、人

間味溢れるというか。

そんな美味しいと評判の麦茶だが、楽しみにしてたのは私も同じである。休憩の際は慧音をお願いして貰いに行くほどだった。

「執筆の方はどうかな。」

「ええ、頗る快調です。慧音さんの麦茶で筆も早く進みます。」

「それはそれは。」

慧音がふと徐に阿求の書いた本を手に取る。

さらり、さらりと紙を捲り、「おお、これは」とか「なるほど」等と感嘆し、その本に魅入っていた。

彼女の反応にすっかり気を良くしたのか、阿求はくすりと笑って「今度、天狗にもお願いして印刷してもらうんです」と話し始める。

「色々な妖怪からあしるこうしるで、若干矛盾点とかあるのですが、そもそも人間と妖怪が共存し始めている今の幻想郷を見る限りにおいては、今までの幻想郷縁起より緩く、面白く書いてみました」「私も紹介されているのか。なんだか恥ずかしいものだ。」

「慧音さんはほら、寺子屋の先生やってますし人里の中でも有名人ですから。」

「そ、そうか。そうなのか……。有名人か……。っとあれ、これは。」

新しい幻想郷縁起を流し読みしていた慧音であったが、ふと気になるページがあったのか捲っていた手が止まる。

「阿求殿これは。」

差し出されたページは風見幽香のページであった。

阿求に手渡し、これはどういことだと静かに目で訴えていた。

新しい幻想郷縁起に目を落とすと、そこには風見幽香に纏わる記録や話が記述されており、これを見れば風見幽香がどんな妖怪なのか分かるといった具合だ。

「危険度がとんでもないことになっているが、彼女はそんなに危険な妖怪だったか？私の見る限りでは。」

「彼女は危険ですよ。危険の危険。大変危険です。そこはまあ、何と言いましようか。彼女、妖怪の賢者である八雲紫と互角に渡り合っただって訊きましたし。」

「ほう、そうなのか。幽香殿はあの紫殿と……。」

勿論、風見幽香からそんな事は訊いていない。

阿求が思うに、多分それはまだ起こっていないのだから。訊いたとしても「そうねえ、戦ったこと無いけど私の方が強いんじゃないかしら」なんて言う事だろう。

なのに、何故そんな事を知っているかと問われれば、それはまさしく知っているからであって。そこに理由なんて無かった。

強いて言うのであれば、一度見たものを忘れない程度の能力は転生という特別を省いてしまえば完璧であるという事であろう。

「それでは、幻想郷縁起が公開されるのを楽しみに待っていてくださいね。それまではお預けです。」

「そうだな、楽しみにしているよ。」

もし、これから先起こるであろう未来の事象を、事実を述べた時、それに対して何も知らない者は一体どんな反応をするのだろうか。述べた通りの反応をするのだろうか、もしくは何か抑止力みたいなものが阻んで不自然な反応を示すのだろうか。

幽香の言葉に対して、違和感を感じたように。「知る」事を拒絶するような違和感を。私以外の者にもそんな不自然な反応を示すのか。

もしそうだとしたら、その違和感は一切何なのか。誰が生み出したものなのか、それとも。

「それではまた。これからまだまだ暑くなりそうだ。阿求殿も気を付けて。」

「ええ、お気遣いありがとうございます。後で涼みに寺子屋によっても宜しいでしょうか？」

「喜んで。生徒達も喜ぶだろう。」

それとも、それは何か意図的なものが絡んできているのか。

阿求は寺子屋へ帰っていく慧音の後ろ姿を見送って、感慨深く溜息をついた。

しかしまあ、なんというか。

何もかも思い出したとはいえ、何かこう、重要な局面での記憶が抜け落ちているような気がしてならない。

ただ自身の記憶を整理するに、この幻想郷が何度も廻っていることは理解できた。

阿求が終わり、阿十となり、そして幻想郷が終わり、そして始まり、阿礼から阿求へとまた廻っていく。

それは途方も無い時間であるのだが、何度も何度もこの幻想郷は廻っているのは分かった。

しかし、その廻り廻る上で、幻想郷の住民は廻る前の記憶が無く、リセットされた状態で幻想郷へとやってくる。

そうすればまた1から始まる幻想郷となり、矛盾も何も無いのであるが、今回ばかりはちよつと違うようだ。

廻り廻る前の記憶を思い出したイレギュラー。過去であり、未来を知った矛盾者。

それはつまり、これから先起こるであろう未来を知っているということになるのだが、どうやらそうはいかないらしい。

前の幻想郷と、今の幻想郷。たとえ結末が終焉であろうと、経過は

全然違う道を辿ることもあるのだという。

多分それは、異変が起きたときに博麗の巫女が異変を解決するのか、白黒の魔法使いが異変を解決するのか、廻る度に色々な可能性を孕んでいるのだと、風見幽香は云っていた。

あまりのスケールの大きい、それでいて幻想郷の根幹の秘密に触れて自分の頭がどうにかなりそうであったが、

幽香から話を訊いて、抱いたイメージは、つまるところ幻想郷はやはり幻想郷だった。

今となっては、忘れ去られた者達の”永遠”の理想郷。と云うべきか。

「さて」

考えたいことは沢山ある。

しかし、思い出したからと言って寿命が延びるわけではない。転生の準備をしなくていいという訳にはいかない。

転生したあともこの記憶が引き継がれるとは限らない。寧ろ引き継がれないと思ってもいいだろう。

ならば、今のうちに何かすべきではないだろうか。

イレギュラーとしての、イレギュラーなりの役割を。

阿求は静かにそっと、筆を執った。

知ったところで、何になるのだという問いに、今は答えられないけれども。

けど、きつと、知ることによって何か変わるといふのならば。

私はその変わった世界を見てみたいのかもしれない。

何か、取り返しのつかない事があるならば、それを防ぐために。

幻想郷が幻想郷であるままに、私が私であるままに、

「八雲紫、貴女は一体。」

誰が為に少女は筆を執るのか（後書き）

仙台在住の影猫です。

仙台産の影猫です。

そんな訳で阿求話が終わりました。

幽香との一連の絡みもまた違う話で書きたいと思います。

あと、やっと書きたいことというか、東方短編集っぽくなってきました。

そろそろ話の解説とかしてたらうっかりボロが出そうなので今回は短いですが、この辺で。

2011/3/18 09:33

東日本大震災で今日やっと水が出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986/>

東方短編集 ~ The Different Story

2011年7月29日18時00分発行